

令和 5 年度「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」

劇場等文化施設を活用した孤独・孤立対策のための
地域交流拠点の整備 モデル調査事業

報 告 書

令和 6 年 3 月

公益社団法人 全国公立文化施設協会

目 次

はじめに.....	1
I. 本事業の概要.....	2
II. モデル事業の取組と中間支援の概要.....	3
III. 勉強会の開催.....	7
IV. モデル調査事業の全体概要.....	9
 モデル調査報告.....	10
板橋区立文化会館.....	11
ミュージア川崎シンフォニーホール.....	16
春日井市文芸館（文化フォーラム春日井）.....	21
伊丹市立文化会館（東りいたみホール）.....	28
三股町立文化会館.....	33
 アンケート調査結果.....	37
V. モデル事業を終えての成果と課題.....	81
VI. 今後に向けての検討～地域交流拠点の整備に向けて～...	86

はじめに

公益社団法人全国公立文化施設協会は、令和5年度において内閣官房より「「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」劇場等文化施設を活用した孤独・孤立対策のための地域交流拠点の整備 モデル調査事業」を受託いたしました。

本事業は、誰にでも起こりえる“孤独・孤立”の問題に対して全国各地に整備されている公立文化施設を、地域の多様な主体及びプラットフォームの一つとして捉え、持続的・安定的な支援者支援の場としての可能性を検討するためのモデル調査の実施を目的とするものです。

実施にあたっては、公立文化施設を地域におけるきめ細やかな支援の“場”として活用するため、中間支援組織としての弊協会及び地域団体の役割分担のあり方などの運営方法を検討するとともに、基礎勉強会を実施いたしました。また、モデル事業実施にあたっては、5地域を選定し、伴走支援者を派遣することで地域におけるニーズ及び効果の把握の手法を試行し、今後の進め方のモデルとなる仕組みを導き出すものとなりました。

本報告書は、本事業の概要をとりまとめたものです。劇場・音楽堂等に働く職員や文化行政担当者の皆様が、“孤独・孤立”という社会課題に対し、それぞれの職場で可能なアプローチを検討していただければ幸いです。

末筆ながら、事業実施にあたりご支援・ご協力をいただいた皆様に、心よりお礼申し上げます。

令和6年3月

公益社団法人 全国公立文化施設協会

I. 本事業の概要

1. 事業概要

誰にでも起こりえる“孤独・孤立”の問題に対して全国各地に整備されている地域の劇場・音楽堂・ホール等の公立文化施設（以下、「劇場等文化施設」という）が、地域の課題解決のプラットフォームとして、持続的・安定的に機能するためのモデル調査を実施し、支援モデルの構築を検討する。

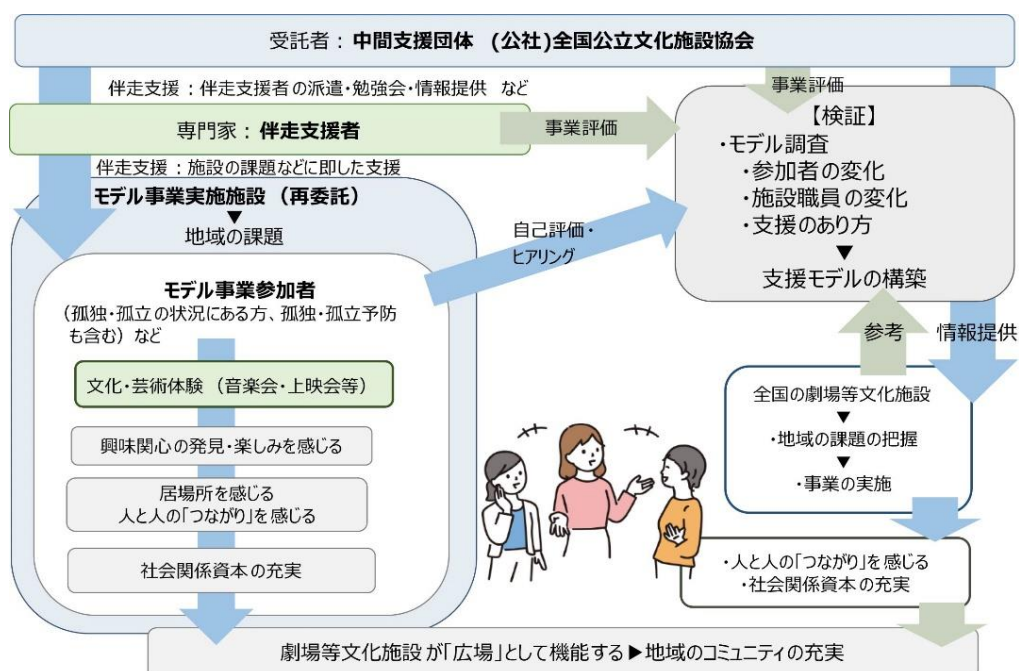
2. 事業の背景 ～劇場等文化施設に期待されている社会的役割～

劇場等文化施設は、文化芸術基本法（平成十三年法律第一百四十八号）、「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（平成二十四年法律第四十九号）及び劇場、音楽堂等の事業の活性化のための取組に関する指針（平成 25 年文部科学省告示第 60 号）において、地域の文化拠点としてだけでなく、コミュニティの創生（場としての役割）、社会課題の解決の場として期待されているが、対応が難しい現状にある。実施に至れない課題を踏まえ、劇場等文化施設が社会の課題解決のプラットフォームとして機能するための支援が必要である。

3. 事業の目的

劇場等文化施設が地域の課題解決の“場”として機能するために中間支援組織としてのきめ細かい支援のあり方や地域団体（地域の文化芸術関連組織、異分野関係団体や NPO 団体、など）との連携のあり方などの運営方法を検討するとともに、地域におけるニーズ及び効果を把握する手法を試行し、将来のモデルとなる仕組みを導き出すものとする。

事業の全体像



Ⅱ. モデル事業の取組と中間支援の概要

1. 劇場・音楽堂等における前提課題とその解決

劇場等文化施設で地域貢献活動の実施が難しい理由として、「経済的」「人的」「制度的」な要因があげられる。当協会が実施した調査では、福祉分野に関する専門知識を持った職員がいないこと、ノウハウがないことなどが課題としてあげられている。加えて劇場等文化施設側から社会的課題にアプローチをする必要性を感じながらも、その方法が分からない、特に文化関係以外の他組織・団体等関連部局との連携の仕方が分からない、という声が聴かれる。

この解決のために、劇場等文化施設における社会課題解決への企画実施に必要な基礎知識を教養する機会と、伴走支援者による個別の支援（人材育成、ノウハウの提供など）を行い、劇場等文化施設が地域における課題解決のプラットフォームとして機能するよう支援する必要がある。

2. 取組の概要

モデル調査にあたり弊協会は、中間支援団体として、以下の事業を実施した。

(1) モデル事業の対象地域の選定

- ・立地特性（大都市圏・地方都市等）、対象者属性、実施主体などを勘案し5地域を選定。

(2) モデル事業実施に向けた伴走支援の実施

① 勉強会の開催

- ・実施施設の職員を対象に、前提となる意義、必要性等の基礎知識を得る機会とする。

名 称：令和5年度「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」

劇場等文化施設を活用した孤独・孤立対策のための地域交流拠点の整備 モデル調査事業 事業実施に向けた基礎勉強会

開催日：令和5年11月9日（木）オンライン（zoom）形式

講 師：大西 連 氏（認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長）

小山田 徹 氏（京都市立芸術大学 教授）

進 行：吉野 さつき 氏（愛知大学文学部人文社会学科 教授）

② 伴走支援者の派遣

- ・実施施設の事業内容、実施にあたっての課題に個別に対応できる伴走支援者を選任し、派遣を行い、事業の助言、協力を行う。

伴走支援者	派遣先団体名	施設名
杉本 創 氏 (認定 NPO 法人市民シアター・エフ (深谷シネマ) 監事・生活協同組合東京高齢協 理事)	(公財) 板橋区文化・国際交流財団	板橋区立文化会館
西 智弘 氏 (一般社団法人プラスケア、川崎市立井田病院)	(公財) 川崎市文化財団	ミュージア川崎シンフォニーホール
古橋 敬一 氏 (愛知学泉短期大学講師／クリエイティブ・リンク・ナゴヤ理事)	(公財) かすがい市民文化財団	春日井市文芸館 (文化フォーラム春日井)
大澤 寅雄 氏 (合同会社文化commons研究所 共同代表)	(公財) いたみ文化・スポーツ財団	伊丹市立文化会館 (東りいたみホール)
永山 智行 氏 (劇団こふく劇場 代表)	三股町 (宮崎県)、(公社) 全国公立文化施設協会	三股町立文化会館

(3) 劇場等文化施設におけるモデル事業の実施

(選定：5 施設 8 事業 実施：5 施設 7 事業※)

① **事業名** 「映画上映会「おおやまレトロシネマ」ロビー開放事業」

実施日 令和 5 年 11 月 17 日、12 月 22 日、令和 6 年 1 月 19 日、22 日、23 日、24 日

会 場 板橋区立文化会館

実施者 (公財) 板橋区文化・国際交流財団

② **事業名** 「地域コミュニティ創出事業「ENGAWA プロジェクト」」

実施日 令和 5 年 12 月 12 日、令和 6 年 1 月 16 日

会 場 ミューザ川崎シンフォニーホール

実施者 (公財) 川崎市文化財団

※上記ほか「コンサートにおける介助支援サービス事業」も実施予定だったが、申込がなしのため、実施なし

③ **事業名** 「あなただけの“とっておき”のアルバムをつくろう・モヤモヤの正体 わたしと身体のつながりを知る」

実施日 令和 5 年 12 月 13 日、15 日、16 日、23 日

会 場 春日井市文芸館 (文化フォーラム春日井)

実施者 (公財) かすがい市民文化財団

④ **事業名** 「つくるスペース オマルトヴェンザーのふきだし」

実施日 令和 5 年 11 月 23 日、30 日、12 月 4 日、28 日、令和 6 年 1 月 11 日

会 場 伊丹市立文化会館 (東りいたみホール)

実施者 (公財) いたみ文化・スポーツ財団

⑤ **事業名** 「おいしい音のコンサート」

実施日 令和 5 年 11 月 21 日、22 日、12 月 13 日

会 場 三股町立文化会館

実施者 三股町（宮崎県）、（公社）全国公立文化施設協会

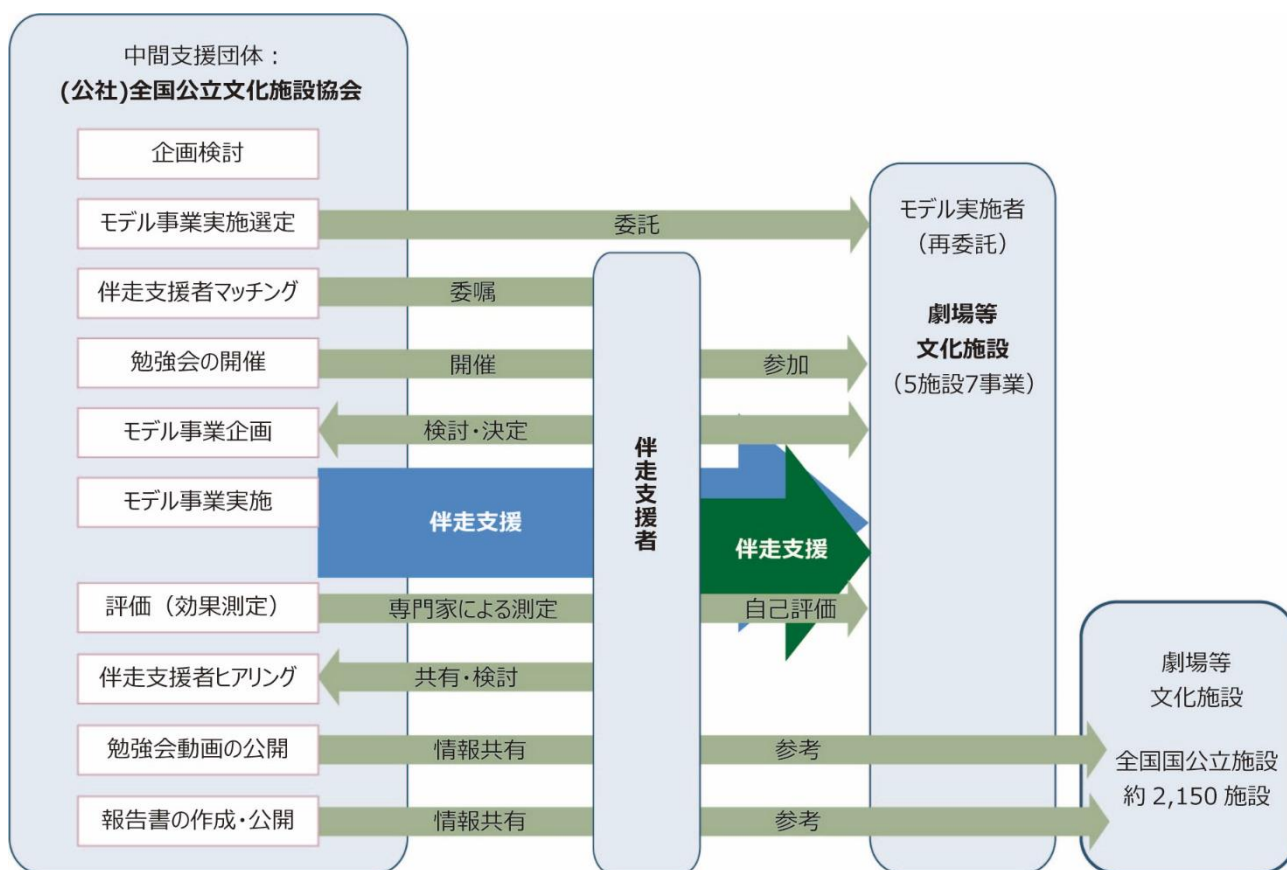
(4)効果の把握

- ・モデル事業の効果を検証し、全国モデルとするための課題等を検討する。
- ・参加者アンケート、関係者ヒアリングの実施

(5)報告書の作成

- ・実施効果及び課題等を整理し、モデル事例としてウェブサイト公開し、他の劇場等文化施設での事業実施を促す。

3. スキーム(実施体制と役割)



4. 期待される効果

文化・芸術活動は、自己肯定感の醸成や人間関係の再構築、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）を生み出し、生きる力を与えるといわれている。その効用をもちいることで、孤独・孤立の予防と、現在引きこもりの状態にある方の社会との関係性の再構築が可能であると考えられる。

劇場等文化施設が、家庭・学校・職場とは別に存在する、誰にでもひらかれた居心地のよい居場所として機能することで、他者との関わりに対してストレスを感じにくい、ゆるやかなつながりが創出される。芸術等文化施設での事業や文化活動に継続的に参加することで、さらに社会とのつながりを保つ機能を果たすことができ、その活動が、孤独・孤立の抑止と社会への復帰につながると想定される。

5. スケジュール

実施内容	R5年9月	10月	11月	12月	R6年1月	2月	3月
1) 事業計画	●▶ 詳細検討 支援者決定						
2) 実施団体選定	●▶ 選定/決定/打合						
3) 勉強会の実施	● 内容/講師選定		● 実施			●▶ 動画公開	
4) 伴走支援員	● 支援施設 マッチング	● 支援者打合せ・	● 支援(4回程度)			●▶ ヒアリング	
5) モデル事業	● 検討	● 詳細検討/準備	● 実施①	● 実施②	● 実施③ 自己評価	●▶ 報告/精算	
6) 事業評価 (効果検証)		● 評価方法検討	● 現地調査	● 現地調査	● 実施者自己評価 現地調査・ヒアリング	●▶ 評価 とりまとめ	
7) 報告書					● 構成検討	●▶ 作成	●▶ 提出

Ⅲ. 勉強会の開催

モデル事業実施施設の職員を対象に、事業の前提となる意義、必要性等の基礎知識を得る機会として基礎勉強会を実施した。

名称	令和5年度「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」 劇場等文化施設を活用した孤独・孤立対策のための地域交流拠点の整備 モデル調査事業 事業実施に向けた基礎勉強会
開催日時	令和5年11月9日（木）14：00～15：30
開催方法	オンライン（zoom）
登壇者	講師：大西 連 氏（認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長） 小山田 徹 氏（京都市立芸術大学 教授） 進行：吉野 さつき 氏（愛知大学文学部人文社会学科 教授）
次第	1. 挨拶 2. 事業概要の説明 ・モデレーターおよび講師紹介 3. 講義① 講師：大西 連 氏 ・国の孤独・孤立対策の動向について ・基礎知識や考え方 4. 講義② 講師：小山田 徹 氏 ・文化施設での事業、取り組み ・アートを通じた孤独・孤立対策へのアプローチ 5. 大西氏と小山田氏によるクロストーク 6. 質疑応答

- ・ 国の孤独・孤立対策の動向について
- ・ 基礎知識や考え方

講師：大西連 氏

貧困問題に取り組む NPO 法人の理事長である大西氏からは、「孤独・孤立」に対する基礎知識と、劇場・音楽堂等が地域のコミュニティづくりに取り組むことと、孤独・孤立がどのように結びつくのかについて講義がなされた。

20～50 代の、いわゆる働きざかりの年代の孤独感も高いという国の統計調査が提示され、福祉的な領域だけではなく、日々暮らし（地域）における人と人との「つながり」の強化が必要で、文化・芸術・スポーツ等による地域を豊かにする取組が孤独・孤立対策には重要であることが説明された。



大西連 氏

「劇場単体では難しいと思うので、地域の NPO や社会協議会、社会福祉協議会、企業、住民組織などと連携し、劇場・音楽堂等で提供できるリソースも活用して一緒に考えてほしい」と述べられた。

- ・文化施設での事業、取り組み
- ・アートを通じた孤独・孤立対策へのアプローチ

講師：小山田徹 氏

美術家、京都市立芸術大学の小山田氏は、自身の経験を通して、社会的な問題、悩み、個人の思い等を、交換し合う場所が世の中から少なくなっているのではないかと考えている。そのような中で「共有空間の獲得」をテーマにこれまで携わった Weekend Café や Bazaar Café、被災地での活動等の紹介と、それらも起源として実施した「焚き火」を使った場の創出について講義がなされた。

京都ローマシアターで実施された事例をもとに、「焚き火」場では、自律的でゆるやかな場を運営でき、また、点在させることで多様な方々が集まる場をつくる可能性についても述べられた。



小山田徹 氏

クロストーク・まとめ

公共性を帯びた劇場・音楽堂等は芸術創造の場であり、鑑賞・活動をする場である。社会的支援と結びついた活動になるとき、孤独・孤立を主目的にするのではなく副次的につながるのが自然である。国の施策としても地域でつながりを持てる場や機会があることで社会全体が豊かになるという発想であり、福祉的領域に寄せるということではなく、劇場・音楽堂等という場を通して、さまざまな共同を通して考えていくことに孤独・孤立対策の可能性があるのでないかと締め括られた。



吉野さつき 氏

IV. モデル調査事業の全体概要

施設名 (実施団体)	事業名	実施日時	対象	概要
1 板橋区立文化会館 ((公財)板橋区文化・国際交流財団)	映画上映会 「おおやまレトロシネマ」	11/17 12/22 1/19	高齢者、在日外国人等	・映画上映会(1日3回上映)を開催し、映画鑑賞後に映画の感想等を話し交流する。主に「レトロ」をテーマに作品選定をすることで、高齢者の外出の契機となることも目指す。
	ロビー開放事業	1/22 1/23 1/24		・キッチンカーによる飲食提供や健康測定、高齢者ファッションショー、ロビーピアノ、商店街イベント等を実施。 ・奈落や音響・照明調整室、映写室など日ごろ入場することができない大ホールバックヤードツアーを実施。上記の実施を通じて、文化会館を身近に感じてもらうとともに、地域の人々と交流を図る。
2 ミューザ川崎シンフォニーホール ((公財)川崎市文化財団)	地域コミュニティ創出事業 「ENGAWAプロジェクト」	12/12 1/16	コンサート前後に集まった方	・ランチタイムコンサートの前後に、来場者が気軽に立ち寄れる他者とのコミュニケーションの場「ENGAWA」を創出することで、「居場所」や「話し相手」、「つながり」を作ってもらい機会とする。
	コンサートにおける介助支援サービス事業※	11/26～ 1/16 (8公演)	病気、障害等により来場不安のある方	・専門の介助者(介護ヘルパー派遣サービス会社)と連携してサポートを試行的に無償提供し、高齢者が安心してお出かけできるようサポートし、「ホールとのつながり」や「社会参加」を維持する。
3 春日井市文芸館(文化フォーラム春日井) ((公財)春日井市市民文化財団)	あなただけの“とっておき”のアルバムをつくろう	12/13 12/23	高齢者や単身者、シングルマザー等	・写真家の浅田政志氏を招き、参加者が撮影した写真を持参し、写真をもう一度見返し、一つのアルバムを作り、人生の整理を行う時間を設ける。また、アルバムをお互いに発表しあい、知縁づくりにも貢献する。
	モヤモヤの正体わたしと身体をつながりを知る	12/15 12/16	ケアワーカー等 生きづらさを感じている方等	・もの書き、インタビュアーの尹雄大氏を招き、「聞くこと話すこと」を座学と実技で伝える講座を開催。 ・生きづらさを感じている人を対象として、自身のことを話してみる、誰かの話を聞くことを通じて、会話形式ではない方法でコミュニケーションを丁寧に考える講座を実施することで他者理解を促進。
4 伊丹市立文化会館(東りいたみホール) ((公財)いたみ文化・スポーツ財団)	つくるスペース オマルトヴェンザーのふきだし	11/23 11/30 12/14 12/28 1/11	不登校、ひきこもりの児童・生徒	・不登校・ひきこもりの児童・生徒に鑑賞や創作の機会を提供。制作課題はなく、参加者が自由に絵を描き、工作をする。参加を通じて、楽しみを見つけたり、心地良いと感じたりできる場所をつくることを目指す。 ・現代美術作家、Omult.Venzer(オマルトヴェンザー)氏が制作の相談にのるなど、お手伝いをするすることで、制作を通じた会話の醸成も図る。
5 三股町立文化会館 (三股町、(公社)全国公立文化施設協会)	おいしい音の音楽ワークショップ	11/21 11/22 12/13	不登校や家庭以外の居場所を必要としている子ども達とその家族	・食と音楽を融合させた対話形式の音楽ワークショップ。「食」や「ごはん」を作る時の音や食べる時の音、スーパーで流れる曲などをクイズ形式で楽しむ。 ・アーティストが参加者と交流しながら共に即興で歌を創作することや、ワークショップ後に施設内で一緒に夕食を食べることで、食をテーマとした一連の共有空間の場づくりを創出する。

※「コンサートにおける介助支援サービス事業」については、申込がなしのため、実施なし

モデル事業概要

板橋区立文化会館

事業名	①映画上映会「おおやまレトロシネマ」 ②ロビー開放事業
実施日	①11/17(金)、12/22(金)、1/19(金) 各日 10:30/14:30/18:30 ②1/22(月)、1/23(火)、1/24(水) 各日 10:00～16:30
実施会場	板橋区立文化会館
伴走支援者	杉本 創 氏 (認定 NPO 法人市民シアター・エフ(深谷シネマ)監事・生活協同組合東京高齢協 理事)
協力団体等	「おおやまレトロシネマ」実行委員会、遊座大山商店街振興組合、ハッピーロード大山商店街振興組合、NPO 法人東京まんまる、生活協同組合東京高齢協、板橋区長寿社会推進課



団体名	公益財団法人板橋区文化・国際交流財団
団体住所	〒173-0014 東京都板橋区大山東町 51-1

実施報告

a) 参加者情報

① 映画上映会「おおやまレトロシネマ」

対象者：高齢者施設等の入居者、独り住まいの高齢者、在日外国人等

参加人数 計 268 名（11/17（金） 81 名、12/22（金） 51 名、1/19（金） 136 名）

② ロビー開放事業参加人数 計約 312 名

キッチンカー 113 名（1/22（月） 33 名、1/23（火） 32 名、1/24（水） 48 名）

バックヤードツアー 19 名（1/22（月） 13 名、1/24（水） 6 名）

ファッションショー 約 30 名（1/22（月） 約 30 名）

フレイル簡易測定 約 50 名（1/22（月） 約 50 名）

商店街イベント 約 80 名（1/24（水） 約 80 名）

ロビーピアノ 約 20 名（1/23（火） 約 10 名、1/24（水） 約 10 名）

b) 孤独孤立予防のための対象者の変化

主に高齢者を対象とした事業展開であったなかで、久しぶりの外出の機会として参加をした方や、仲間と会い気持ちが明るくなったという方の声もあった。映画上映やロビー開放といった、気軽に参加をしやすい事業形態とすることで対象者の外出意欲の向上を望むことができる。

c) 事業実施による成果・効果

- ・ロビー開放事業は、一部既存事業であったが、「孤独・孤立対策事業」の趣旨を生かすために、バックヤードツアー、高齢者のファッションショー、フレイル簡易測定会を追加事業として企画し、従来の文化・芸術関係団体の枠を超えた事業の連携が実現し充実した内容となった。
- ・ロビー開放事業や映画上映会に対象者を招待するために、板橋区社会福祉協議会、福祉関係や子ども食堂等を運営している NPO 法人等に働きかけ、広報や募集の協力を依頼した。これにより、従来の文化事業の枠を超えたネットワークを新たに形成することができた。
- ・バックヤードツアーについては、舞台事務室の技術スタッフ（照明、音響、舞台）の協力を得て実施したが、日ごろ裏方で、顧客と直接接する機会が少ないため、直接顧客の声を聴くことができ、スタッフにとっても励みとなった。また、バックヤードツアーでどのような内容を提供するかについて、試行錯誤の上、段取りが決まったので、今後の事業実施に当たっては、今回のやり方を踏襲することができる。
- ・高齢者ファッションショーのモデルの中にも最近自宅で引きこもりがちな高齢女性が数人いて、ショーをきっかけに久しぶりに町に出てきて仲間と会ってすっかり元気になった方もおり、皆で再会を喜んでいた。

d) 事業実施中および今後の課題

- ・新たな事業を立ち上げるには、予算や人員の制約があり困難な面もあるが、既存の事業と連携することで、工夫を重ねてできることもあり、また、ロビー開放事業のような事業の大枠があれば、そこに何を加えるかは比較的自由に計画できる。年度途中でも新たな事業を実施しやすい。
- ・限られた予算、人員の中で事業を実施するには、他の団体との連携がポイントであり、いかにして、他の団体等を巻き込み、運営等を含めて分担して実施することが重要である。

e) 今後の展望等

- ・地元商店街とは、すでに様々な連携を行っているが、さらなる連携強化を図っていききたい。現在は、商店街振興組合との連携が主であるが、将来的には、商店街の個別の店舗と連携を強化し、双方がウィンウィンの関係を築けるような連携の仕組みを構築していきたいと考える。
- ・プラットフォームである区立文化会館が二つの大きな商店街の中にあること、レトロシネマの上映等すでに馴染んでいる存在であることで、地域社会との接点が広く多様であることが大きな意味を持ち、地域の孤独者孤立者への支援という点で、大きな可能性が確認できた。出来ることなら毎年続けていければと考えた。



映画上映会「おおやまレトロシネマ」



ロビー開放事業（ファッションショー）

伴走支援報告

a) 事業の準備段階(企画・広報等)での支援内容

- ・まず誰でもおこりうる孤立孤独者への支援の趣旨を、生活協同組合・東京高齢協理事会に、レトロシネマボランティアを通じ板橋退職教員の会、練馬観劇の会、中国人居住者の多いマンション管理者等に訴え、招待客を増やすことを依頼しチラシ配布を行った。約 2000 枚配布した。
- ・NPO 東京まんまるのファッションショーにはチラシポスター作りを支援し、特に地元商店街事務所への協力依頼をメンバーと一緒に働きかけた。

b) 事業の実施段階(運営・事後等)での支援内容

- ・レトロシネマボランティアの参加促進・シフト表づくりおよび、趣旨に基づく当日の観客への声掛けアンケートへの回収協力依頼を行った。
- ・終映後は特に高齢の観客との感想対話を促した（幸せの黄色いハンカチ、サイタマノラッパー、三丁目の夕日三部作）。映画好きな方とは楽しい時間になった。
- ・ファッションショーには、高齢のモデルのほか、外国人、子供達に参加を促し、運営上は、レトロシネマボランティアのほか高齢協の役員・事務局職員の積極的な関与を促し経験を通じ、地元商店街との協力を促進した。

c) 実施団体からの所見

- ・伴走支援者の杉本氏は、財団が実施する「おおやまレトロシネマ実行委員会」のメンバーでもあり、映画上映会の企画や当日の運営について協力を得ている人物である。そのため、映画上映会の運営についても、受付ボランティアスタッフの配置や役割分担表の作成をお願いしており、今回の事業実施に当たっても、気軽に相談ができ大変助かった。
- ・また、東京高齢協の監事でもあり、今回の高齢者ファッションショーを実施するに当たっては、当財団と東京高齢協の間をつなぎ、ファッションショーの実施主体であるNPO法人東京まんまるの事業企画・運営を直接に担当してもらった。
- ・杉本氏とのディスカッションの中で、それぞれの団体には、キーパーソンとなる人がおり、それが誰であるかを発見し、その人を中心として連携をしていくことの重要性を認識した。

d) 伴走支援者からの所見

- ・やはり準備期間が短かったので、孤独孤立者支援という趣旨が、受け止める各組織へ情報が行き届かず残念な面があった。この点もっと早くから知っていればと、参加者から指摘された。その分次回への期待感が高いことも確認できた。

おおやまレトロシネマ 上映予定

	上映9/22(金) 発売8/18(金) 板橋区立文化会館大ホール パッチギ!
	上映11/17(金) 発売9/22(金) 板橋区立文化会館小ホール 幸福の青いヘンカデ
	上映12/22(金) 発売11/17(金) 板橋区立文化会館小ホール サイタマノラッパー
	上映1/19(金) 発売12/22(金) 板橋区立文化会館大ホール ALWAYS 三丁目の夕日
	上映2/16(金) 発売1/19(金) 板橋区立文化会館大ホール ひまわり (予定)

各回3回上映 10:30~14:30~18:30~

全席自由1,000円

文化会館バックヤード 見学ツアー 参加者募集



①2024年1月22日(月)
②2024年1月24日(水)
【時間】11:00~14:00~
文化会館バックヤード見学ツアーでは、照明室、音響室、映写室、奈落など、舞台上で記念撮影もできます。

■対象:どなたでも参加できます。
※小学校3年生以下は、保護者同伴で申し込んでください。
■定員:15名(先着順)
■持ち物:無し ■参加費:無料

会場 板橋区立文化会館 板橋区大山東51-1 (文化会館内)
☎ 03-3579-3005 【受付】9:00~17:00
【定休日】12月29日~1月3日

翔んで おおやまファッションショー



多世代、年齢男女国籍不同 恵いす参加、親子、兄弟、グループ参加もOK
お気軽に入り混じりの衣装でどなたも参加できます！2024年新春を地元大山商店街の皆さんと一緒に！にぎやかに！"多世代ファッションショー"でおしゃれしてみ身ともにリフレッシュ！いくつになっても輝き続ける人生を！

2024年1月22日(月) 14:30~15:30
板橋区立文化会館 ロビー
(〒173-0014 東京都板橋区大山東1 51-1 電話: 03-3579-2222)

出演者: 東京高輪協 ыйよや華やく俱樂部 地元商店街、一般応募者
主催: 生活協同組合・東京高輪協、NPO法人 東京まんまる
共催: 公益財団法人板橋区文化・国際交流財団 (公社) 全国公立文化施設協会

*企画のエンタトニリーをこ購入の上、2023年12月15日(金)~2024年1月10日(水)までに、生活協同組合・東京高輪協までFAXにてお申し込みください。(先着30組)
企画協会の場合は: 生活協同組合・東京高輪協 (上・日、年末年始はお休みです)
TEL: 03-5904-9011 / FAX: 03-5904-9012

公益財団法人 全国公立文化施設協会 5 年要
「劇場文化施設を活用した芸術普及活動のためのおおやま地区の劇場モデル構築事業」

人生100年を、長く元気に

おためしフレイルチェック

握力


片足立ち上がり


指絡つか


1月22日(月) 11:00~14:30

- 所要時間は、1人10分程度です。
- 申込不要です。当日直接会場へお越しください。
- お住まい・年齢を問わずどなたでもご参加いただけます！

会場 板橋区立文化会館大ホールロビー

内容 フレイルチェック体験 (詳細は概要をご覧ください)

問合せ先 板橋区 健康生きがい部 高齢社会推進課 シニア活動支援係
電話: 03-3579-2376 FAX: 03-3579-4153
Eメール: ki-senior@city.itabashi.tokyo.jp

広報物 (チラシ)

ミューザ川崎シンフォニーホール

事業名	地域コミュニティ創出事業「ENGAWA プロジェクト」
実施日	12/12(火)、1/16(火) 11:00～14:00(コンサート開場前～終演後)
実施会場	ミューザ川崎シンフォニーホール
伴走支援者	西 智弘 氏(一般社団法人プラスケア、川崎市立井田病院)
協力団体等	「音楽のまち・かわさき」推進協議会(ENGAWA ボランティアスタッフ派遣)



団体名	公益財団法人川崎市文化財団
団体住所	〒212-8554 神奈川県川崎市幸区大宮町 1310 ミューザ川崎

実施報告

a) 参加者情報

対象者：ホールへの来場者等

参加人数 計 約 150 名（12/12（火） 約 50 名、1/16（火） 約 100 名）

b) 孤独孤立予防のための対象者の変化

実施時間をコンサートの前後に設けたことで、気軽に立ち寄れる雰囲気を作り出した。思いのままにゆったりと過ごしてもらったなかで、スタッフが笑顔で声かけをしたりするなど、親しみやすい工夫をしたことで、コンサートやミュージアム川崎のことだけでなく、個人的なお話をする方や、本当にそこで誰かと仲良くなれたらよいなといった声も聞かれた。他者とつながりを持とうとする気持ちを後押しする効果があったと考えられる。

c) 事業実施による成果・効果

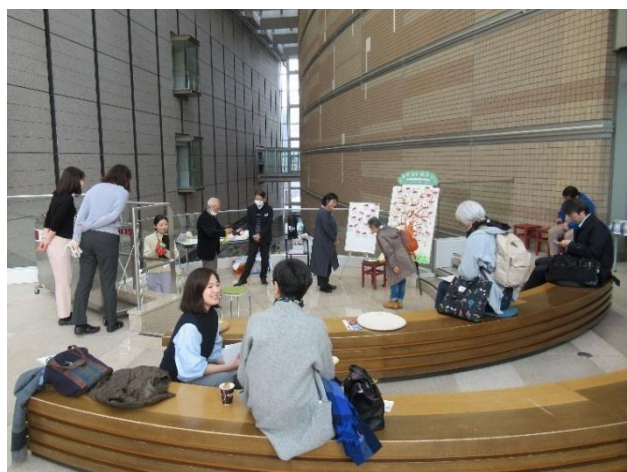
- ・居場所や話し相手、つながりをつくる場の創出を目指し、「ENGAWA」と銘打った交流の場をコンサート前後に設けた。参加者からは「一人で来て楽しさが広がった」「知らない人同士での会話は貴重」といった声が寄せられ、孤独・孤立を予防する場としての可能性を大いに感じる事ができた。また、「予算をあまりかけずに交流の場をつくる事例」として、他自治体のホール職員にも関心を持っていただくことができた。
- ・職員にとっては、初めて孤独・孤立対策を主目的とする企画であり、改めて地域社会においてホールが果たすべき役割を考えるきっかけとなった。地域で活動する医療やアートの専門家の方々にも参加してもらったことで、今後の連携の可能性を相互に見出すことができた。

d) 事業実施中および今後の課題

- ・「どのように会話を生み出すか」という課題に対しては、会話のきっかけとなる参加型コーナーを設置した。地元アーティストによる木の絵や、過去にホールで公募した音楽カルタの読み札を掲示するなどビジュアルにもこだわりながら、「川崎の思い出を書いてみませんか」「カルタの読み札を書いてみませんか」と声掛けを行い、昔の川崎の様子や当日来場した動機など様々な話を広げることができた。
- ・初回で感じた人員不足と会話スキル不足を補うため、伴走支援者のほかに、対話型鑑賞に取り組むアートコミュニケーターと「音楽のまち・かわさき」推進協議会に登録している音楽ボランティアに参加を依頼し、2回目は最大8名体制で臨んだ。
- ・今後の課題は、参加者同士が自発的に会話できるような関係づくり、飲み物の提供にかかる費用、アートコミュニケーター等人件費の捻出、事業の継続のための体制づくり等が挙げられる。

e) 今後の展望等

- ・ENGAWA は音楽ボランティアスタッフが活躍する場としても適しているとわかったことから、今後は当財団に事務局を置く「音楽のまち・かわさき」推進協議会が実施主体となり不定期に継続開催していくことも可能と考える。
- ・高齢者の来場が顕著な川崎能楽堂や、ジャズ愛好家が多く参加するフェスティバル「かわさきジャズ」など、ENGAWA の目的とマッチする近隣施設やイベントは市内に数多くあるため、実施場所やスタッフの顔触れにこだわらず、多様な ENGAWA が各所の公演の前後に出現するという展開も想定できる。
- ・また、川崎市は来年度から孤独・孤立対策も視野に入れ「アートコミュニケーターの育成」に取り組むことから、多様な対話を重視する姿勢を身に着けた育成講座修了生の活躍の場として連携できないか模索したい。地域団体については、参加者が興味に応じてゆるやかにつながることができるよう団体の紹介を工夫したい。



ENGAWA 事業



地元アーティストによる木の絵を使った参加型コーナー

伴走支援報告

a) 事業の準備段階(企画・広報等)での支援内容

- ・ENGAWA 開催の具体案について、施設担当者と対面で打ち合わせを行い、アイデアのブレインストーミングとして参加した。

b) 事業の実施段階(運営・事後等)での支援内容

- ・当日はミュージア川崎シンフォニーホール入口手前で ENGAWA の運営スタッフとして参加した。ランチタイムコンサートの来場者に ENGAWA の参加呼びかけを行い、コミュニケーションを取り、来た目的の聞き取りや雑談を行った。雑談を行う中で来場者同士も会話出来るようにファシリテーションを実施した。
- ・実施後、オンライン(zoom)で「ENGAWA 振り返り会」に参加し、以下のフィードバックを行った。
- ・フィードバック内容としては、良かった点として、コーヒーやかるたで来場者と ENGAWA の接点を作っていることや、コーヒーや雑談を拒否できることにより、敷居を下げていることが挙げられた。
- ・改善点としては、アンケートを取るタイミング等、来場者に配慮が足りなかったもので、アンケートの侵襲性を理解した上でタイミングや取り方に工夫をすること、事前に親和性がある資源(音楽サークル等)になりえる団体チラシの準備や窓口を準備することが挙げられた。

c) 実施団体からの所見

- ・人と人とのつながりを処方し元気にするという「社会的処方」の観点から孤独・孤立対策に取り組む医療従事者団体「一般社団法人プラスケア」の代表者に伴走支援を依頼し、事前指導として12/6に職員研修を開催（テーマ「公立文化施設がコミュニティ創出に取り組むことの社会的意義」、参加者15名）。
- ・「“ケア”は医療の分野だが、同じくらいの効果を持つ“ケア”はアートの力でできること。」という言葉に励まされるとともに、「より効果的な社会的処方のためには、参加者一人一人に役割を持ってもらうことや、すでにある個々の活動同士をつなぐネットワークづくりが重要」といった、公立文化施設に求められる支援機能にもつながるお話が印象深かった。
- ・課題に対しては、椅子を増やし楕円形のように配置することで、対スタッフではない会話が生まれやすくなるのでは、といった空間づくりのアドバイスや、もっと話したいという参加者には音楽好きのクラブを紹介するなど、継続的につながる先の情報を提供できると良いといった助言があった。そのほか、居場所づくりの事例を数多く見てきたご経験から「事業の終わり方」についても想定が必要という指摘もいただいた。

d) 伴走支援者からの所見

- ・ランチタイムコンサートを接点に初対面の人がお話できる場を全体で運営できていたと思う。今後のステップとして継続開催の方法を模索するか、単発開催の場合でも別途継続的に誰かと繋がり続けることができる場を準備できるよう、引き続き協議ができれば嬉しく思う。



広報物（チラシ）

「コンサートにおける介助支援サービス事業」について(報告)

ENGAWA 事業のほか、「コンサートにおける介助支援サービス事業」も実施予定であったが、申込がなかったため、実施ができなかった。

コンサート来場時における高齢者の困難な状況（移動、排せつなど）が来場のバリアになっている。ホールが専門の介助者と連携してサポートすることにより、高齢者が安心してお出かけできるようサポートし、高齢者の方の“ホールとのつながり”や“社会参加”を維持していくことを目的とするものである。12月初旬から1月にかけて実施するミュージア川崎シンフォニーホール自主公演（8公演）等において、介助者によるサポートを試行的に無償提供予定であった。

告知期間が短期であったこともあり、今回は申込者が無しという状況で実施が叶わなかったが、事後の友の会アンケートにて申込に至らなかった理由を調査した。

結果は、申込をしなかった理由は「自身には必要がなかった」が圧倒的に多かった一方で、「将来利用したいか」という問いに対しては、6割近くの方が肯定的に答えたという状況であった。外出が不便な状況になったとき、ヘルパーに頼ってまでホールには行かないといった声も一定数あったため、日常から「ホールは多様な人が訪れる場所」という寛容な雰囲気醸成していくことも必要である。

いま現在外出に伴う介助が必要な状況にある方々にとって利用しやすいサービスにするために、申込方法や内容についてさらに精査や別途調査の必要があるが、機会を提供し続けサービスの認知を進めていくことも重要である。

春日井市文芸館（文化フォーラム春日井）

事業名	①「あなただけの“とっておき”のアルバムをつくろう」 ②「モヤモヤの正体 わたしと身体のつながりを知る」
実施日	①12/13(水)10:00～14:00、12/23(土)10:00～14:00 ②12/15(金)13:30～16:30、12/16(土)14:00～17:00
実施会場	春日井市文芸館(文化フォーラム春日井) 会議室、文化活動室、特別室
伴走支援者	古橋 敬一 氏(愛知学泉短期大学講師／クリエイティブ・リンク・ナゴヤ理事)
協力団体等	春日井市健康福祉部地域福祉課・青少年子ども部子ども家庭支援課、春日井市社会福祉協議会



団体名	公益財団法人かすがい市民文化財団
団体住所	〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町 5-44

実施報告

a) 参加者情報

①「あなただけの“とっておき”のアルバムをつくろう」

対象者：高齢者や単身者、シングルマザーなど

参加人数 計 27 名（12/13（水） 10 名、12/23（土） 17 名）

②「モヤモヤの正体 わたしと身体つながりを知る」

対象者：生きづらさを感じている人など

参加人数 計 24 名（12/15（金） 19 名、12/16（土） 5 名）

b) 孤独孤立予防のための対象者の変化

アルバム製作でこれまでの写真を通じて自己整理をしたり、自身で感じているもやもやした気持ちを他者と共有することで少人数制でゆるやかな交流を図ることができた。参加者のペースを大切にし、話しやすい状況を生み出した。自分の話を少しでもすることができてよかった、勇気を出して質問ができた等、自身のことを話したり、質問をする喜びを感じたという声もあったほか、講師や参加者の話を聞くことができ、他者理解への意欲も伺うことができたと考える

c) 事業実施による成果・効果

- ①予定した対象者が集まってくれるかどうか不安があったが、市役所や関係組織の担当者に積極的に相談し、想定した方に集まってもらうことができた。一人一人に声がけすることが最速だと感じた。意外にも、想定外の世代や対象が少数交わることで、参加者が自身のレッテルから離れることができたようで、世代間交流や居場所の心地よさにつながった。また、お昼ご飯を挟むことで WS 以外の余白の時間を作ることができ、話しやすくなったようだ。WS が終わってから完成したアルバムを見せにきてくれた人も数名おり、文化拠点としての意義を感じた。
- ②「モヤモヤ」という言葉にシンパシーを感じてくれる人が多く、一般向けは平日午後にも関わらず定員オーバーとなり、受入人数を増やした。10-20 代向けは対象者に近い大人へ呼びかけをしようと、自立援助ホームや定時制高校の先生、街角保健室の活動をしている人たちに話にいった。結果的に講師の SNS や口コミ、個人塾の先生の紹介、当財団の自分史相談を介した方達が集まってくれた。講師と伴走支援者のファシリテーションの賜物で、普段はなかなかできない根源的な話に発展し、引きこもりの子どもたちの気持ちを話してもらえる場づくりができた。

d) 事業実施中および今後の課題

- ・両講師ともフットワークが軽く、準備期間が短いにも関わらずやり取りがスムーズだったことは、短期間で実施可能となったキーポイントだったと思う。
- ①高齢者は WS への参加を煩わしく感じられる方が多い。アルバムを持ってくるだけでなく、整理すること（生前整理も含む）じたいを億劫がる声も多く聞かれた。そのためハードルを下げるために、参加料を安価にした。しかし今回の参加者はアルバム作りに意欲をもつ文化に理解のある層（最高齢で 80 代前半）であったため、料金設定は見直す必要がある。また、スマホの機種がバラバラで、プリントすることへのハードルが高く、PC スキルに長けたスタッフの配置が必要だった。浅田氏の関係でキヤノンマーケティングジャパン株式会社の機材協力を得ることができたため、プリンタやインク等の雑費の経済的負担が少なくなった。
- ②プライベートな話をするためには、20 名は多く、10 名以下が理想だと感じた。そのため 10-20 代の回は急ぎょ予定よりも狭い部屋に移動し、大正解だった。また、「モヤモヤ」は一回切りでは解消できない。自身で熟考する時間を取りつつ、ある程度の間隔で継続的に人と向き合う必要がある。年に 2~3 回程度の実施をすることで孤独・孤立を防ぐことができると感じた。

e) 今後の展望等

- ①今回は取えて、文化施設に来る機会の少ない高齢者にアプローチした。主に近隣の老人会に 7 件通ったが、そこからの参加者はおらず、老人会の健康体操の講師が参加してくれた。文化に馴染みのない高齢者は、文化施設に来るハードルが高いので、まずは地域の集会場など馴染みのある場所で事業開催（アウトリーチ）→文化施設という動線を作ることが必要だと感じた。
- ②実施にあたって相談した自立援助ホームの担当者は「自立援助ホームに来る前の対応策があれば…」と漏らしていた。引きこもりの子どもを持つ当事者で、若者の働く場所を支援するカフェオーナーは「継続して連携してくれる事業体が無い」と言われた。特に 10-20 代の引きこもりについては、学校や自宅だけではケアができないことを痛切に感じた。文化施設を第三の場所として認識してもらうためには、サステイナブルな活動が必要である。

大人向けについても同様に、特に後期高齢者から「誰とも話す場所がない」など悲痛な声も届いた。ただし、文化フォーラムまでの交通手段に問題があるとのことで、断念する方もいらっしゃる聞き、そういう意味でもアウトリーチできたら良いが、そこまで職員の手が回るかが課題である。



「あなただけの“とっておき”のアルバムをつくろう」



「モヤモヤの正体わたしと身体つながりを知る」

伴走支援報告

a) 事業の準備段階(企画・広報等)での支援内容

- ・事業プロデューサーの意図を理解し、必要に応じて、客観的な視点からの意見を述べさせていただいた。事業①と②では、講師のキャラクターも技能も異なり、また企画の内容も異なるものであったが、その二つの事業に通底する事柄を見極めることで、事業コンセプトを企画から照射することを思考していた。それが結果的に事業参加者へのメッセージになると考えたためである。このメッセージが、そのまま企画や広報の軸にもなるので、まずはそこが重要だと考えた。
- ・今回の事業フレームは、「文化施設という立場からの孤独・孤立支援」であった。課題としては、いくつか挙げられるが、①既存の文化事業は、必ずしも孤独・孤立者を対象にはしていない、②文化施設の活用であるため、集客という形式で孤独・孤立というどちらかと言えば動けなくなりがちな状況にある人を呼び集めなければならないという 2 点は非常に明確な課題であった。
- ・講師は上記 2 つの課題を解決できるポテンシャルを有する方々がセレクトされていたので、この講師の方々の事業を参加者が享受することで、「孤独・孤立」が緩和される、あるいは何らかの励ましを与える事業メッセージをチラシのコピーやタイトルの中に反映できるようにアドバイスさせていただいた。
- ・結果的に二つの事業は、「私」という個人が、「他者」との思い出やつながりの中に存在していることを再認識できるような「アルバムづくり事業」。そして、「私」という個人の中にある「他者性」に気づくことで、人間存在の共生性への気づきを促す「モヤモヤセッション」という 2 種類の個別性およびその関連も見られる 1 つの事業になった。
- ・チラシコピーへのアドバイス、プロデューサーの講師との企画調整への参画、サポートという事柄を支援した。アルバムづくり事業への参加者には、企画者側の意図を伝えるための動画視聴なども提案、協働実施をした。
- ・プロデューサーの意図、あるいは講師のキャラクターによって、伴走支援に求められることは、可変的であると言える。しかし、その総合性で事業を生み出していくマネジメントは、非常に創造的なプロセスだと感じた。

b) 事業の実施段階(運営・事後等)での支援内容

- ・アルバムの制作理由や完成品を共有する場面では、個々のプライベートなストーリーが共有され、その中で個人が大切な人とのつながりを再確認する、またその価値を居合わせた人々が再確認できた素晴らしい時間になっていた。そうした気づき等については、プロデューサーや講師にフィードバックした。
- ・アルバムづくり事業に参加した方が、ご家族の遺品を「見せたい・貰って欲しい」ということで、わざわざ届けに来てくれた際に、その対応をさせていただいたが、思い出を振り返り、他者と共有することで、処分する他なく、使い道のなかった遺品が、子どもたちやまったく文化背景の異なる他者たちを喜ばせるようなシーンにも遭遇した。そこには、文化拠点施設が地域交流拠点となるための一つのヒントが隠されているようにも感じられた。

- ・モヤモヤセッション事業については、1 日目の大人バージョンと 2 日目の若者バージョンでは、伴走支援の役割が異なった。参加者からは、事前に数行程度の参加理由が提出されていたが、「孤独・孤立」にまつわる個々の理由が、かなりプライベートなものが多かったので、それをセッションの中でどれだけ共有できるのか、あるいはできないのかを事前に推し量ることができなかった。結果的には、全て講師の取り仕切りと参加者の応答にゆだねるしかなかったため、プロデューサー、講師と話し合っ、支援としては、とにかく場をリラックスさせる、そのためのツールとして、蓄音機とコーヒーマルを持ち込んで、その場の参加者の要望に応じて、音楽を流したり、コーヒを淹れたりすることになった。
- ・モヤモヤ事業の一日目は、参加者の皆さんにコーヒを淹れること以外のことはしていないが、漂う香りも含めて、一人ひとりが思考を深めるセッションの場づくりには何らかの良効果をもたらしたのではないかと考えている。講師からは、セッションの中で、話を振られることもあったので、それに対して応じることもあった。それが講師や参加者の一つの気分転換になったり、小休止としても機能していたのかもしれない。
- ・モヤモヤ事業の2 日目は、1 桁年齢の少女から 20 代の若者まで、中には「死」を日常的に口にす、あるいは意識している参加者も含まれており、緊張を抱える中でスタートしたセッションとなった。
- ・こちらは少人数だったこともあり、会場をより親密感の結びやすい小規模会議室に変更した。セッションの中では、参加者たちが積極的に自己開示を行って、一段深いコミュニケーションが図られたと感じた。例えば、日常生活の中で「死」について語り合うことは、タブー視されており、内容以前にトピックにあがることさえはばかられてしまう。本来は「死」は「生」の裏返しであり、「死」を問うことは、自分たちの生き方を考えてく重要な機会ですが、現代社会では、それが忌み嫌われて、それを語ることや触れることができない。そこにコミュニケーションの断絶があるのかもしれない。
- ・同じく、人に対する批評は、本来はお互いのより良生活のためには必要な行為だが、そうしたことを教えられる人や学び合える機会そのものが少なくなっているのが現代の特徴なのかもしれない。結果、孤独や孤立は益々深まってしまふ。セッションの参加者は、その社会構造の犠牲者であると感じた。しかし、同時にこうした事業に関心をもつ参加者を支援していくことで、社会の中の孤独や孤立を少しで軽減するきっかけが作り出せるかもしれないという可能性も感じた。
- ・セッションの中では、こうした気づきをフィードバックすることはしなかったが、参加者の方々の「孤独感や孤立感」が少しでもやわらぐことになったのであれば、幸いである。

c) 実施団体からの所見

- ①アルバムを作成する上での準備内容がかなり多い（過去の写真を選ぶ、スマホから写真を選定する、それらを印刷・複写する、アルバムに貼る）ことから、伴走支援者より、参加者に向けて動画での説明を配信するようアドバイスを受けた。講師・伴走支援者・担当者3人で30分程度の動画を配信、全員が見てくれた（忙しい母子家庭等は車の中で聞いたらしい）ようで、当日の運用もスムーズだった。自宅で動画を見ることのできない高齢者については、来館いただき対面で説明した。来館については、時間に余裕があるとのこと、むしろ参加者側が積極的だった。
- ②伴走支援者からは、参加者をリラックスさせるための提案（飲み物の提供、音楽をかける、無駄話をするための材料等）をいただき、実施。特に10-20代の回については、他の部屋に比べて少し照明が暗く、互いの距離をうまく保てる部屋に変更したことで、対話が成立した。また飲み物の提供も、飲む行為までのプロセスを楽しむことで、主催側と参加者との距離が近くなるような工夫を施してもらった。

d) 伴走支援者からの所見

- ・この種の事業における伴走支援は、非常に可変的あるため、最初からその役割を固定することは難しいと感じた。しかし、今回は、その可変性を逆に開くことができたので、大きな可能性を感じた次第である。
- ・事業の感想めいたものは、既に上述しているが、孤独や孤立という「社会的課題」に対して、一見すると専門外である文化施設や文化事業に関わることは、意外と刺激的で、文化領域にとっての本質的な取り組みを考える絶好の機会になると感じた。



広報物（チラシ）

伊丹市立文化会館（東りいたみホール）

事業名	つくるスペース オマルトヴェンザーのふきだし
実施日	11/23(木)・30(木)、12/14(木)・28(木)、1/11(木) 各日 10:30~12:30
実施会場	伊丹市立文化会館(東りいたみホール)会議室1(11/23・30、12/14・28) 伊丹市立総合教育センター 教育支援センター「やまびこ」(1/11)
伴走支援者	大澤 寅雄 氏(合同会社文化コモンズ研究所 共同代表)
協力団体等	伊丹市社会福祉協議会、伊丹市教育委員会



団体名	公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団
団体住所	〒664-0895 兵庫県伊丹市宮ノ前1丁目1番3号

実施報告

a) 参加者情報

対象者：不登校・ひきこもりの児童・生徒

参加人数 計 12名

(11/23 (木) 1名、11/30 (木) 0名、12/14 (木) 0名、12/28 (木) 3名、1/11 (木) 8名)

b) 孤独孤立予防のための対象者の変化

毎週木曜、製作スペースとして常に開放したことや、制作も必須ではなくあくまで自由としたことで、思い思いの居場所づくりを行った。アンケート結果からは伺えないものの、思い思いに工作に取り組む中で参加者の表情から、緊張も和いだ様子が見られたことや、絵をほめてもらえたといった声も聞かれ、自発性や創作意欲も向上する傾向が見られた。

c) 事業実施による成果・効果

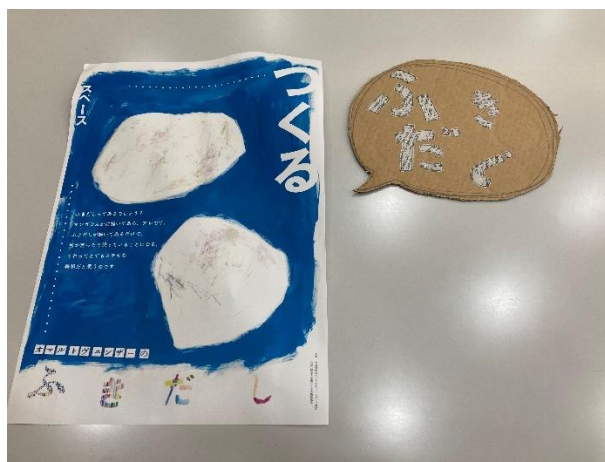
- ・実施前、アーティストへ作品の完成を求めるものではなく、居場所づくりとして取り組みたい旨を伝え、実際にそういった雰囲気に参加者が感じられる機会を提供できたものと思う。
- ・伊丹市社会福祉協議会と連携し、伊丹市内で活動している不登校支援のNPOなどに協力を呼び掛け、対象となる児童生徒にアプローチを行ったが、参加になかなか繋がらなかった。
- ・事前に伊丹市教育委員会へ協力の依頼を行い、実際に現場を見学いただいたことで、不登校の児童生徒が通所する教育支援センター「やまびこ」で実施することに繋がった。参加した児童生徒の表情からプログラムの実施による変化が確認できた。「なにをしてもいい」という自由さに、はじめは戸惑いをみせていたものの、それぞれの関わり方で工作に取り組んでいた様子は、当初に想定していた成果を感じるものであった。
- ・指定管理者として劇場を運営する財団として、地域の様々な層から応援してもらえるように事業へ取り組んでいく必要を感じており、今回の事業のようなタイプについては、これまでの評価基準では成果が見えにくいものであるが、継続の必要性を感じるものであった。

d) 事業実施中および今後の課題

- ・広報の過程で、関係団体から「オマルトヴェンザーはどこの方か」と問い合わせがあったことから、会場でどういったプロジェクトに取り組んでいるアーティストかを紹介する場を用意した。これにより、参加者がスムーズに作業に取り掛かれたように感じる。
- ・「なにをしてもいい」という場にする為に、木材や画材を広く用意した。また、アーティストからも「なにをしてみたい」と参加者に投げかけ、参加者の意見を引き出しながら取り組めた。参加者から返答がすぐでない場合も、返事があるまで待つという距離感であったことから、参加者が安心して取り組めたのではないかと想像する。
- ・参加にあたり、会場までの移動手段が必要になることから、保護者のスケジュールが優先されるという点や、対象となる児童生徒にとって「初めて」の場所に出向くということに対して心理的ハードルが高い点から、多くの参加者を得ることができなかった。当事者にプログラムを知ってもらうという点においては、劇場への来館を求める前に、それぞれの拠点へのアウトリーチが必要であると痛感した。

e) 今後の展望等

- ・不登校児の親のネットワークとのコミュニケーションが難しかった部分があるが、継続することで関係性を構築できればと考える。まずは、関係団体とのコミュニケーションを行い、継続的に実施できるよう、参加者の確保が必要である。当事者から、劇場を「居場所」と認識されるまでは、劇場での開催と出張開催の両輪で運営していくことを考えたい。
- ・伊丹市自立相談課と調整を図り、40代から50代のひきこもりへのアプローチをお願いしたもの、少しでも報酬のあるものでなければなかなか動かないということで参加に繋がらなかった。市の取組みは生活支援である為、例えば、将来的に運営をサポートする側のスタッフへの起用などを検討することも可能であると考ええる。
- ・地域で活動する団体とのコミュニケーションを得られるのであれば、汎用性のある取組みと感じた。各地で同様の取り組みが展開されることを期待したい。



会場風景

伴走支援報告

a) 事業の準備段階(企画・広報等)での支援内容

- ・伊丹市立文化会館と本支援活動の打ち合わせの段階で事業の企画内容と参加者へのアプローチを進められていたため、企画・広報については以下の所感を実施後にお伝えした。
- ・子どもの参加者がいた3回のうち、文化会館が2回、総合教育センターが1回という結果となった。文化会館は参加者にとって普段の居場所ではない場所であるため、そこに足を運んでもらうためには、文化会館と子どもの居場所との普段からの「関係づくり」が必要である。
- ・総合教育センターは、子どもにとって居場所と感じているのか。ワークショップの動画からは、大人と子どもの関係、子ども同士の関係が、どちらかといえば「学校」に近い印象だった。
- ・民間で設置・運営されている子ども食堂や、不登校・引きこもり支援活動を行う団体など、地域に子どもにとっての普段から居場所となっている空間や担い手が他になかったか、より一層の事前のリサーチが求められる。
- ・孤独・孤立の手前にいる人や、孤独や孤立から出たいと思う人にとって、どこが居場所と感じられるのか。そうしたリサーチや情報のネットワークに加わるのが、文化会館にとってまずは必要ではないかと考える。

b) 事業の実施段階(運営・事後等)での支援内容

①会場の設営について

- ・文化会館での会議室の広さは無理がなく適当なサイズ。総合教育センターは、人数に対してもう少しサイズが小さくても良かったのではないかな。
- ・アーティストの作品紹介は子どもの創作意欲を刺激し、制作のインスピレーションに寄与していたと思う。
- ・個人作業、共同作業、休憩などがシームレスに移行・移動できるように、作業スペース、画材・素材カウンター、休憩スペース（逃げ場）などの空間レイアウトには工夫の余地がある。

②子どもと大人の関係について

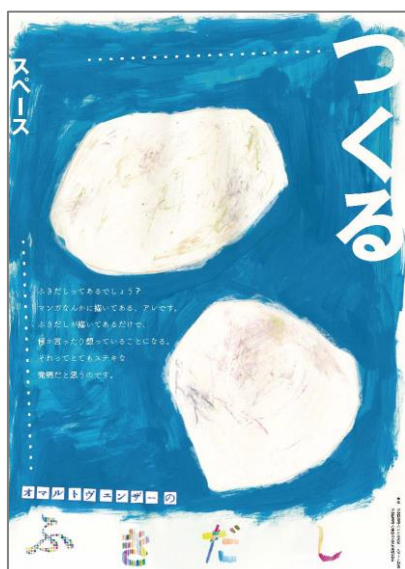
- ・アーティスト、スタッフと子どもの関係は対等で親近感があり、自然な距離感だった。とくに、アーティストの子どもの自発性の引き出し方、創作意欲の促し方の技術が素晴らしかった。
- ・文化会館でのワークショップは保護者の存在も良い影響を及ぼしていた。アーティストが介在することで、おそらく普段の親子関係からも変化が見られたのではないかな。
- ・気になった点として、総合教育センターでのワークショップでは、床に座る子どもたちを大人が立って見下ろす視点の位置であること、大人がビジネスの服装であることが対等ではない「上下関係」を生んでいたのではないかな。「子ども／大人」という立場を固定化する要因になっていなかったか検討の余地がある。

c) 実施団体からの所見

- ・事前にどういった運営が望ましいか、伴走支援者へ相談を行った。現場での変化を言語化していくことで、評価を行ってはどうか、とのアドバイスを得た。
- ・事後、伴走支援者が開催した際の映像を視聴し、それに基づいた以下のアドバイスを得た。
- ・施設のミッションとして、こういった取組みを位置づけ、継続的に取組む必要があること。
- ・劇場職員に「子どもの居場所を作りたい」というマインドが必要で、職員が「子どもの居場所」にて実地で学ぶ必要があるのではないかと提案。
- ・会場のレイアウトについて、作業をするスペース、作家の作品を鑑賞できるスペースに加えて、「休憩できる」スペースを設けても良かったのではないかと提案。
- ・職員の服装について、ビジネスシーンの服装が「子ども／大人」と立場を固定化していたのではないかと。劇場職員は、もっと子どもたちに寄り添った対応が求められるであろうし、改善が必要という指摘。
- ・5 回目の「やまびこ」は教育機関の支援施設である影響か、「学校」と同様の雰囲気があった。子どもが地べたで作業を行なっている様子を大人が立って覗き込んでいたことで「見る／見られる」という関係性になっていたのではないかと指摘。

d) 伴走支援者からの所見

- ・地域の子どもたちにとって文化施設が居場所となり得るか、有意義な試行だった。文化施設が有する空間、人材、ネットワークなどの資源を居場所として機能させる可能性は十分にある。
- ・ただし、空間用途や利用のルール、スタッフに求められるホスピタリティが、いわゆる集客施設としてのサービスとは異なっており、スタッフ自身が「子どもに来てほしい、そのために居場所を作っている」という基本的なマインドが求められる。
- ・まず、文化施設のスタッフが既に地域に存在している「子どもの居場所」に身を置いて、その場所のあり方や子どもや大人の「立ち居、振る舞い、佇まい」を学ぶ研修が必要ではないか。
- ・今後、文化施設が子どもにとって「何もなくても行く／何もしなくても居られる」居場所であることを、施設のミッションに位置付けて計画的に実施する可能性もあり得る。



広報物（チラシ）

三股町立文化会館

事業名	おいしい音のコンサート
実施日	11/21(火)、11/22(水)、12/13(水)各日 17:00~19:30
実施会場	三股町立文化会館 リハーサル室・会議室
伴走支援者	永山 智行 氏(劇団こふく劇場 代表)
協力団体等	地域食堂 りんりん食堂



団体名	三股町、公益社団法人全国公立文化施設協会
運営委託	Createfields 合同会社
団体住所	〒104-0061 東京都中央区銀座 2-10-18 東京都中小企業会館 4 階

実施報告

a) 参加者情報

対象者：小中学生、不登校や家庭以外の居場所を必要としている子供たちと家族

参加人数 計 34名（11/21（火）8名、11/22（水）13名、12/13（水）13名）

b) 孤独孤立予防のための対象者の変化

子どもとその保護者を対象とし、夕方の時間帯を設定し実施を行った。地域住民が気軽に参加できるものとして、音楽とふれあいながら鑑賞と食事を共にした。演奏中も動き回ることも自由とし、子どもがリラックスする様子を見て、保護者も安心した様子で参加をすることができた様子だった。のんびり楽しめたことで、今後の参加意欲も沸く効果を得られた。

c) 事業実施による成果・効果

- ・事業の実施によって、公共文化施設が誰でも安心して訪れる場所であることを認知してもらい、多様な人との対話が生まれる場になることを目指した。
- ・参加者は施設にすでに数回訪れたことがある方が多く、施設の自主事業等で地域に開かれた事業を行なっていることもあり、すでに認知度は高いと感じた。図書館や広場が隣接するため、放課後には児童生徒が施設周辺で遊ぶ姿が見受けられた。文化芸術活動の有無に関係なく建物の存在が集う場となり、地域住民の生活に溶け込んでいることは公共文化施設が多様な背景をもつ人々の居場所となるための第一歩であると感じた。
- ・「音楽とごはん」というキーワードによって、コンサート中も音楽や参加者のエピソードに共感を生むことができた。さらに、食事を待つ間に参加者同士での会話が弾む光景も見られたため、対話を生むためのきっかけとしては成果があったと考える。
- ・施設のある三股町内の参加者を想定していたが、生活圏内であるとなりの都城市からも参加者があった。また、就学年齢の児童生徒と家族を対象としていたがその数は少なく、未就学児子育て世代の参加者が多かった。連携した地域食堂を利用した方々の参加も理由のひとつではあるが、子育て世代が地域社会とつながる場としても活用できると感じた。公共文化施設のある地域だけではなく、範囲を広げた視野での居場所づくりを考える気づきとなった。

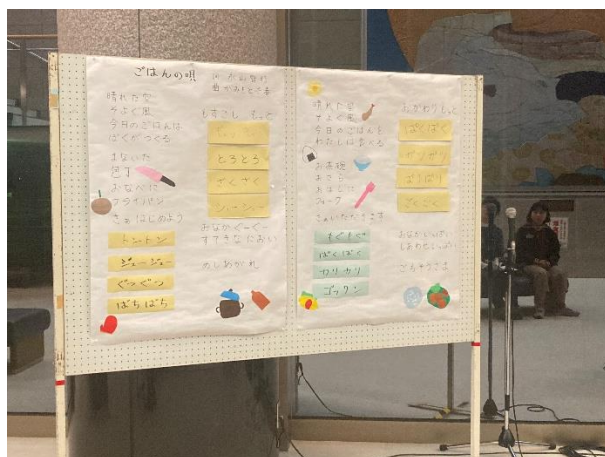
d) 事業実施中および今後の課題

- ・短期間での準備であったため、周知の範囲と不登校などの背景を抱える方へ情報を届ける手段、また、運営面ではホール空き状況との調整、文化施設スタッフにどのように関わってもらうかが課題であった。
- ・共催施設である三股町立文化会館が町の直営であったことが幸いし、町の教育委員会、社会福祉協議会を通して広報協力を得ることができた。また、ホールのホワイエを利用することでホールスタッフのスケジュール調整も影響が少なく実施が可能となった。

- ・さらに町内で活動する地域食堂との連携のため、事業の趣旨や内容を説明し対話する機会を持つよう心がけ、文化施設・地域食堂・アーティスト・民間企業である弊社を含めた4者が、それぞれの役割で関われるように打合せを丁寧に行う工夫をした。
- ・今回の事業では、いきなり文化施設に対象である方に参加者として足を運んでもらう形の実施であったが、そもそもこの実施形態に無理があると考え。今後の継続のためには、先ずアーティストや文化施設側から相手の世界に飛び込み、受け入れてもらい関係性を築いた上で、施設に出向いてもらい文化芸術活動を共に行うことが望ましいのではないだろうか。

e) 今後の展望等

- ・規模は小さくとも定期的に継続して事業を実施することで、いつでも誰でも公共文化施設を利用でき、過ごすことができる居場所となるため、おしゃべりの場や創作の場を生み出すことも考えられる。アーティストも多様な表現のアーティストがチームとして関わると、参加者の表現の選択肢も広がる。
- ・三股町教育委員会、社会福祉協議会、地域民間団体、三股町を拠点とするフリースクール、大学等の教育機関、都城市の文化施設、都城市教育委員会、子育てサークルや支援団体、地域・子ども食堂、舞台技術等の民間企業などとの協働が想定できる。



会場風景

伴走支援報告

a) 事業の準備段階(企画・広報等)での支援内容

- ・実施団体との仲介を行い、実施団体の案内や企画内容の意義の説明、実施方法についての提案を行った。具体的には、これまで三股町立文化会館が行ってきた諸事業における、地域の子どもたちや若者、高齢者、障害者などが、立場を超えて出会う場づくりと本事業が、意義として親和性が高いことの説明、また、実施においても、会館が行っている演劇ワークショップ「みまた座」に参加している子どもたちやその親などに広報していくことや、同じ地域で子ども食堂を行っている団体との連携、実施会場のレイアウトなどを提案した。

b) 事業の実施段階(運営・事後等)での支援内容

- ・事業実施に参加し、参加者目線で事業内容を視察し、今後の実施の可能性や、その際の留意点などについての意見交換を行った。また、あらためて地域の文化会館として、これまで行ってきた事業をふりかえるとともに、その果たす役割や、今後の展開などについても広く意見交換を行った。

c) 実施団体からの所見

伴走支援者の永山智行氏が代表である劇団こふく劇場は、実施施設の三股町立文化会館のフライチャイブパートナーであるため、事業の趣旨・内容等を施設側が理解し賛同いただくことが非常にスムーズに行えた。

また、対象者の背景等を考慮した内容や実施のためのヒントをアドバイスいただいた。

- ・実施施設への事業説明と協力への働きかけ
- ・直営である三股町の関係各所への調整
- ・コンサート実施に向けての内容・進行等の打合せ
- ・チラシへのアドバイス
- ・事業オリジナル曲の作詞（観客が参加できるような工夫）
- ・実施当日の運営のお手伝い、振り返り

d) 伴走支援者からの所見

- ・地域の公立文化施設が、さらに深く地域に関わっていくための非常に意義深い事業であり、準備期間などを十分に確保できるなどの改善を行った上で、今後も長く継続していただきたい。

広報物（チラシ）



アンケート集計結果

アンケート調査結果（板橋区立文化会館）

11 月『幸福の黄色いハンカチ』（1977 年・108 分・DCP 上映）

令和 5 年 11 月 17 日（金）開始時間 10:30、14:30、18:30

調査方法 会場調査（アンケート配布、回収）

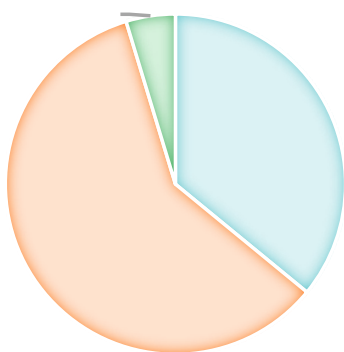
参加人数 81 人

アンケート有効回答数 64 人（回収率 79.0%）

a) 回答者属性

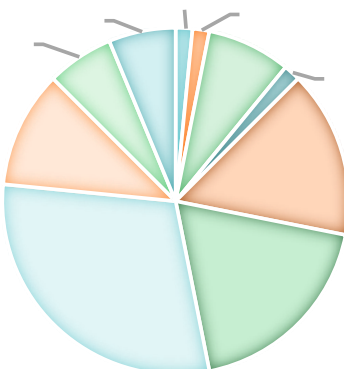
【性別】(n=64、SA)

参加者の性別は、「男性」（23 人）に対して「女性」（38 人）の方が多かった。



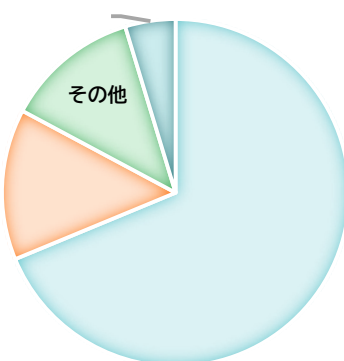
【年代】(n=64、SA)

参加者の年齢は、「75～79 歳」（23 人）が最も多く、次いで「70～74 歳」（38 人）、「65～69 歳」（38 人）の順となっており、65 歳以上の高齢者が 81.3%と 8 割を超えており、昔の映画作品を懐かしんだ年齢層の参加が多かった。



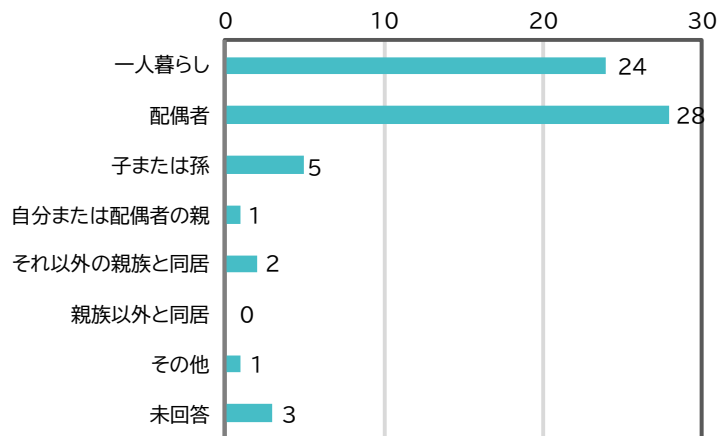
【居住地】(n=64、SA)

参加者の居住地は、「板橋区内」（44 人）が最も多く、「都区内」（9 人）、「その他」（8 人）の順になっている。都区内は、豊島区及び練馬区などの近隣の区その他、新宿区、文京区、北区、世田谷区及び杉並区からの参加もあった。また、その他については、埼玉県内、和光市、朝霞市及び新座市といった東武東上線沿線からの参加があった。一方、深谷市及び松戸市といった比較的遠方からの参加もあった。



【居住状況】(n=64、MA)

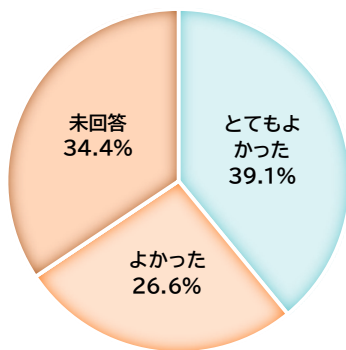
一緒に住んでいる方（居住状況）についての設問については、「配偶者」との同居が最も多く、次いで「一人暮らし」となっており、ほとんどが独居あるいは二人世帯となった。



b) 映画上映会について

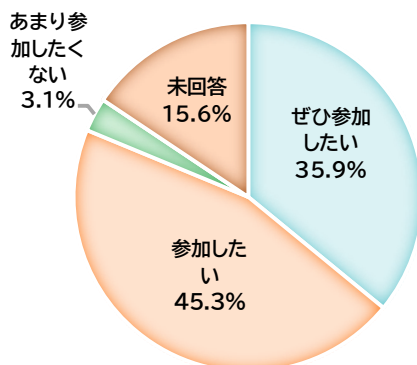
【映画上映会の内容】(n=64、SA)

映画上映会の内容に対する感想については、「とてもよかった」(25 人) 及び「よかった」(17 人) の回答のみであり、過半数を超える結果となった。「あまりよくなかった」及び「よくなかった」の回答はなく、上映作品が好評であったと言える。



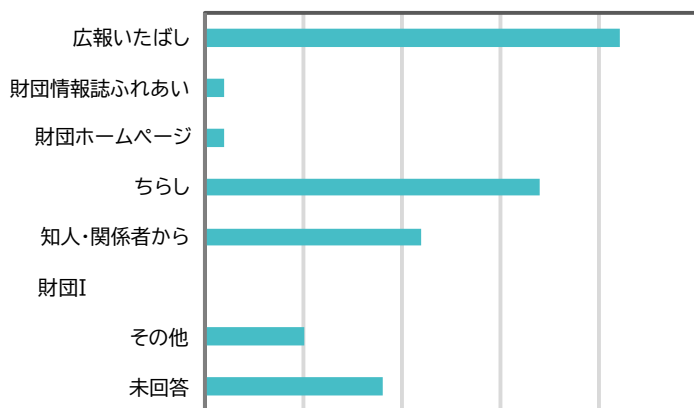
【今後の参加意向】(n=64、SA)

映画上映会への今後の参加意向については、感想と同様に「ぜひ参加したい」(23 人) 及び「参加したい」(29 人) の回答が大半であり、約 8 割となっている。一方で、「あまり参加したくない」(2 人) という回答もあった。



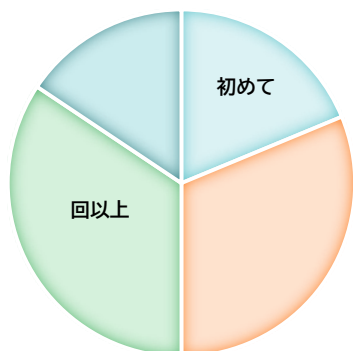
【情報源】(n=64、MA)

今回の映画上映会を何で知ったか（情報源）については、「広報いたばし」が最も多く、次いで「ちらし」「知人・関係者から」の順になっている。一方で、「財団情報誌ふれあい」「財団ホームページ」及び「財団 Instagram」といった財団発信のメディアからの認知が少なく広報宣伝の手法が今後の課題となっている。



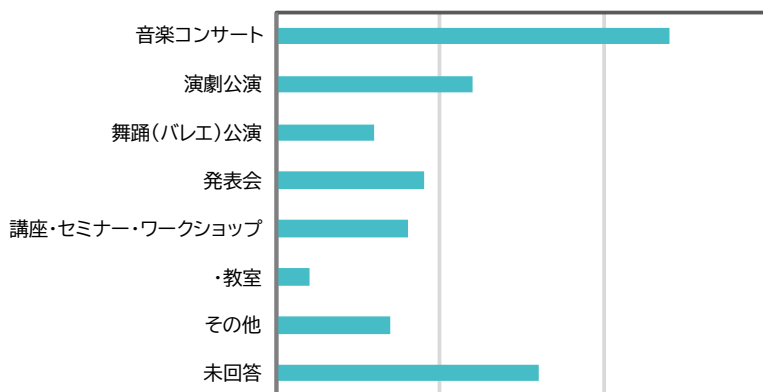
【来館回数】(n=64、SA)

板橋区立文化会館へのこれまでの来館回数については、「5回以上」(22人)が最も多く、次いで「2～5回目」(20人)、「初めて」(12人)の順となった。



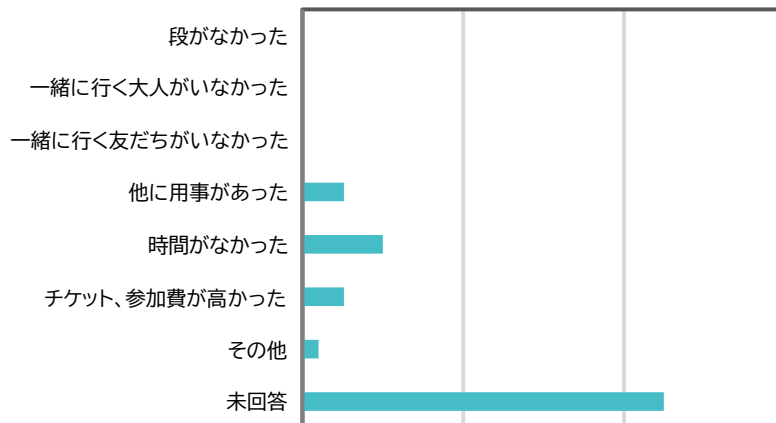
【今回以外の来館目的】(n=64、MA)

今回以外の来館目的については、「音楽コンサート」が最も多く、次いで「演劇公演」「発表会」「講座・セミナー・ワークショップ」の順となった。

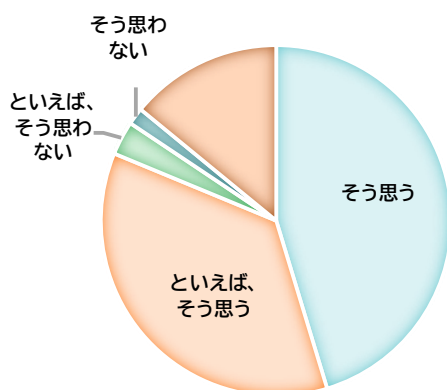


【来館が困難な原因】(n=64、MA)

板橋区文化会館に来館できなかった原因については、「未回答」が多くなっており、物理的な原因はほぼ見当たらない結果となった。



c) 日頃の意識と生活について

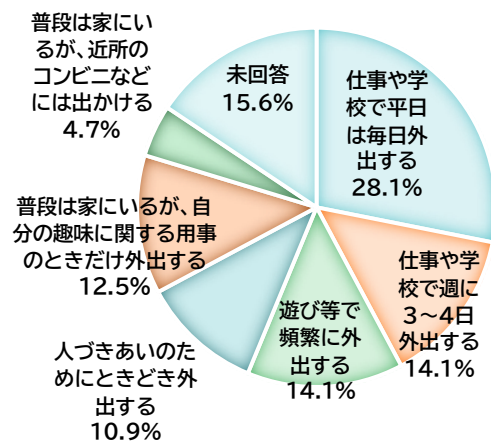
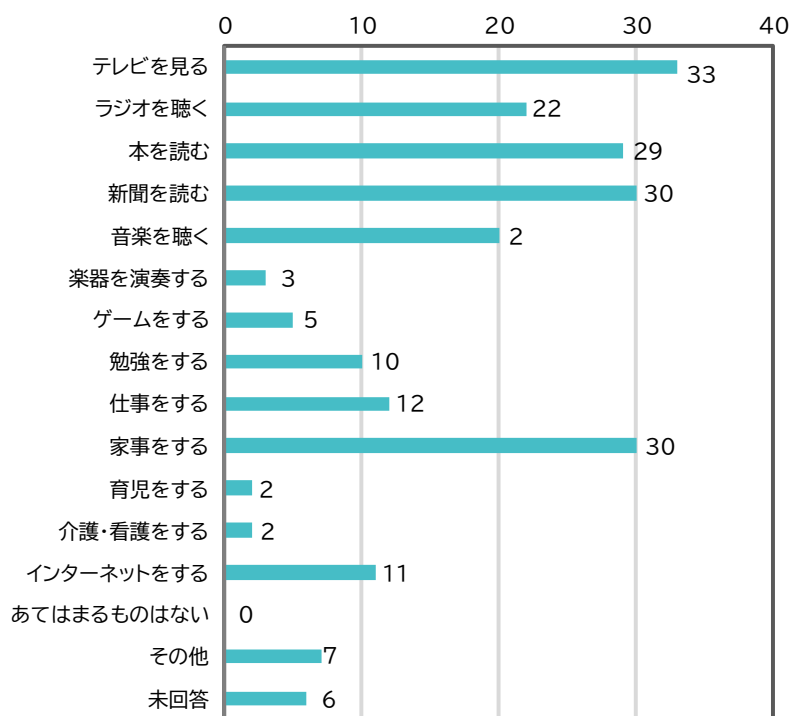


【幸福感】(n=64、SA)

今、自分が幸せだと感じているかについての実感については、「そう思う」(29人) 及び「どちらかといえば、そう思う」(23人) が約 8 割を占めており、今回の映画上映会の参加者は概ね現状に満足しているという結果であった。

【普段の時間の使い方】(n=64、MA)

普段の時間の使い方については、「テレビを見る」(33 人) が最も多く、次いで「新聞を読む」及び「家事をする」(30 人) であり、「本を読む」(29 人)、「ラジオを聴く」(22 人)、「音楽を聴く」(20 人) の順となった。参加者に高齢者が占める割合が多いことから、「仕事をする」(12 人)、「インターネットをする」(11 人)、「勉強をする」(10 人) 及び「ゲームをする」(5 人) は少ない結果となった。

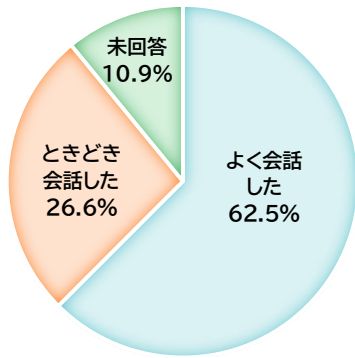


【普段の外出頻度】(n=64、SA)

普段の外出頻度については、「仕事や学校で平日は毎日外出する」(18 人) が最も多く、「仕事や学校で週に 3～4 日外出する」(9 人)、「遊び等で頻繁に外出する」(9 人)、「普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」(8 人)、「人づきあいのためにときどき外出する」(7 人) がほぼ同数の回答となった。一方、「普段は家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」(3 人) となっており、「普段は家にいる」という回答は合わせて 11 人であり、今回の映画上映会の参加者は概ね外出頻度は高い傾向にあると言える。

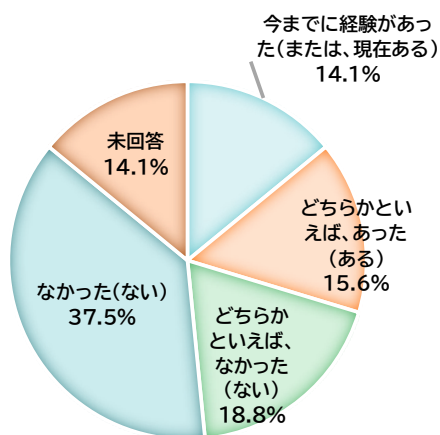
【家族以外との会話】(n=64、SA)

最近 6 か月間の家族以外との会話については、「よく会話した」(40 人) 及び「ときどき会話した」(17 人) で約 9 割となっており、今回の映画上映会の参加者は日常的に家族以外とのコミュニケーションを取っていることがわかった。



【社会生活や日常生活を円滑に送れていない状況(経験)】(n=64、SA)

社会生活や日常生活を円滑に送れていない状況(経験)については、「なかった(ない)」(24 人) 及び「どちらかといえば、あった(ある)」(9 人) 及び「今までに経験があった(または、現在ある)」(10 人) が回答全体の 3 分の 1 程度あり、必ずしも少数というわけではないことと言える。



【今後実施してほしい要望等】

- ・この企画(レトロシネマ)は、ずっと続けてほしいです。古くても繰り返しでも結構です。また。歌手のライブ映像等、可能であれば。家族の事情や他の遊びに夢中で見てない名画がたくさんあり、誠にありがたい企画です。知名度が低く、少し残念です。
- ・年金生活でも文化に親しめる環境がほしい。
- ・字幕があったらベター。
- ・久しぶり見る事ができて、懐かしかったです。
- ・映画の前の演奏は良かった。次回も参加したい。
- ・ワンコイン映画はいかがでしょうか。チャップリンや話題の多かった昔の映画等もよいのではと思います。生の演奏もとても大切にしたいです。奏でる側も聴く側も。
- ・今回の映画についても、宣伝が足りないのではないかと。古い映画なので、年寄りにも行き渡る宣伝をしてほしかった。(私は息子がスマホを見て教えてくれた。)

12月『SR サイタマノラッパ』(2008年・80分・BD上映)

令和5年12月22日(金) 開始時間 10:30、14:30、18:30

調査方法 会場調査(アンケート配布、回収)

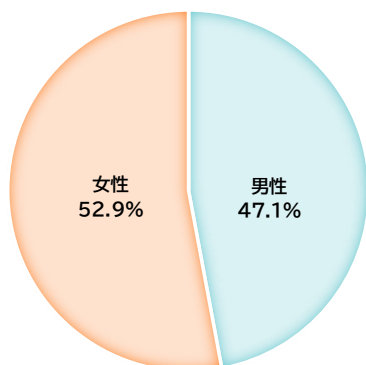
参加人数 51人

アンケート有効回答数 34人(回収率 66.7%)

a) 回答者属性

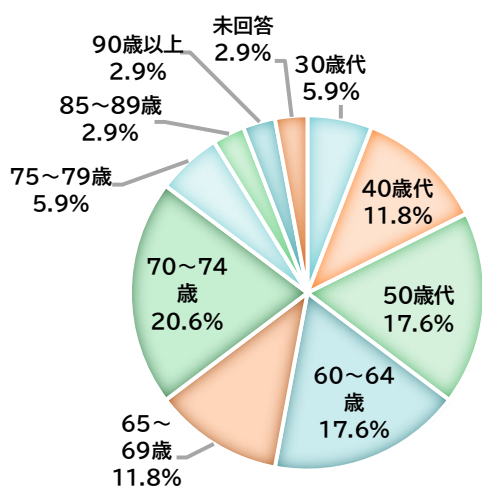
【性別】(n=34、SA)

参加者の性別は、「男性」(16人)に対して、若干ではあるが「女性」(18人)の方が多かった。



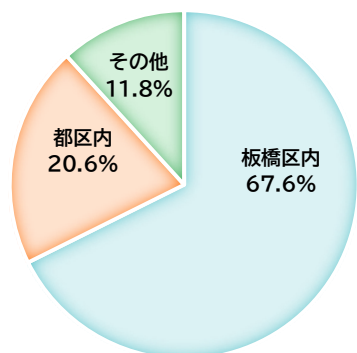
【年代】(n=34、SA)

参加者の年齢は、「70～74歳」(7人)が最も多く、次いで「60～64歳」(6人)、「50歳代」(6人)の順となった。一方、「30歳代」(2人)及び「40歳代」(4人)の参加者もあり、今回の上映作品及び監督の舞台挨拶もあって、若い層の参加も見られた。



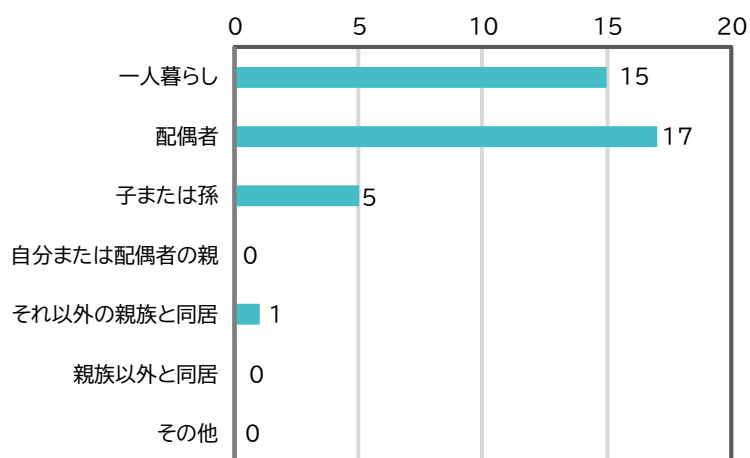
【居住地】(n=34、SA)

参加者の居住地は、「板橋区内」(23人)が最も多く6割を超え、「都区内」(7人)、「その他」(4人)の順になっている。都区内は、豊島区及び練馬区などの近隣の区その他、江東区及び杉並区からの参加もあった。また、その他については、埼玉県内、東武東上線沿線の和光市及び朝霞市その他、所沢市からの参加があった。

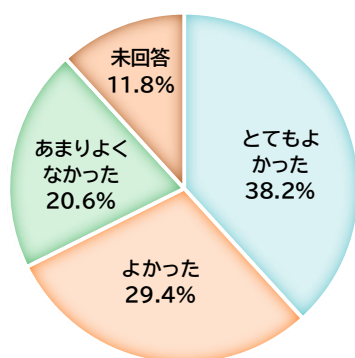


【居住状況】(n=34、MA)

一緒に住んでいる方（居住状況）についての設問については、「配偶者」との同居が最も多く、次いで「一人暮らし」となっており、ほとんどが独居あるいは二人世帯となったが、若い層の参加により「子または孫」の回答も見られた。



b) 映画上映会について



【映画上映会の内容】(n=34、SA)

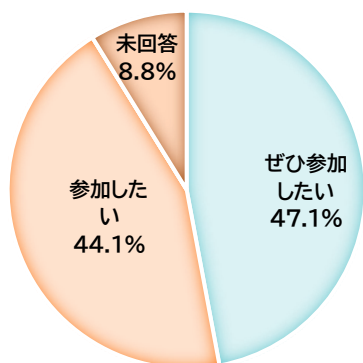
映画上映会の内容に対する感想については、「とてもよかった」(13人)及び「よかった」(10人)の回答が6割を超えたものの、11月の上映会と異なり、「あまりよくなかった」(7人)の回答も見られた。これは、この映画上映会がリピーターの高齢者が多いことから、今回の上映作品が古い名画ではなかったため、ニーズと異なっていたことが要因として考えられる。

【よいと感じた点】

- ・企画いただいた方々にお礼申し上げます。
- ・気軽に参加できるような雰囲気だった。

【よくないと感じた点】

- ・開演がもう少し遅い方が来やすい。
- ・老人にも楽しめるものがない。

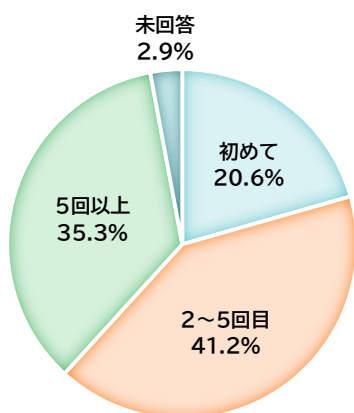
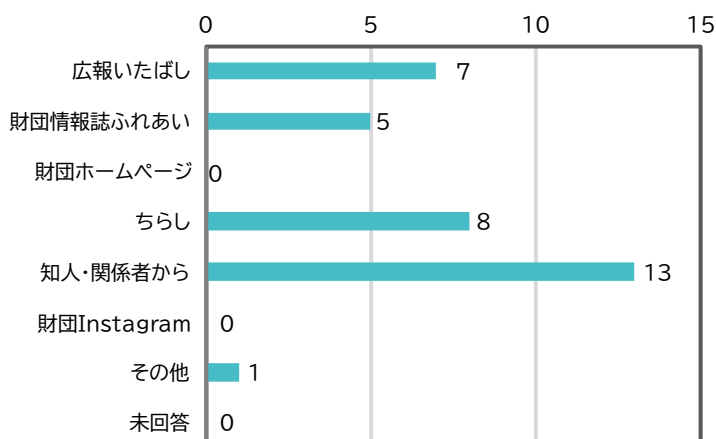


【今後の参加意向】(n=34、SA)

映画上映会への今後の参加意向については、「ぜひ参加したい」(16人)及び「参加したい」(15人)の回答が大半であり、9割以上となっており、「あまり参加したくない」「参加したくない」の回答はなかった。

【情報源】(n=34、MA)

今回の映画上映会を何で知ったか(情報源)については、「知人・関係者から」が最も多く、次いで「ちらし」「広報いたばし」の順になっている。一方で、11月の上映会と異なり、「財団情報誌ふれあい」で知ったという回答もあるが、「財団ホームページ」及び「財団 Instagram」といった財団発信のメディアからの認知がなく、ウェブや SNS などのデジタルメディアの活用策は今後の課題であると言える。

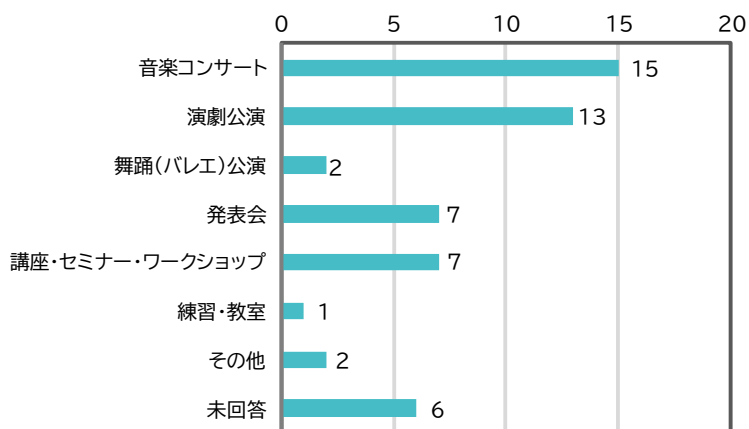


【来館回数】(n=34、SA)

板橋区立文化会館へのこれまでの来館回数については、「2~5回目」(14人)が最も多く、次いで「5回以上」(12人)、「初めて」(7人)の順となった。11月の上映会と同様に、「板橋区内」の居住者が多いことから近隣に居住するリピーターが多いといえるが、「初めて」の回答のうち、1人を除いて「板橋区内」であり、また、「30歳代」及び「40歳代」及び「50歳代」であることから、特に今回の上映作品は若い世代の認知の拡大の可能性が感じられる結果となった。

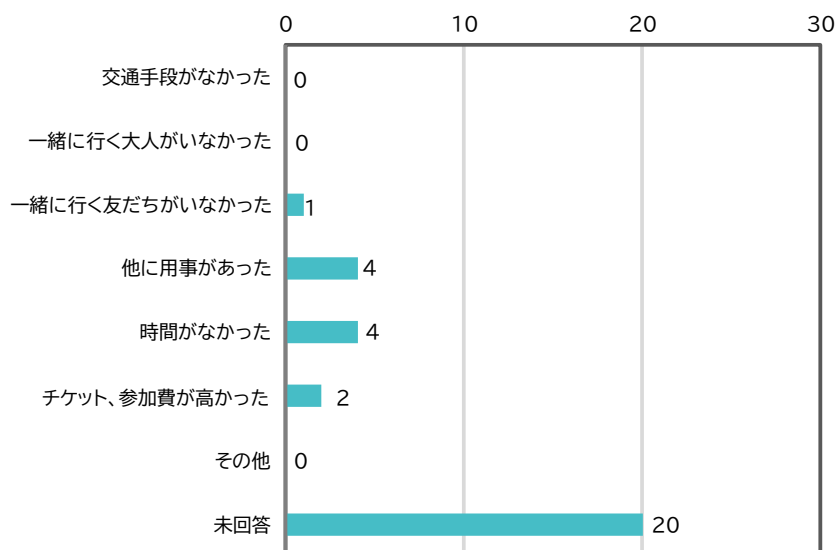
【今回以外の来館目的】(n=34、MA)

今回以外の来館目的については、「音楽コンサート」が最も多く、次いで「演劇公演」、「発表会」及び「講座・セミナー・ワークショップ」の順となった。

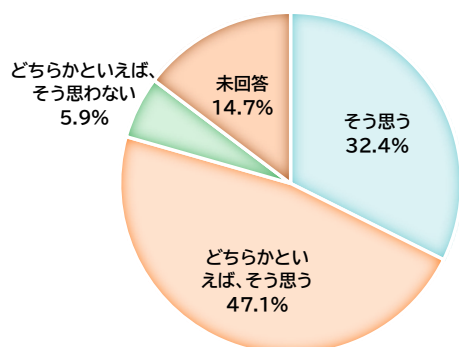


【来館が困難な原因】(n=34、MA)

板橋区文化会館に来館できなかった原因については、「未回答」が多くなっており、物理的な原因はほぼ見当たらない結果となった。



c) 日頃の意識と生活について

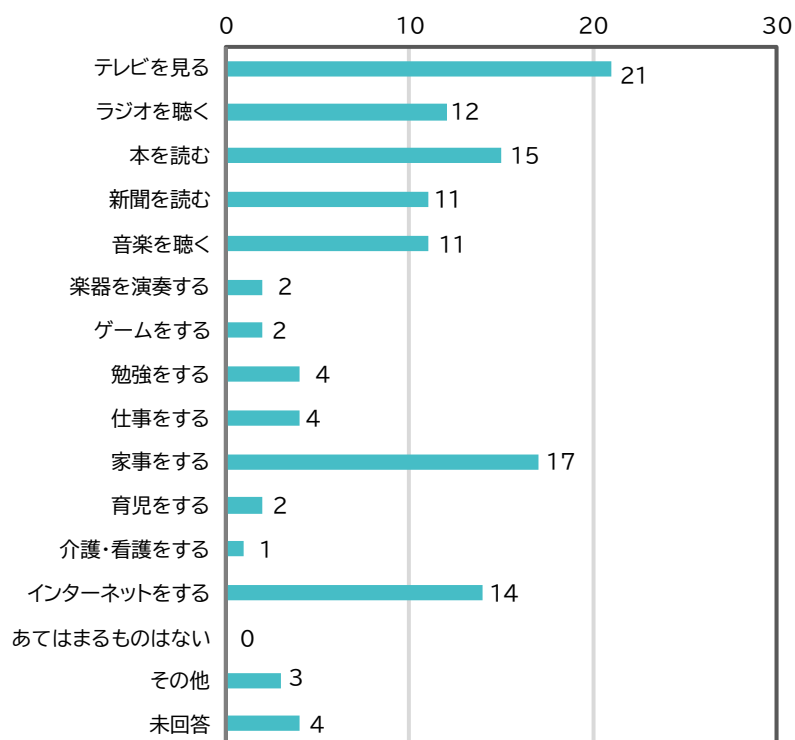


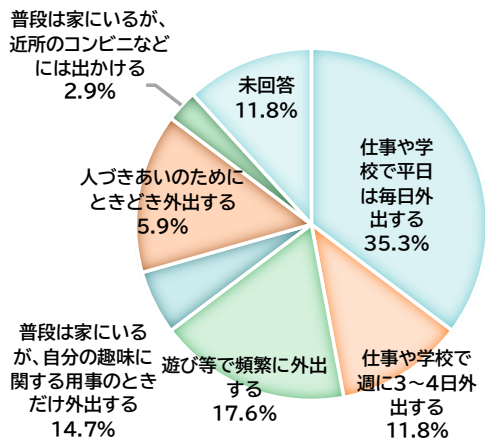
【幸福感】(n=34, SA)

今、自分が幸せだと感じているかについての実感については、どちらかといえば、そう思う」(16 人) 及び「そう思う」(11 人) が約 8 割を占めており、今回の映画上映会の参加者は概ね現状に満足しているという結果であった。一方で、「どちらかといえば、そう思わない」(2 人) の回答も 40 歳代からあった。

【普段の時間の使い方】(n=34, MA)

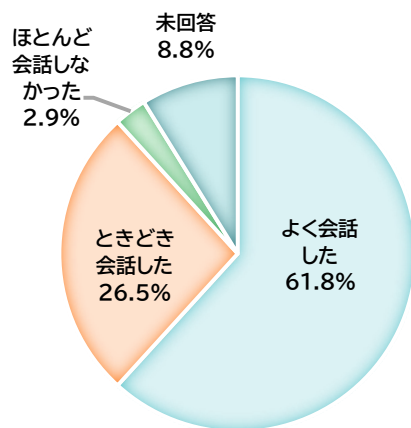
普段の時間の使い方については、「テレビを見る」(21 人) が最も多く、次いで「家事をする」(17 人)、「本を読む」(15 人)、「インターネットをする」(14 人)、「ラジオを聴く」(12 人)、「新聞を読む」及び「音楽を聴く」(11 人) の順となった。





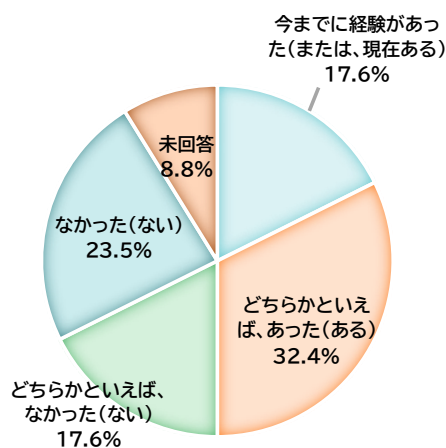
【普段の外出頻度】(n=34, SA)

普段の外出頻度については、「仕事や学校で平日は毎日外出する」(12 人) が最も多く、「遊び等で頻繁に外出する」(6 人)、「普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」(6 人) 及び「仕事や学校で週に 3～4 日外出する」(4 人) がほぼ同数の回答となった。11 月の上映会と同様に、今回の映画上映会の参加者は概ね外出頻度は高い傾向にあると言える。



【家族以外との会話】(n=34, SA)

最近 6 か月間の家族以外との会話については、「よく会話をした」(21 人) 及び「ときどき会話をした」(9 人) で約 9 割となっており、今回の映画上映会の参加者は日常的に家族以外とのコミュニケーションを取っていることがわかった。



【社会生活や日常生活を円滑に送っていない状況(経験)】(n=34, SA)

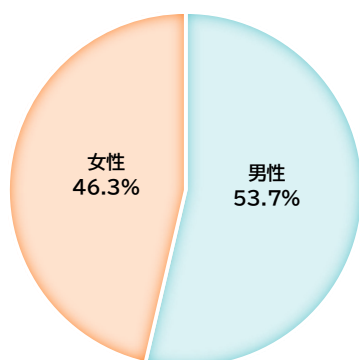
社会生活や日常生活を円滑に送っていない状況(経験)については、11 月の上映会と異なり、「なかった(ない)」(8 人) 及び「どちらかといえば、なかった(ない)」(6 人) に対して、「どちらかといえば、あった(ある)」(11 人) 及び「今までに経験があった(または、現在ある)」(6 人) の方が多い結果となった。

【今後実施してほしい要望等】

- ・今回のような映画上映会をお願いします。
- ・映画と演奏、続けてください。やっと外に出られるようになったので、毎回楽しみに来ています。

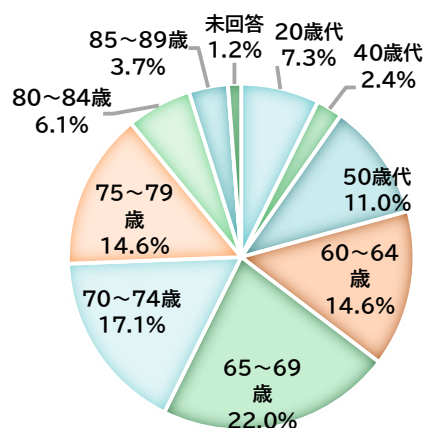
ALWAYS 三丁目の夕日(2005 年・133 分・35mm フィルム)
 ALWAYS 続・三丁目の夕日(2007 年・146 分・35mm フィルム)
 ALWAYS 三丁目の夕日'64(2012 年・142 分・35mm フィルム)
 令和 6 年 1 月 19 日(金) 開始時間 10:30、14:30、18:30
 調査方法 会場調査(アンケート配布、回収)
 参加人数 136 人
 アンケート有効回答数 82 人(回収率 60.3%)

a) 回答者属性



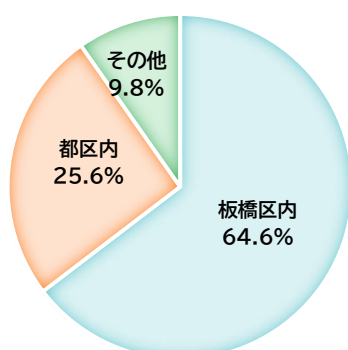
【性別】(n=82、SA)

参加者の性別は、「男性」(44 人)に対して「女性」(38 人)であり、これまでの上映会と異なり、男性の方が多かった。



【年代】(n=82、SA)

参加者の年齢は、「65～69 歳」(18 人)が最も多く、次いで「70～74 歳」(14 人)、「75～79 歳」(12 人)及び「60～64 歳」(12 人)の順となった。「20 歳代」(6 人)の参加もあり、参加者の年代にばらつきがあった。

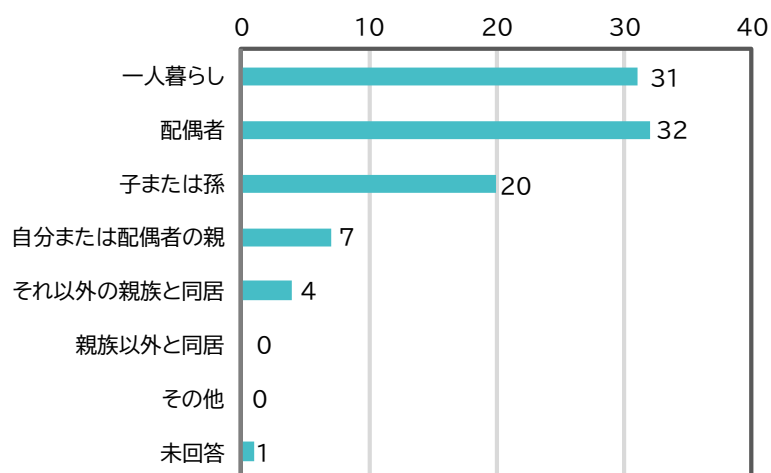


【居住地】(n=82、SA)

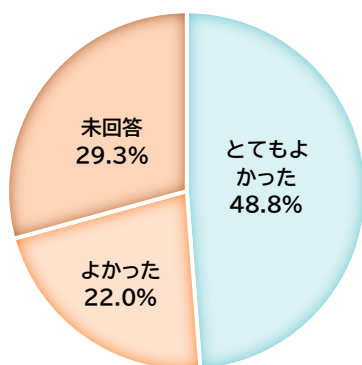
参加者の居住地は、「板橋区内」(53 人)が最も多く、「都区内」(21 人)、「その他」(8 人)の順になっている。都区内は、これまでの豊島区及び練馬区、北区など近隣の区他、世田谷区、荒川区、江戸川区。大田区、小平市など比較的遠隔の地域からの参加もあった。また、その他については、埼玉県内、朝霞市及び所沢市といった東武東上線他の沿線からの参加があった。

【居住状況】(n=82、MA)

一緒に住んでいる方（居住状況）についての設問については、「配偶者」（32 人）との同居が最も多く、次いで「一人暮らし」（31 人）となっており、ほとんどが独居あるいは二世帯となった。



b) 映画上映会について



【映画上映会の内容】(n=82、SA)

映画上映会の内容に対する感想については、「とてもよかった」（40 人）及び「よかった」（18 人）の回答のみであり、約 7 割という結果となった。「あまりよくなかった」及び「よくなかった」の回答はなく、上映作品が好評であったと言える。

【よいと感じた点】

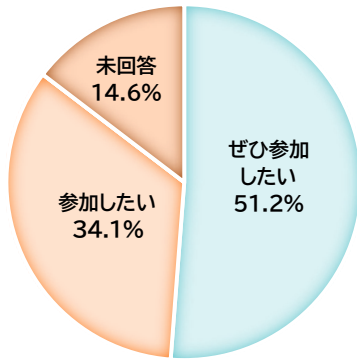
- ・上映前に大山の商店街PR フィルムの上映をやっていて良かったです。本編がフィルム上映であることに驚きました。
- ・落ち着いて観れた。
- ・昭和の良き時代が思い出されました。
- ・年代的にも懐かしく、楽しく観ることができました。
- ・上映前の昔の商店街の様子がモノクロで流れて、大変懐かしかった。
- ・昔の映画館という雰囲気が懐かしかったです。上映前の昭和の映像がとても良かったです。
- ・心が安らぐ。
- ・良かったです。心が清まりました。
- ・オリンピックのことが思い出させる。
- ・古い昔を思い出した。
- ・料金が安い。
- ・フィルム上映であること。会場が大きい。
- ・灯を消さずに、どうか続けてください。シネコンは快適ですが、映画は大劇場で観ると迫力があります。上映前の演奏もとても良かったです。
- ・心に感動を与えてもらった。演奏も良かった。
- ・ゆっくりゆったり観られる。感動しました。最後まで観ることができて良かったです。諦めずやってくださり、ありがとうございました。
- ・生演奏が良かった。

【よくないと感じた点】

- ・値段が若干高い。
- ・幕間はもう少し詰めた方がよかったのでは？終了時間がやや遅すぎ。
- ・平日なので、来られる方が少なく、もったいないと思いました。
- ・旧作なのに料金が高い。
- ・チケット代が高い。
- ・観客が少なかった。
- ・補聴器がお耳にあっていないシニアさんが近くの座席に座っており、ご自身の声も聞き取れないと思われる、話す声が大声でした。お連れの方もお耳が遠いようで、上映中も終始おしゃべりされていました。ご本人は小さい声で話していたつもりなのでしょうが。スタッフさんが巡回して注意してくださるといいのになと思いました。もしくは開始前に私語はお控え下さいとアナウンスしてくださると改善されると思われます。

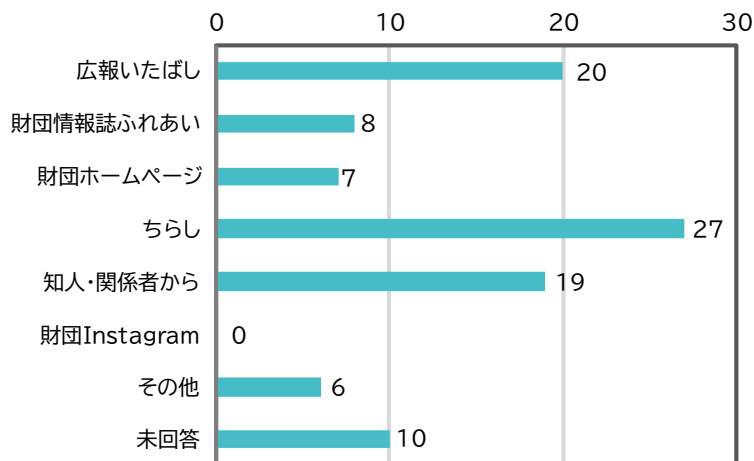
【今後の参加意向】(n=82、SA)

映画上映会への今後の参加意向については、感想と同様に「ぜひ参加したい」(42 人) 及び「参加したい」(28 人) の未回答以外は今後も参加したいという回答であった。



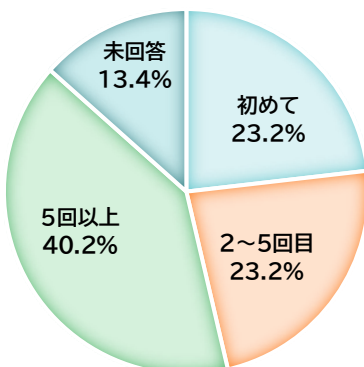
【情報源】(n=82、MA)

今回の映画上映会を何で知ったか(情報源)については、「ちらし」が最も多く、次いで「広報いたばし」「知人・関係者から」の順になっている。11 月上映会と同様に、「財団情報誌ふれあい」「財団ホームページ」及び「財団 Instagram」といった財団発信のメディアからの認知が少なくなっており、また、告知に対する自由意見もあることから、広報宣伝の手法が今後の課題であると言える。



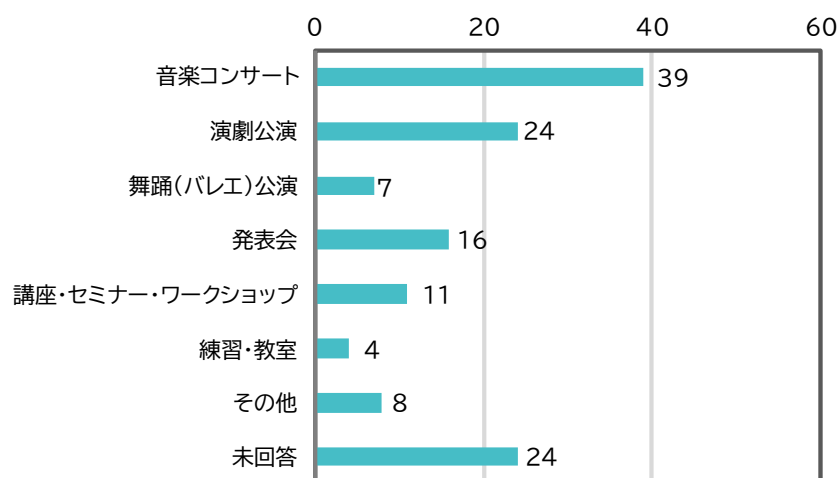
【来館回数】(n=82、SA)

板橋区立文化会館へのこれまでの来館回数については、「5 回以上」(33 人) が最も多く、次いで「初めて」(19 人) 及び「2～5 回目」(19 人) が同数となった。先述の属性にあったように「板橋区内」の居住者が多いことから近隣に居住するリピーターが多いといえるが、「初めて」の回答で「板橋区内」の居住者は 8 人であり、11 月よりは少数ではあるが、映画上映会が区民の会館利用の契機の一つとなっていると言える。



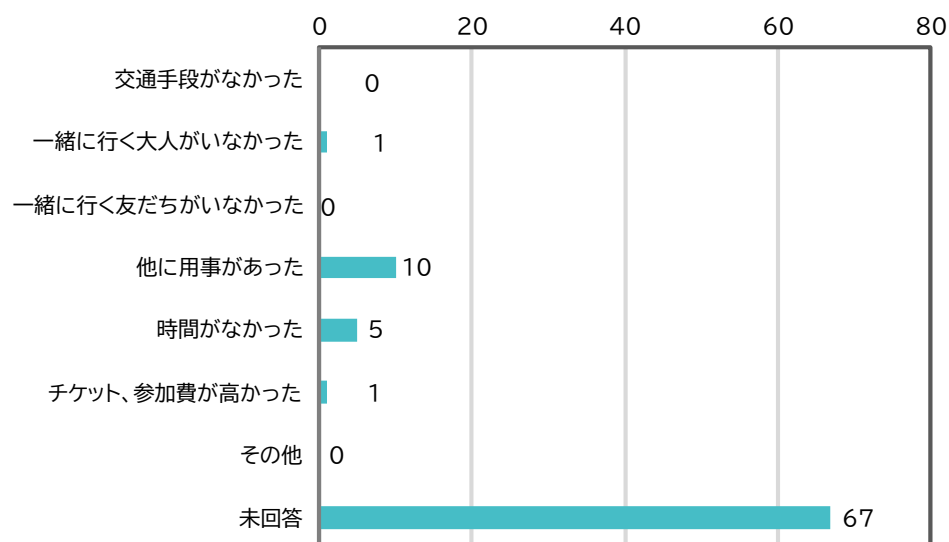
【今回以外の来館目的】(n=82、MA)

今回以外の来館目的については、「音楽コンサート」が最も多く、次いで「演劇公演」「発表会」「講座・セミナー・ワークショップ」の順となった。

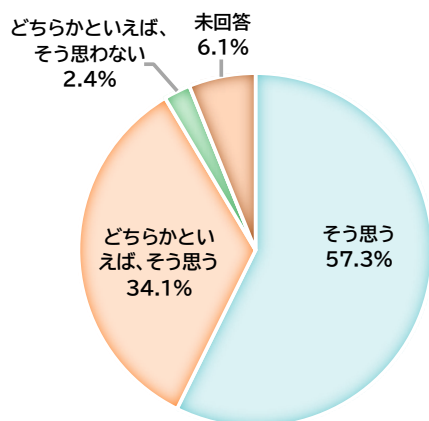


【来館が困難な原因】(n=82、MA)

板橋区文化会館に来館できなかった原因については、「未回答」が多くなっており、物理的な原因はほぼ見当たらない結果となった。



c) 日頃の意識と生活について

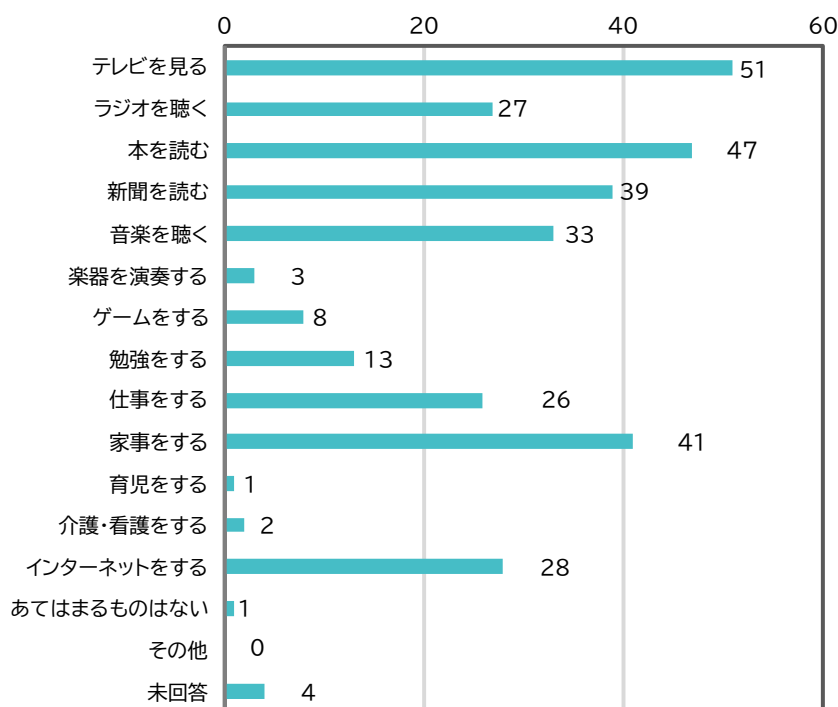


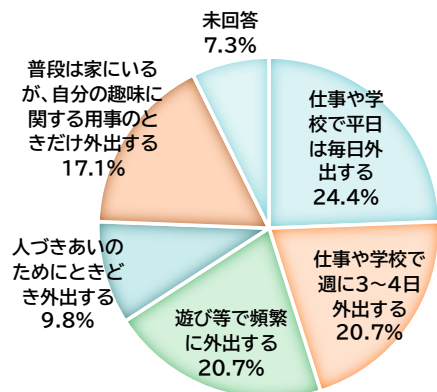
【幸福感】(n=82、SA)

今、自分が幸せだと感じているかについての実感については、「そう思う」(47人)及び「どちらかといえば、そう思う」(28人)が9割以上を占めており、今回の映画上映会の参加者は概ね現状に満足しているという結果であった。

【普段の時間の使い方】(n=82、MA)

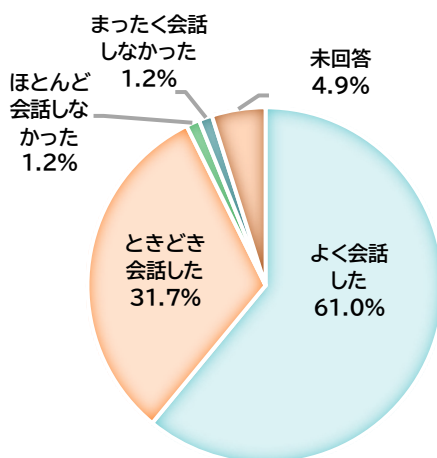
普段の時間の使い方については、「テレビを見る」(51人)が最も多く、次いで「本を読む」(47人)、「家事をする」(41人)、「新聞を読む」(39人)であり、「音楽を聴く」(33人)、「インターネットをする」(28人)、「ラジオを聴く」(27人)及び「仕事をする」(26人)の順となった。





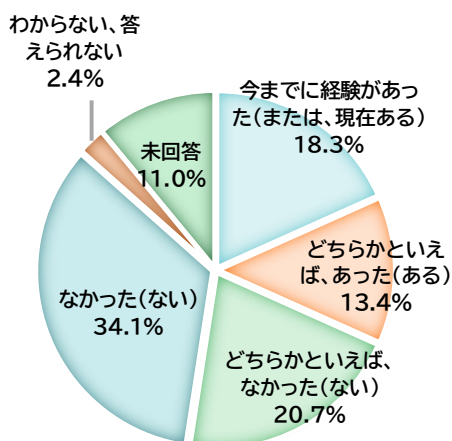
【普段の外出頻度】(n=82, SA)

普段の外出頻度については、「仕事や学校で平日は毎日外出する」(20人)が最も多く、「仕事や学校で週に3～4日外出する」及び「遊び等で頻繁に外出する」(17人)、「普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」(14人)、「人づきあいのためにときどき外出する」(8人)の順となった。がほぼ同数の回答となった。一方、「普段は家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」の回答はなく、今回の映画上映会の参加者は概ね外出頻度は高い傾向にあると言える。



【家族以外との会話】(n=82, SA)

最近6か月間の家族以外との会話については、「よく会話した」(50人)及び「ときどき会話した」(26人)で9割を超えており、今回の映画上映会の参加者は日常的に家族以外とのコミュニケーションを取っていることがわかった。



【社会生活や日常生活を円滑に送っていない状況(経験)】(n=82, SA)

社会生活や日常生活を円滑に送っていない状況(経験)については、「なかつた(ない)」(28人)及び「どちらかといえ、なかつた(ない)」(17人)が多い一方で、「どちらかといえ、あつた(ある)」(11人)及び「今までに経験があつた(または、現在ある)」(15人)の回答もあった。

【今後実施してほしい要望等】

- ・自分に合った映画上映の時には、また申し込みたいと思っています。
- ・上映会のちらしを広くミニシアター等に置いてほしい。告知をもっと強化してほしい。
- ・新しいものより古い方を希望します。
- ・定期的に古い映画の上映会を企画していただきたい。
- ・続けてやってください。また観に期待です。
- ・土日にも上映会してほしい。

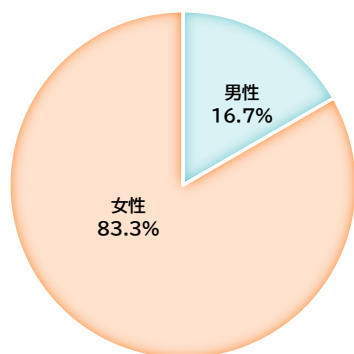
アンケート集計結果(ミューザ川崎シンフォニーホール)

調査方法	スタッフによる聞き取り、QRコード配布によるウェブアンケート
参加人数	150人
アンケート有効回答数	42人（回収率 28.0%）

a) 回答者属性

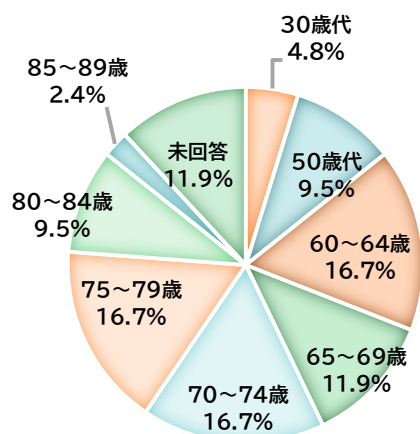
【性別】(n=42、SA)

参加者の性別は、「男性」（7人）に対して「女性」（35人）が5倍となっており、女性の参加者が多くなった。



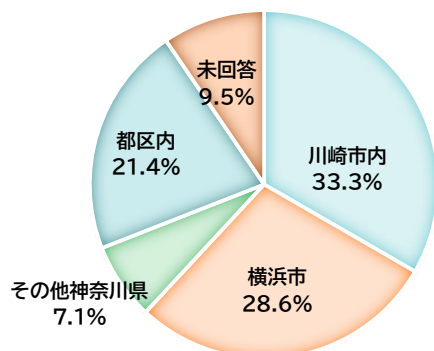
【年代】(n=42、SA)

参加者の年齢は、「60～64歳」、「70～74歳」及び「75～79歳」が最も多く、次いで、「65～69歳」の順となっている。65歳以上の高齢者が57.1%と過半数を超えており、平日の日中という時間帯であること、また、事業の特性の影響も大きいことが伺える。



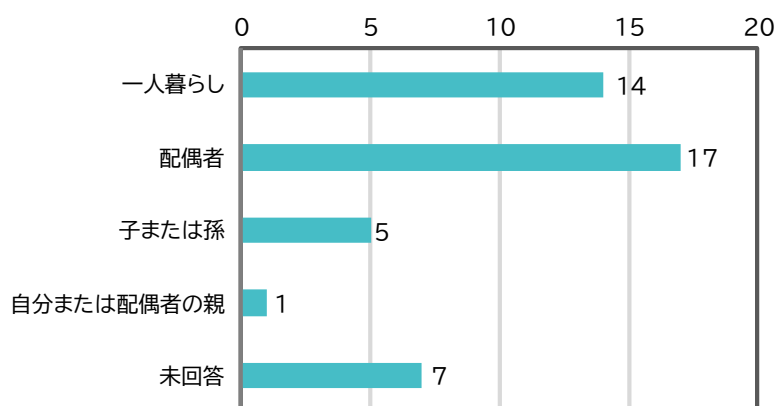
【居住地】(n=42、SA)

参加者の居住地は、「川崎市内」（14人）が最も多かったが、次いで「横浜市」（12人）及び「都区内」（9人）の順になっており、幅広いエリアから参加者が来ていることがわかる。

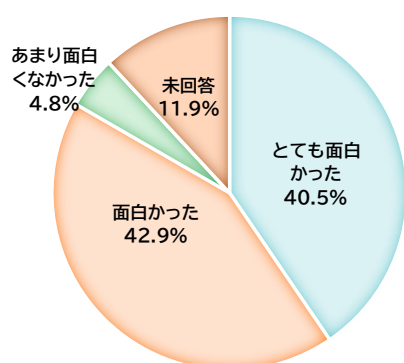


【居住状況】(n=42、MA)

一緒に住んでいる方（居住状況）についての設問については、「配偶者」との同居が最も多く、次いで「一人暮らし」となっており、4分の3程度が独居あるいは二人世帯となった。



b) 実施事業について

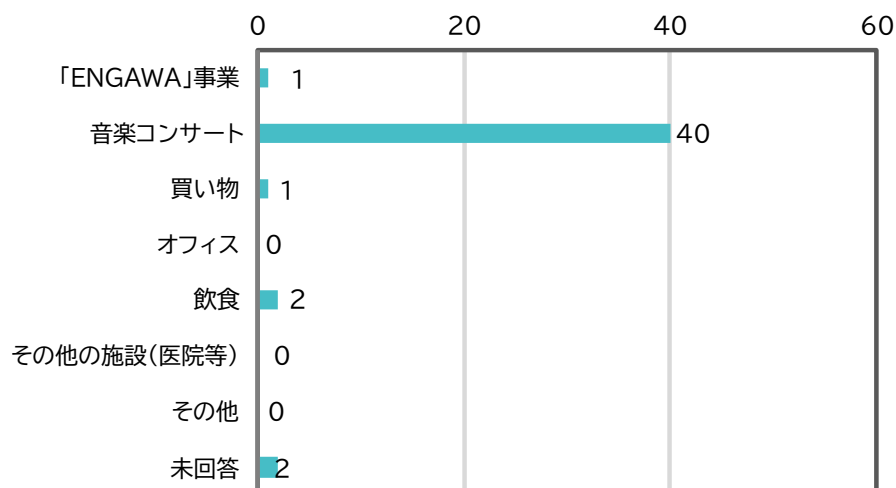


【本事業の感想】(n=42、SA)

本事業の感想については、「面白かった」(18人)及び「とても面白かった」(17人)が8割を超えており、自由意見でも継続を望む声が多かったことから、好評であったことがわかる。一方、「あまり面白くなかった」の回答が2人おり、いずれの方も後述する「交流」に関する設問で「全くできなかった」と回答しており、交流ができずに疎外感を感じてしまったことが想定される。

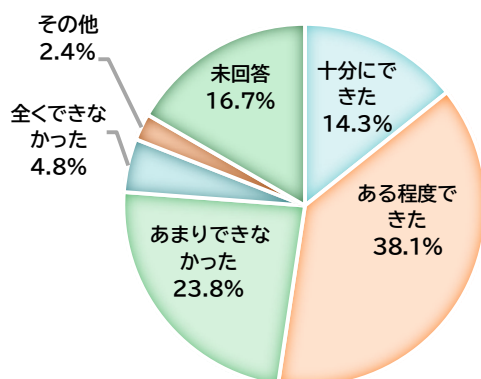
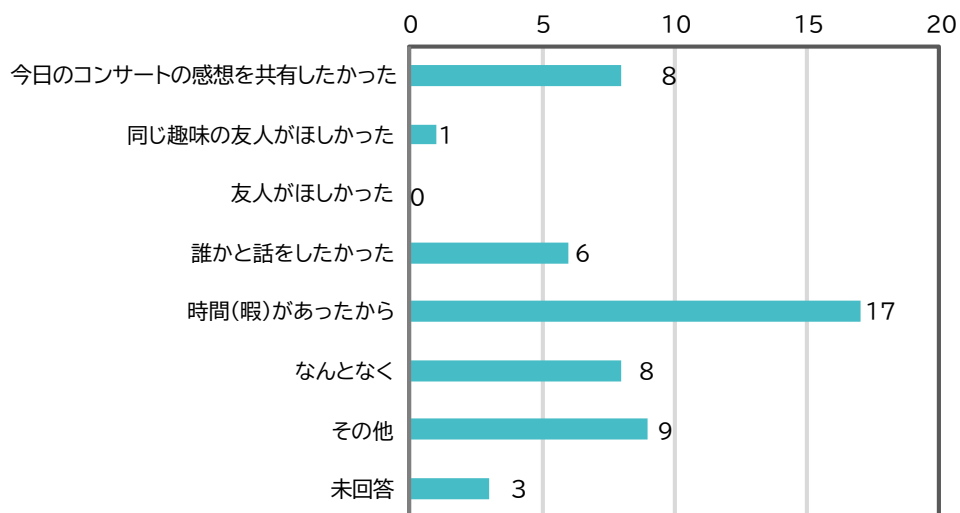
【来館目的】(n=42、MA)

来館目的については、本事業がランチコンサートの観客を対象としていることもあり、「音楽コンサート」が最も多くほぼ全員という結果となった。



【参加した理由】(n=42、MA)

本事業に参加した理由については、「時間（暇）があったから」が最も多く、ランチコンサートの前後の時間の有効活用につながった一方、「今日のコンサートの感想を共有したかった」及び「誰かと話をしたかった」の回答も一定数あり、他の観客との交流が望んでいる声もあった。



【本事業での交流】(n=42、SA)

本事業での交流については、「十分にできた」(6 人)及び「ある程度できた」(16 人)の回答が過半数を若干超える結果となった。一方、「あまりできなかった」(10 人)及び「全くできなかった」(2 人)の回答もあり、先述の通り、本事業の感想に対する「あまり面白くなかった」の回答につながっており、参加者相互の交流の契機を創るスタッフのふるまいが重要であることがわかる。

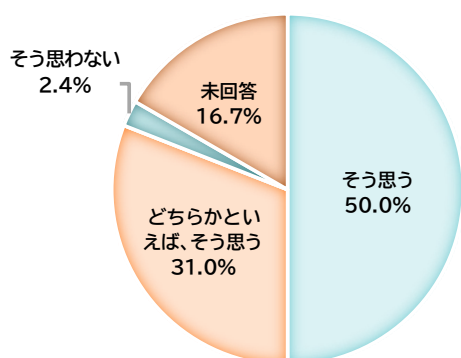
【よいと感じた点】

- ・お茶飲めてゆっくりできるところ。
- ・川崎にまつわる私の個人的な話を聞いてもらってとても嬉しかったです。
- ・そこにいるのはコンサートに来た人たちなので怪しい人はいないだろうから、本当にそこで誰かと仲良くなれたらいいな、と思います。
- ・賑やか、明るい、なごむ。
- ・もっと川崎市民に知ってほしいと思います。
- ・笑顔（スタッフ）、参加者のおだやかな表情
- ・担当の人とおしゃべりの時間が持てたことで、一人でコンサートに来て楽しさが広がった。
- ・一人ひとりが想いのままゆったりと過ごせること。
- ・座る場所、形が自然に周囲と話せて良かった。コーヒーやお菓子も話しやすい雰囲気良かった。
- ・コンサートに足を運ぶ音楽好きの初対面の人と話せた。
- ・いつも素通りしていたので、円形のスペースがあることに気付きました。
- ・ほっこりするところ。
- ・親しみやすい。
- ・知らない人とのちょっとした会話は貴重。
- ・コンサートの余韻を感じながら、ゆったりできて良かった。
- ・スタッフの方々が感じが良かったです。
- ・コンサート後に一息付けて、スタッフの方とお話ができて良かったです。
- ・コンサート開始前後に、くつろぎタイムを過ごすことができることは二重丸ものと言えるのではないかな。
- ・コンサートの後で立ち寄りやすい。
- ・接客が素晴らしい。

【改善すべき点】

- ・友達を作るのはちょっと難しいと思いました。何かテーマについての話の時に、周りも巻き込む感じができればいいのかもしれないね。でも、とても良かったです。初めての体験！ありがとうございました！
- ・もっと PR したら良いです
- ・並ばなくてももらえるようにして欲しかったかな
- ・知り合い同士がおしゃべりしているだけだったので、一人で参加している人たちが他の誰かとコンサートの感想なり話しやすいような環境にどうにかならないだろうか。
- ・交流を持ちたい。
- ・広報した方が良い。
- ・スタッフがもう少し話しかけても良い。

c)日頃の意識と生活について

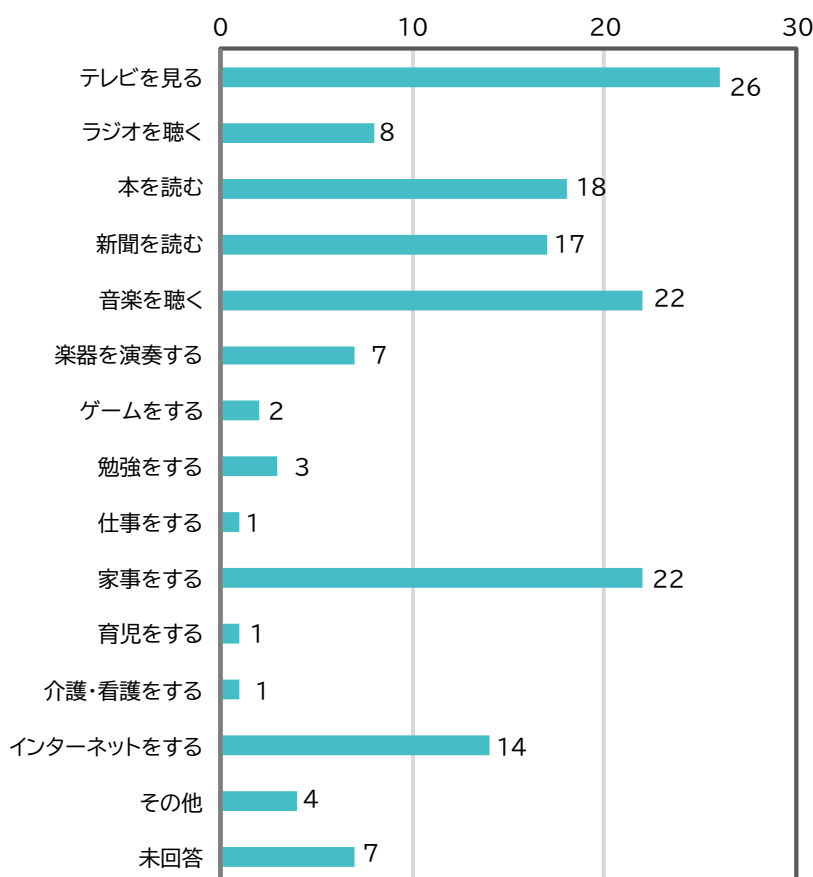


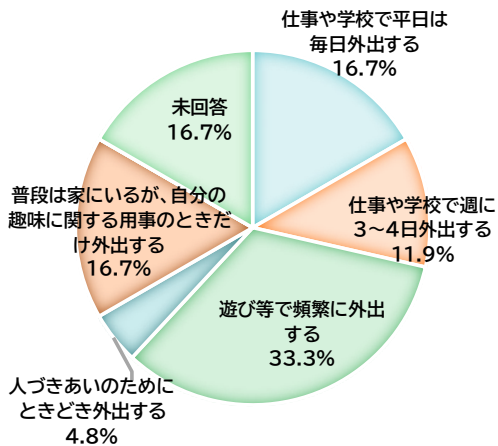
【幸福感】(n=42、SA)

今、自分が幸せだと感じているかについての実感については、「そう思う」(21人)及び「どちらかといえば、そう思う」(13人)が約8割を占めており、今回の事業(ランチコンサート)の参加者は概ね現状に満足しているという結果であった。

【普段の時間の使い方】(n=42、MA)

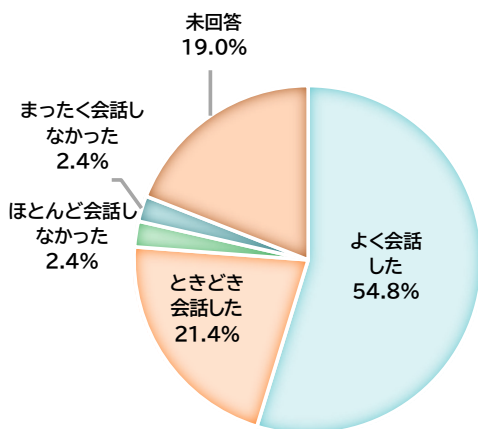
普段の時間の使い方については、「テレビを見る」(26人)が最も多く、次いで「音楽を聴く」及び「家事をする」(22人)であり、「本を読む」(18人)、「新聞を読む」(17人)及び「インターネットをする」(14人)の順となった。また、「楽器を演奏する」(11人)の回答が一定数いたことも特徴として挙げられる。一方、参加者に高齢者が占める割合が多いことから、「仕事をする」、「育児をする」は各1人と少ない結果となった。





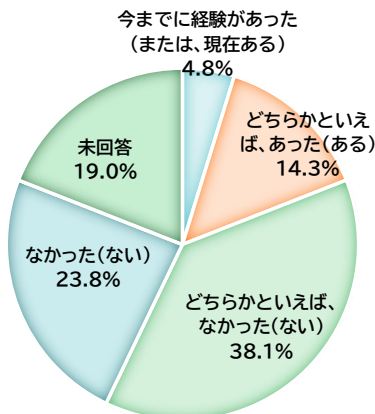
【普段の外出頻度】(n=42, SA)

普段の外出頻度については、「遊び等で頻繁に外出する」(14人)が最も多く、次いで「仕事や学校で平日は毎日外出する」及び「普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事のみ外出する」(7人)、「仕事や学校で週に3~4日外出する」(5人)の順となった。本事業の参加者は高齢者が多い傾向にあるが、遊びや趣味等で積極的に外出をしていると想定される。



【家族以外との会話】(n=42, SA)

最近6か月間の家族以外との会話については、「よく会話した」(23人)及び「ときどき会話した」(9人)で約8割弱となっており、本事業の参加者は日常的に家族以外とのコミュニケーションを取っていることがわかった。



【社会生活や日常生活を円滑に送っていない状況(経験)】(n=42, SA)

社会生活や日常生活を円滑に送っていない状況(経験)については、「なかった(ない)」(16人)及び「どちらかといえば、なかった(ない)」(10人)が多い結果となった。一方で、「どちらかといえば、あった(ある)」(6人)及び「今までに経験があった(または、現在ある)」(2人)の回答も見られた。

【今後実施してほしい要望等】

- ・前もってこういう場所があることを(コンサート前に)教えてください。もう少し座れるともっと多くの人が参加できると良いと思いました。
- ・機会があって状況が許すのなら、定期的にやってほしい。毎月開催であれば、二か月に一度くらい。企業の協賛が得られれば、サンドイッチ等の軽食をつまみながら、話してみたい。
- ・このまま続けてほしいです。ありがとうございました。

アンケート集計結果(春日井市文芸館(文化フォーラム春日井))

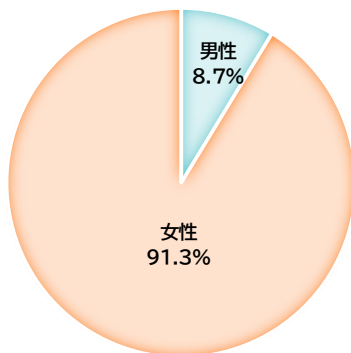
① 「あなただけの“とっておき”のアルバムをつくろう」

調査方法	会場調査（アンケート配布、回収）、QRコード配布によるウェブアンケート
参加人数	27人
アンケート有効回答数	23人（回収率 85.2%）

a) 回答者属性

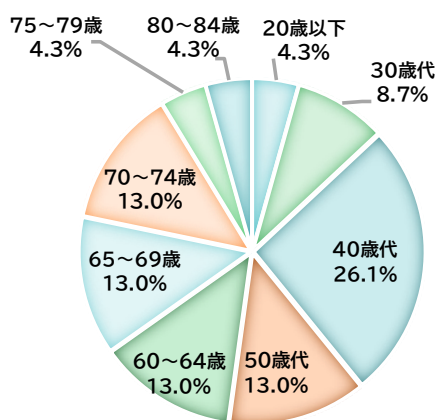
【性別】(n=23、SA)

参加者の性別は、「女性」（21人）に対して「男性」（2人）であり、女性の参加者が大半であった。



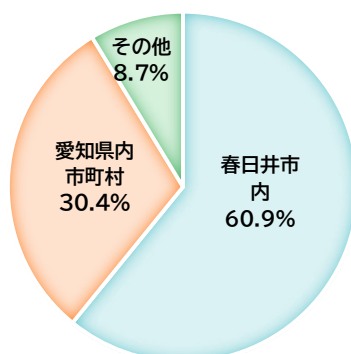
【年代】(n=23、SA)

参加者の年齢は、「40歳代」（6人）が最も多く、「50歳代」、「60～64歳」、「65～69歳」、「70～74歳」が各3人と同数であった。また、「20歳代」、「30歳代」から「75～79歳」、「80～84歳」まで参加者の年代は幅広かった。



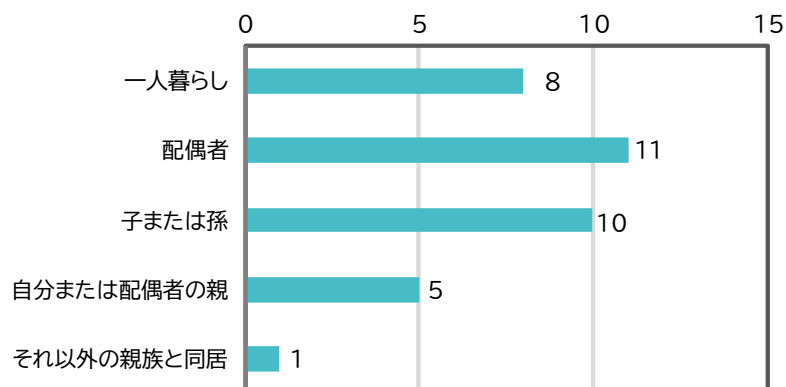
【居住地】(n=23、SA)

参加者の居住地は、「春日井市内」（14人）が最も多く、6割を超え、「愛知県内市町村」は、小牧市など、近隣市からの参加者であった。その他は、岐阜県各務原市及び滋賀県近江八幡市からの参加者であった。

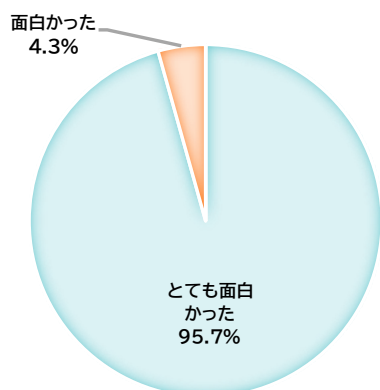


【居住状況】(n=23、MA)

一緒に住んでいる方（居住状況）についての設問については、「配偶者」との同居が最も多く、次いで「子または孫」、「一人暮らし」の順であった。



b) 「あなただけの“とっておき”のアルバムをつくろう」事業について

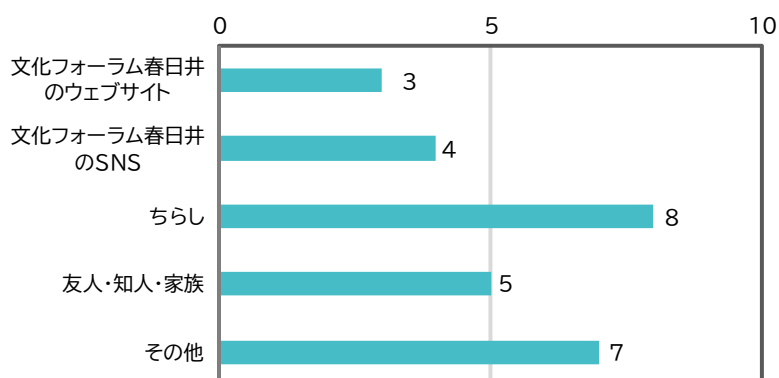


【本事業の感想】(n=23、SA)

本事業の感想については、ほとんどの参加者が「とても面白かった」(22人)との感想であり、「面白かった」(1人)を加えると全員が満足した結果となった。

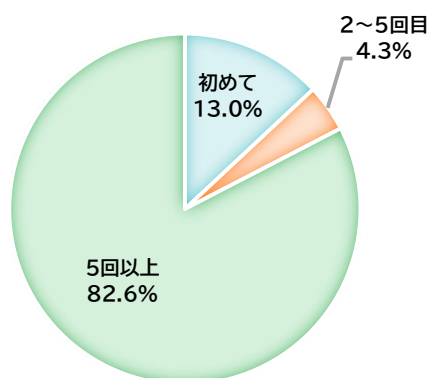
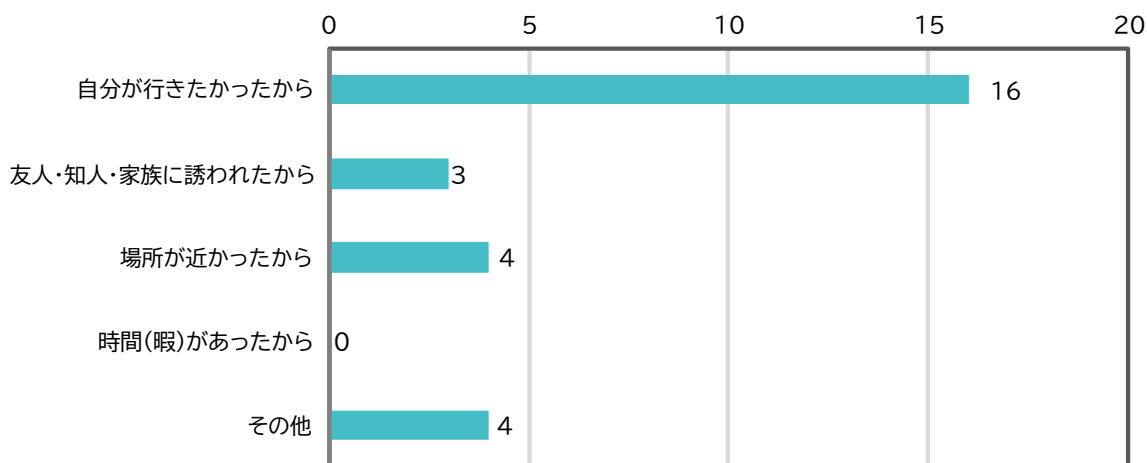
【情報源】(n=23、MA)

本事業の情報源については、「ちらし」が最も多く、次いで「その他」、「友人・知人・家族」、「文化フォーラム春日井のSNS」、「文化フォーラム春日井のウェブサイト」の順であった。「その他」の内訳は、「財団や施設、担当者からの個別の案内」(4人)が多く、「講師のSNS」という回答もあった。



【参加のきっかけ】(n=23、MA)

本事業に参加したきっかけについては、「自分が行きたかったから」が最も多く、「場所が近かったから」、「友人・知人・家族に誘われたから」の順であった。「その他」のうち、3人は講師である浅田氏に会いたかったというきっかけであった。

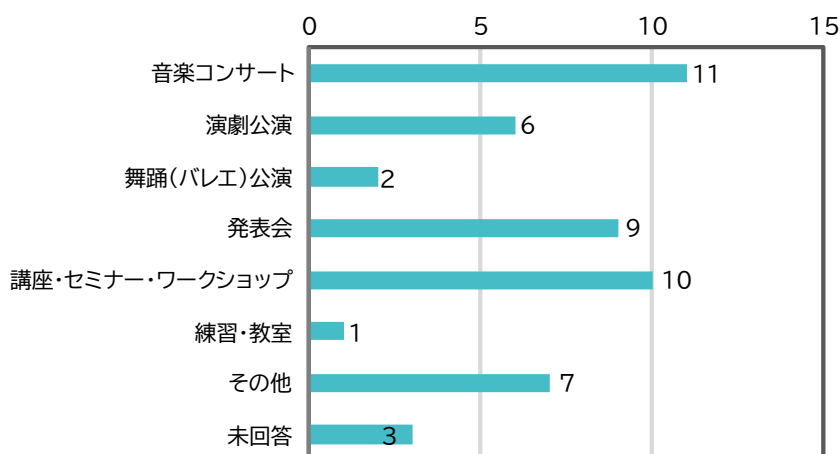


【来館回数】(n=23、SA)

文化フォーラム春日井へのこれまでの来館回数については、ほとんどの参加者が「5回以上」(19人)であり、「初めて」(3人)の参加者は少数であった。

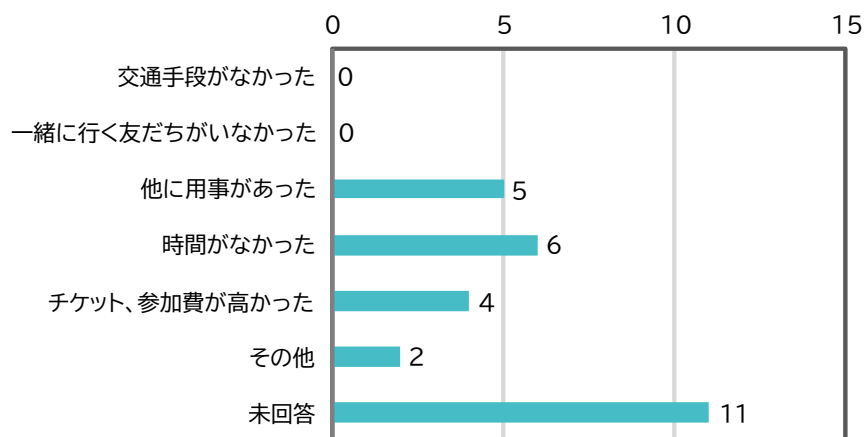
【今回以外の来館目的】(n=23、MA)

今回以外の来館目的については、「音楽コンサート」が最も多く、次いで「講座・セミナー・ワークショップ」、「発表会」、「その他」、「演劇公演」の順となった。「その他」の内訳は、図書館が5人となっており、図書館を併設している施設の特徴が示された。



【来館が困難な原因】(n=23、MA)

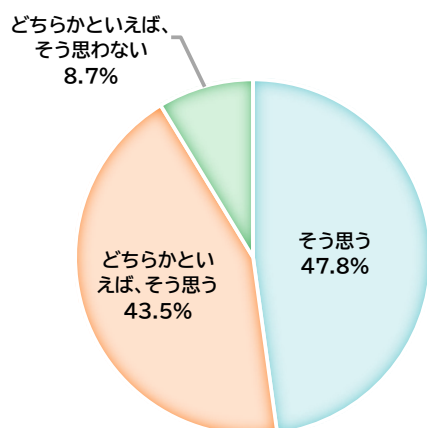
文化フォーラム春日井に来館できなかった原因については、「時間がなかった」、「他に用事があった」、「チケット、参加費が高かった」の回答になっており、個人的な理由が多く挙げられた。一方、「交通手段がなかった」、「一緒に行く友だちがいなかった」の回答はなかった。



【よいと感じた点】

- ・自己否定もなく、少人数でわきあいあいと楽しめたこと。4時間という時間もちょうどよかった。
- ・写真を見ながら、自分の振り返りができた。
- ・わきあいあいとしていて、質問しやすかったところ。
- ・専門家の先生に教わりながら、楽しいお話とアルバム作りのコツや、他の参加者の方と一緒に制作できたことは貴重な体験でした。
- ・少人数で他の皆さんと交流できたことが良かったです。
- ・浅田さんをはじめ、スタッフの皆さんがニコニコ温かくて、すてきな時間を過ごしました。他の方も話しやすく良かったです。子どもにも皆さん優しくしてくれて、本当に嬉しかったです。
- ・アルバム作り、参加しやすい参加費。
- ・時間を十分にとってもらったこと（4時間）。

c) 日頃の意識と生活について

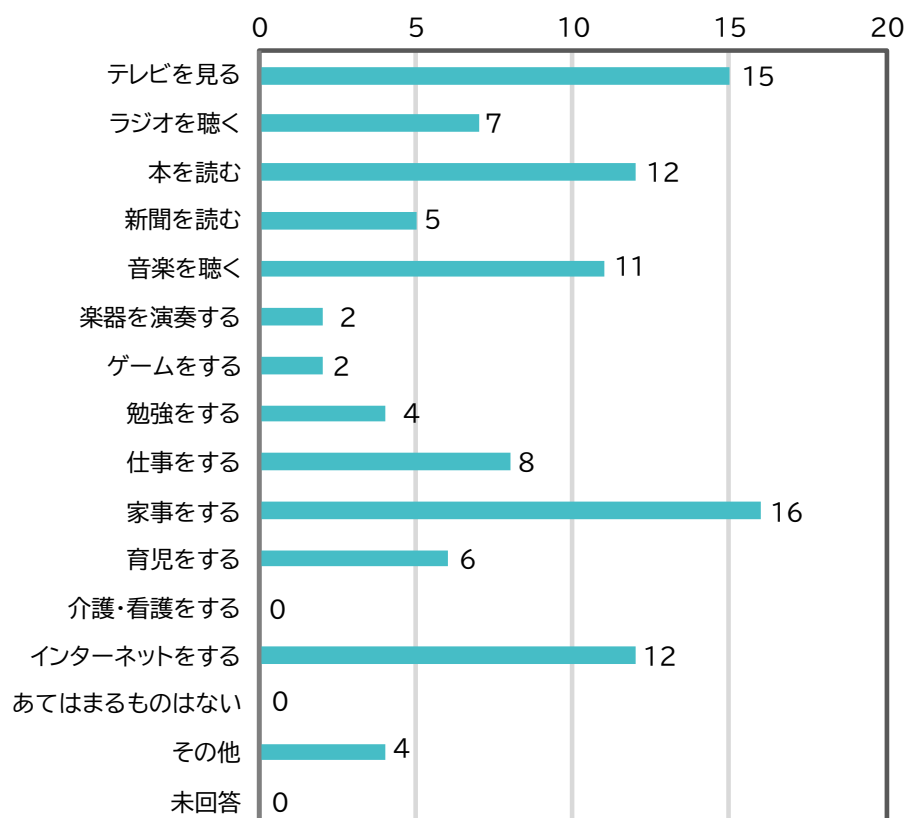


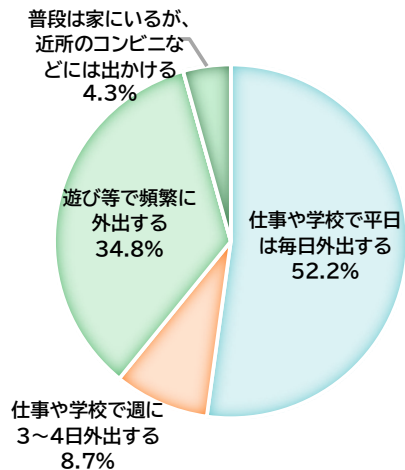
【幸福感】(n=23、SA)

今、自分が幸せだと感じているかについての実感については、「そう思う」(11 人) 及び「どちらかといえば、そう思う」(10 人) がほとんど占めており、今回の事業の参加者は概ね現状に満足しているという結果であった。

【普段の時間の使い方】(n=23、MA)

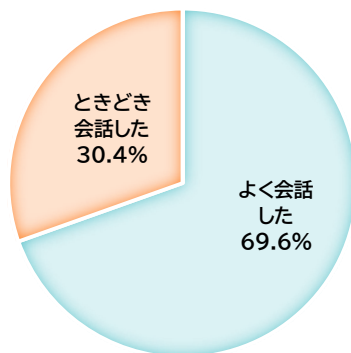
普段の時間の使い方については、「家事をする」(16 人) が最も多く、次いで「テレビを見る」(15 人)、「本を読む」及び「インターネットをする」(12 人)、「音楽を聴く」(11 人) の順となった。





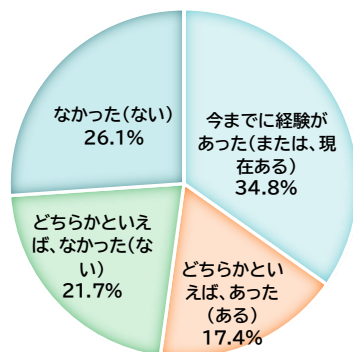
【普段の外出頻度】(n=23、SA)

普段の外出頻度については、「仕事や学校で平日は毎日外出する」(12人)が最も多く、「遊び等で頻繁に外出する」(34人)を合わせると約9割弱となり、ほとんどが積極的に外出をしていると想定される結果となった。



【家族以外との会話】(n=23、SA)

最近6か月間の家族以外との会話については、「よく会話をした」(16人)及び「ときどき会話をした」(7人)となり、本事業の参加者全員が日常的に家族以外とのコミュニケーションを取っていることがわかった。



【社会生活や日常生活を円滑に送れていない状況(経験)】(n=23、SA)

社会生活や日常生活を円滑に送れていない状況(経験)については、「なかった(ない)」(6人)及び「どちらかといえば、なかった(ない)」(5人)であった。一方で、「どちらかといえば、あった(ある)」(4人)及び「今までに経験があった(または、現在ある)」(8人)であり、両者がほぼ拮抗しているという結果となった。

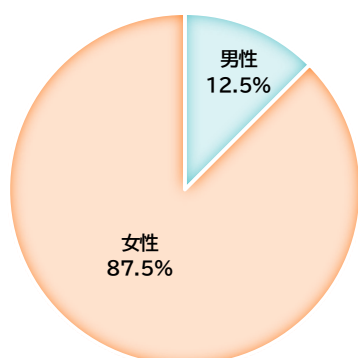
【今後実施してほしい要望等】

- ・時間内に仕上げなくても良かったので、自分のペースで嬉しかった。
- ・ライドシェアを利用して文化フォーラムまで行く、ことのサポート。文化フォーラム専門のライドシェアをやってみたい。

② モヤモヤの正体 わたしと身体のつながりを知る

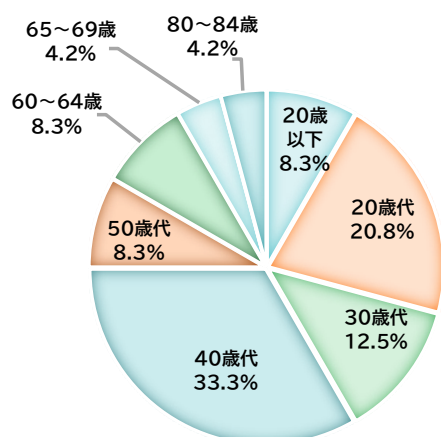
調査方法	会場調査（アンケート配布、回収）、QRコード配布によるウェブアンケート
参加人数	24人
アンケート有効回答数	24人（回収率 100%）

a) 回答者属性



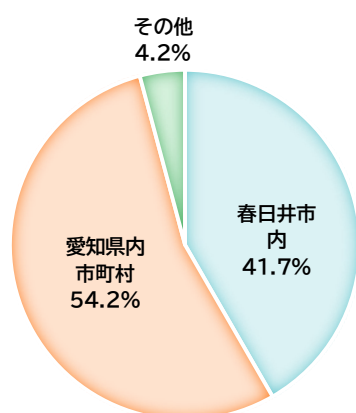
【性別】(n=24, SA)

参加者の性別は、「女性」（21人）に対して「男性」（3人）であり、女性の参加者が大半であった。



【年代】(n=24, SA)

参加者の年齢は、「40歳代」（8人）が最も多く、次いで「20歳代」（5人）であった。また、「20歳以下」「50歳代」「60～64歳」「65～69歳」「80～78歳」も参加しており、本事業も参加者の年代は幅広かった。

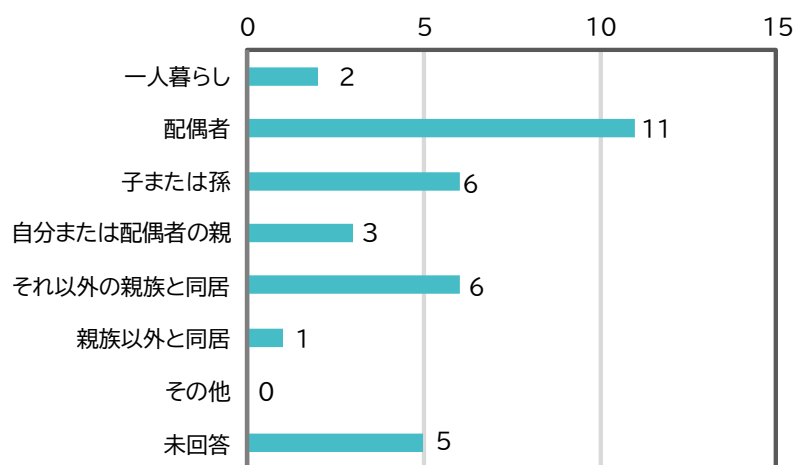


【居住地】(n=24, SA)

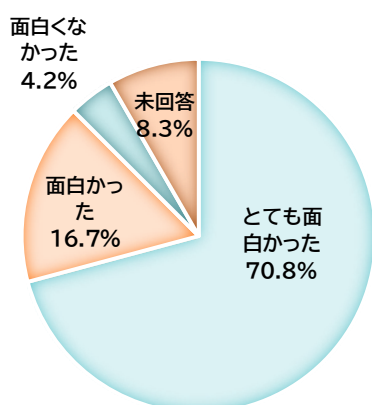
参加者の居住地は、「愛知県内市町村」（13人）が最も多く、「春日井市内」（10人）と合わせてほとんどとなった。「愛知県内市町村」の内、半数が名古屋市からの参加者であった。その他は、岐阜県関市からの参加者であった。

【居住状況】(n=24、MA)

一緒に住んでいる方（居住状況）についての設問については、「配偶者」との同居が最も多く、次いで「子または孫」及び「それ以外の親族と同居」の順であった。一方で「一人暮らし」は2人のみとなった。



b) 「モヤモヤの正体 わたしと身体つながりを知る」事業について

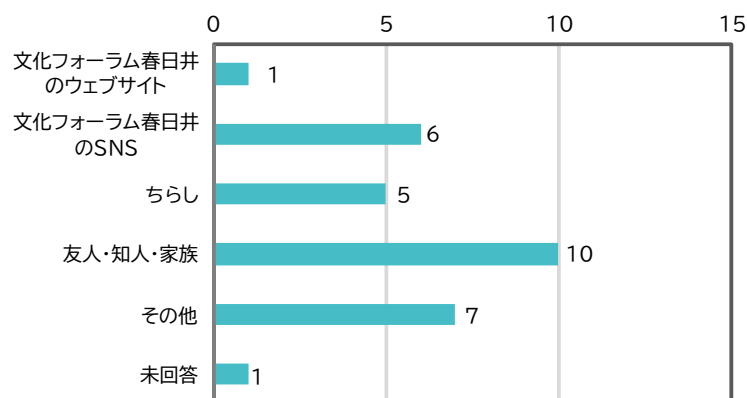


【本事業の感想】(n=24、SA)

本事業の感想については、ほとんどの参加者が「とても面白かった」(17人)との感想であり、「面白かった」(4人)を加えるとほとんど全員が満足した結果となった。「面白くなかった」の回答は、自由意見で「高齢者でほぼ聞き取れなかった」と回答しており、今後、主催者の配置は必要であるものの、事業自体の感想とは言えないものであった。

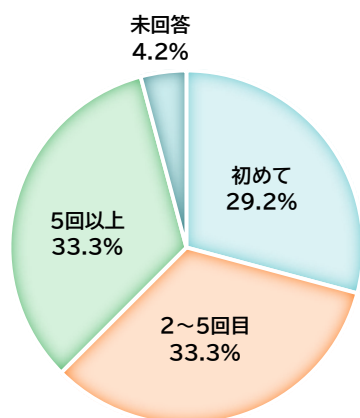
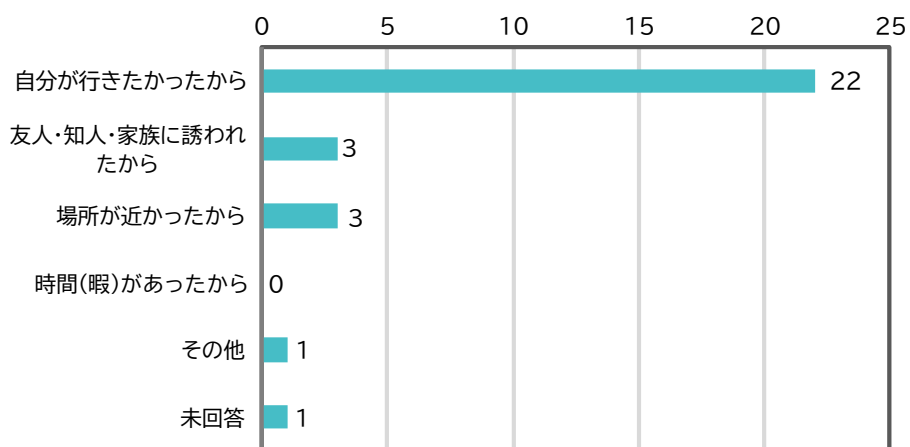
【情報源】(n=24、MA)

本事業の情報源については、「友人・知人・家族」が最も多く、次いで「その他」、「文化フォーラム春日井のSNS」、「ちらし」の順であった。「その他」の内訳は、「講師のSNS」(4人)が多かった。



【参加のきっかけ】(n=24、MA)

本事業に参加したきっかけについては、「自分が行きたかったから」が最も多く、「友人・知人・家族に誘われたから」及び「場所が近かったから」の順であった。

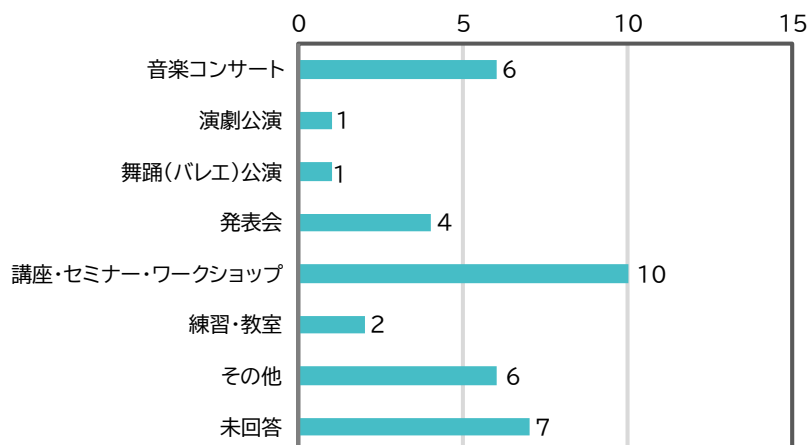


【来館回数】(n=24、SA)

文化フォーラム春日井へのこれまでの来館回数については、ほとんどの参加者が「2～5回目」及び「5回以上」(8人)、「初めて」(7人)、がほぼ同数であり、アルバム事業と異なり、様々な参加者であったことがわかる。

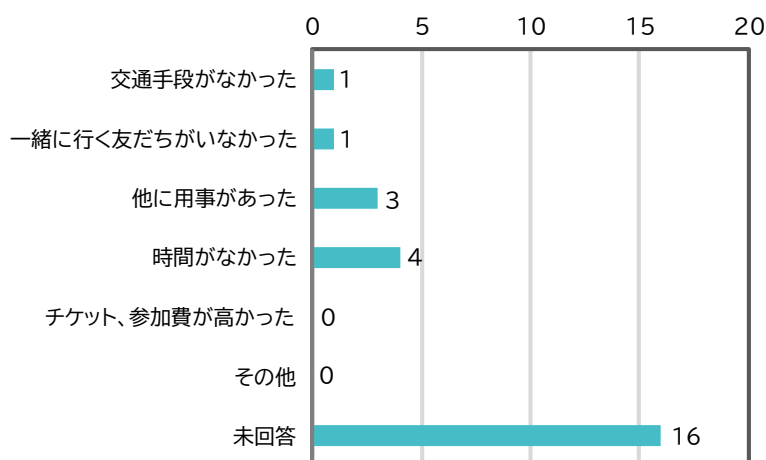
【今回以外の来館目的】(n=24、MA)

今回以外の来館目的については、「講座・セミナー・ワークショップ」が最も多く、次いで「音楽コンサート」及び「その他」、「発表会」の順となった。「その他」の内訳は、展示5人、図書館が3人となっており、展示施設及び図書館を併設している施設の特徴が示された。



【来館が困難な原因】(n=24、MA)

文化フォーラム春日井に来館できなかった原因については、「初めて」の来館が多かったこともあり、「未回答」が多かったが、「時間がなかった」、「他に用事があった」の回答が比較的多くなった。



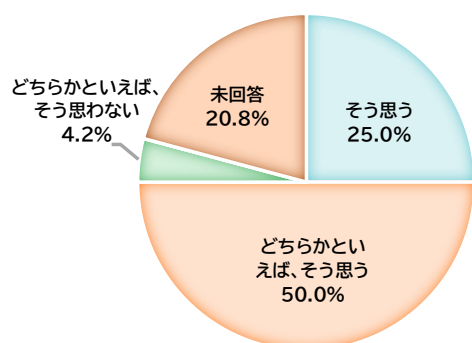
【よいと感じた点】

- ・考えるきっかけを与えられたこと
- ・椅子に座って、みんなに向けて話す感じ。ジャッジしないことや場の空気を作ってくださって話しやすい状態にしてくださったこと。お話の内容がとても素敵でした。楽しかった。また出席したいです。
- ・生きていく上での新しい視点を知った。日々の振り返りができた。
- ・講師と話をしつつ、参加者の話も聞けた。
- ・聞いてもらいたい人がたくさんいると思った。その人の話はその人のもの。たくさんの学びがありました。
- ・攻撃性も押し付ける感じもなく、参加者の皆さんのペースを大切にしたいという運営側の配慮が嬉しかったです。
- ・他の人の話も聞けるし、自分が言い残したことがあってもアドバイスが聞けたりするからとても良かった。
- ・少人数で行えたこと。
- ・同じようなことで悩んだり考えたりしている人と会って話すことができて良かったです。
- ・静かな空間で一人ひとりに丁寧に詰めていく対話。おだやかな時間。
- ・攻撃性も、押し付ける感じもなく、参加者皆さんのペースを大切にしたいという運営側の配慮が嬉しかったです。

【改善すべき点】

- ・1時間ごとに休憩があると良かった。
- ・私は高齢者で難聴である。講師の言葉も2分の1くらいしか聞き分けられなかった。質問者の言葉は全く聞き分けられず。それを解決する手段は私にあるのだから、致し方ない。マイク、スピーカーは雰囲気壊れる。ならば、ポータブル、補聴器などの準備をされても良いのではないか。

c) 日頃の意識と生活について

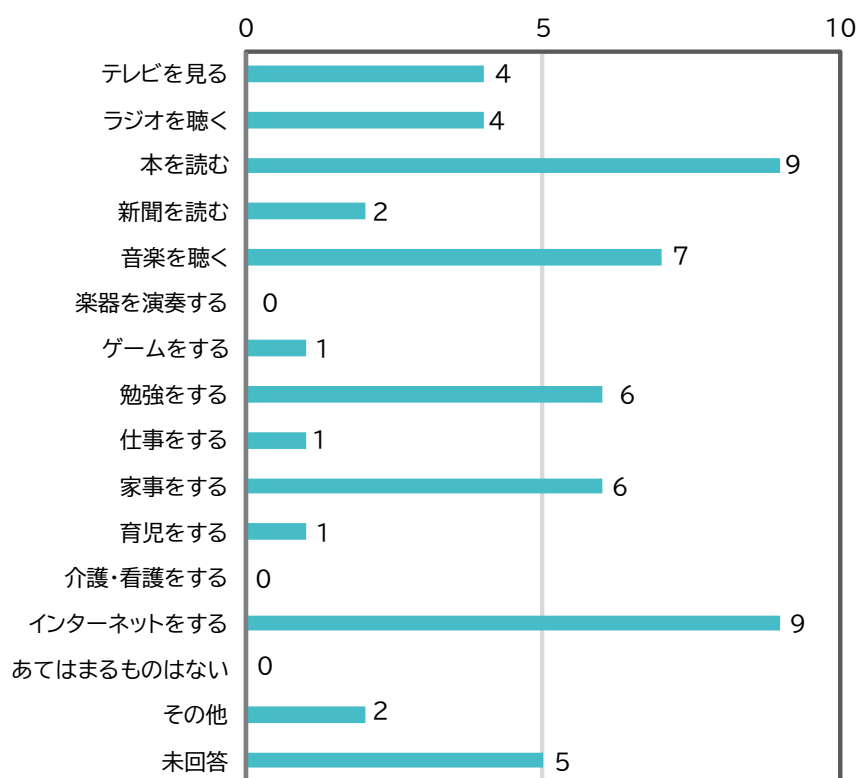


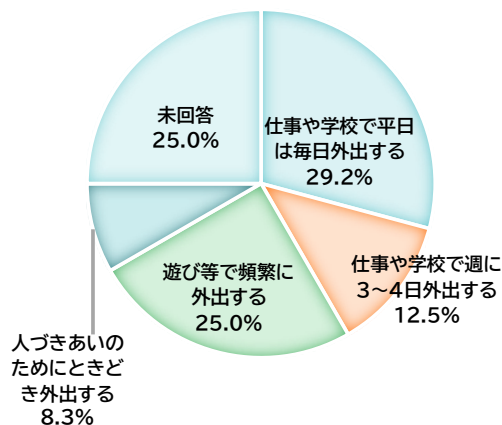
【幸福感】(n=24, SA)

今、自分が幸せだと感じているかについての実感については、「そう思う」(6人)及び「どちらかといえば、そう思う」(12人)が4分の3を占めていた。

【普段の時間の使い方】(n=24, MA)

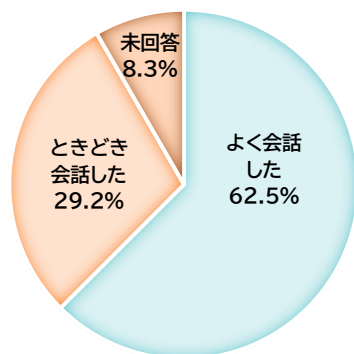
普段の時間の使い方については、「本を読む」及び「インターネットをする」(9人)が最も多く、次いで「音楽を聴く」(7人)、「勉強をする」及び「家事をする」(6人)の順となった。





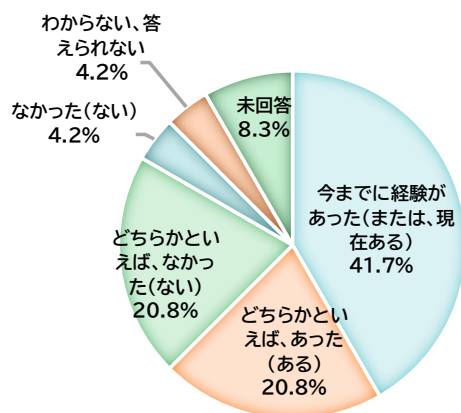
【普段の外出頻度】(n=24、SA)

普段の外出頻度については、「仕事や学校で平日は毎日外出する」(7人)が最も多く、次いで「遊び等で頻繁に外出する」(6人)、「仕事や学校で週に3~4日外出する」(3人)、「人づきあいのためにときどき外出する」(2人)の順であった。



【家族以外との会話】(n=24、SA)

最近6か月間の家族以外との会話については、「よく会話をした」(15人)及び「ときどき会話をした」(7人)となり、本事業の参加者全員が日常的に家族以外とのコミュニケーションを取っていることがわかった。



【社会生活や日常生活を円滑に送れていない状況(経験)】(n=24、SA)

社会生活や日常生活を円滑に送れていない状況(経験)については、「今までに経験があった(または、現在ある)」(10人)が最も多く、「どちらかといえば、あった(ある)」(5人)と合わせて約6割が社会生活や日常生活を円滑に送れていない状況(経験)を有している結果であった。

【今後実施してほしい要望等】

- ・自分と向き合うことや考えたり、生き方に対するヒントなどを教えてくれると良いと思った。
- ・勇気を出して質問もできて良かったです。
- ・優しい雰囲気で落ち着け、自分の話が少しでもできて嬉しかったです。ありがとうございました。
- ・仕事で緊張していることが多いことに気づけた。もっとゆったりと安心した気持ちでいたいと思いました。
- ・ありがとうございました。尹さんの講座、またお願いします。
- ・またやってほしい。
- ・今回みたいに話したり聞いたりするイベントがあったら嬉しいと思います。ありがとうございました。

アンケート集計結果(伊丹市立文化会館(東リいたみホール))

調査方法	QRコード配布によるウェブアンケート
参加人数	12人
アンケート有効回答数	1人(回収率 8.33%)

回収率が低いため、測定はできていない。

アンケートの回答は、伊丹市内の11歳の女の子1人であり、本事業に参加してよかったこととして「絵をほめてくれた」という回答であった。

アンケート集計結果(三股町立文化会館)

調査方法	会場調査（アンケート配布、回収）、QRコード配布によるウェブアンケート
参加人数	34 人
アンケート有効回答数	16 人（回収率 47.1%）

子どもを対象としたアンケート結果については、有効回答数が 5 人と少なく、また、多くの設問で未回答が多いため、以下の保護者を対象としたアンケート集計結果にコメントとして追記することとした。

a) 回答者属性

【性別】(n=16、SA)

保護者の性別は、「女性」(12 人)に対して「男性」(4 人)であり、女性の参加者が多かった。

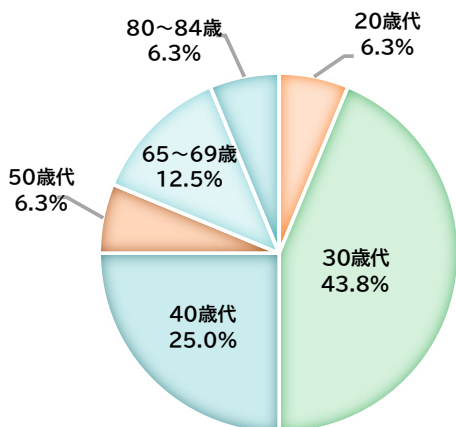
子どもの性別も同様に、「女の子」(4 人)に対して「男の子」(1 人)であり、女性の参加者が多かった。



【年代】(n=16、SA)

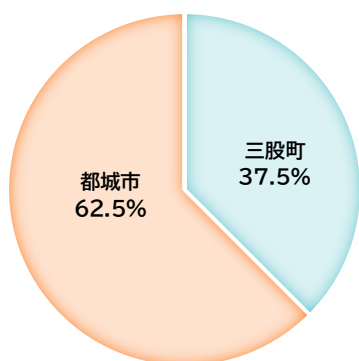
保護者の年齢は、「30 歳代」(7 人)が最も多く、次いで「40 歳代」(4 人)の順であり、「65～69 歳」、「50 歳代」、「80～84 歳」など、祖父母が孫を連れてきたケースもあった。

子どもの年齢は、10 歳が 2 人、7 歳が 2 人、8 歳が 1 人であった。



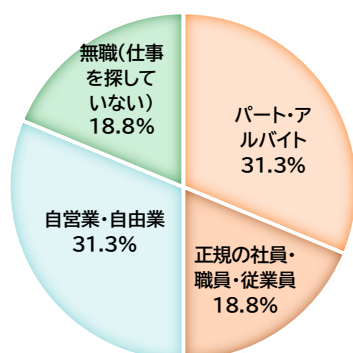
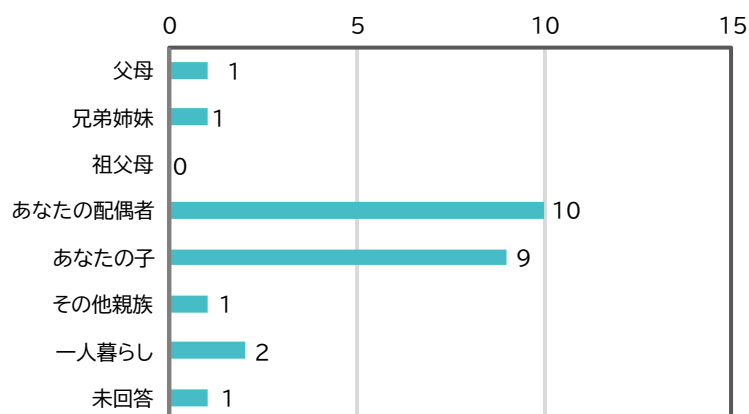
【居住地】(n=16、SA)

参加者の居住地は、「都城市」(10 人)が最も多く、6 割を超え、他は「三股町」(6 人)であった。



【居住状況】(n=16、MA)

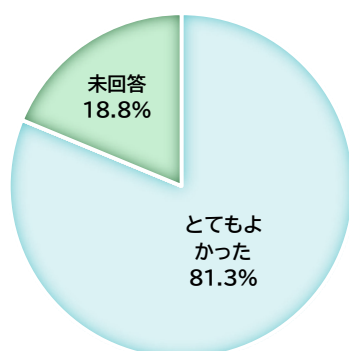
一緒に住んでいる方（居住状況）についての設問については、「配偶者」との同居が最も多く、次いで「子」、「一人暮らし」の順であった。



【職業】(n=16、SA)

参加者の職業は、「パート・アルバイト」及び「自営業・自由業」(5人)が多く、他は「正規の社員・職員・従業員」及び「無職(仕事を探していない)」(3人)であった。

b) 実施事業について



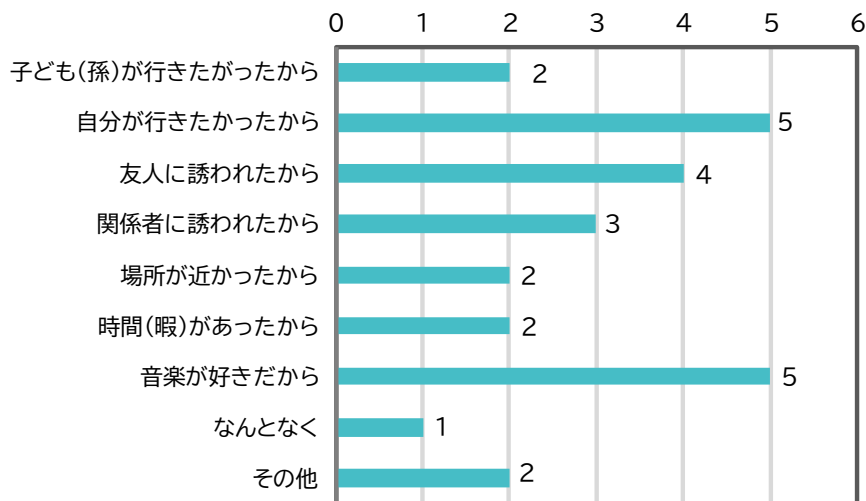
【本事業の感想】(n=16、SA)

本事業の感想については、ほとんどの参加者が「とてもよかった」(13人)であり、ほぼ全員が満足した結果となった。

子どもについても同様に、5人の内4人が「とてもよかった」という回答であった。

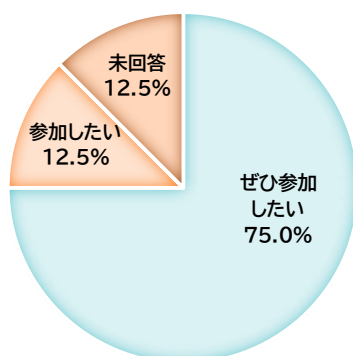
【参加のきっかけ】(n=16、MA)

本事業に参加したきっかけについては、「自分が行きたかったから」及び「音楽が好きだから」が最も多く、「友人に誘われたから」、「場所が近かったから」「友時間（暇）があったから」及び「その他」の順であった。



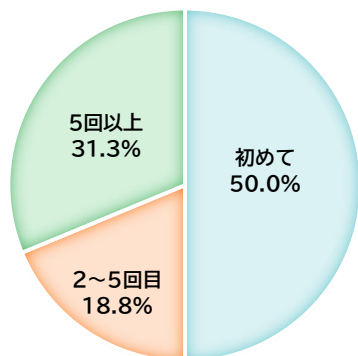
【よいと感じた点】

- ・のんびりみんなでその時間を楽しめたこと。
- ・ゆったりとリラックスして聴ける曲や雰囲気、会場の景色（背景が三股町の夕焼けの景色、地域の人、子ども）。みんなで食べられる形式。
- ・子どもが動いても大丈夫なこと。
- ・終わった後に、スタッフの方ともみんなでご飯を食べれて良かったです。
- ・子どもを巻き込んだプログラムもあり、子どもたちの発言を活かして歌ってくださったから。
- ・フリースタイルで温かい雰囲気。子連れも OK。スタッフも優しい。
- ・子どもを連れてきやすいのが良かったです。



【次回の参加意向】(n=16、SA)

次回の参加意向については、「ぜひ参加したい」（12人）及び「参加したい」（2人）の回答となっており、ほとんどの参加者が次回も参加したいという回答であった。

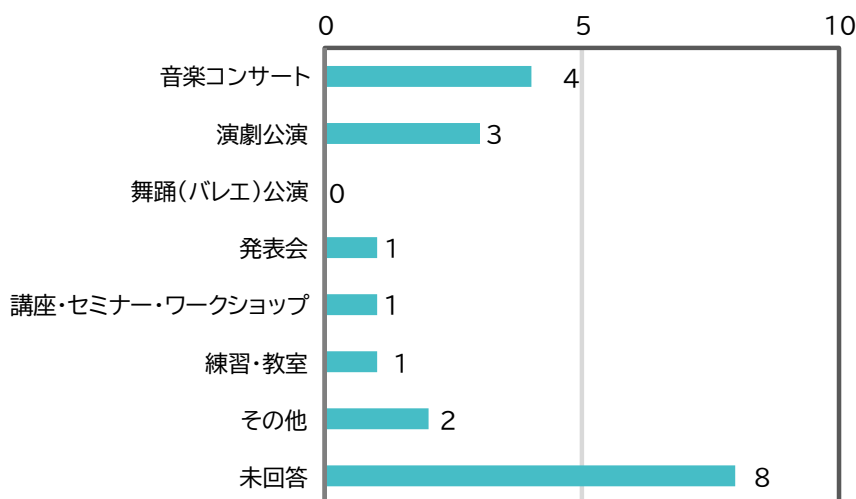


【来館回数】(n=16、SA)

三股町立文化会館へのこれまでの来館回数については、「初めて」(3人)が最も多く半数であった。このことから、本事業が来館のきっかけになったと言える。

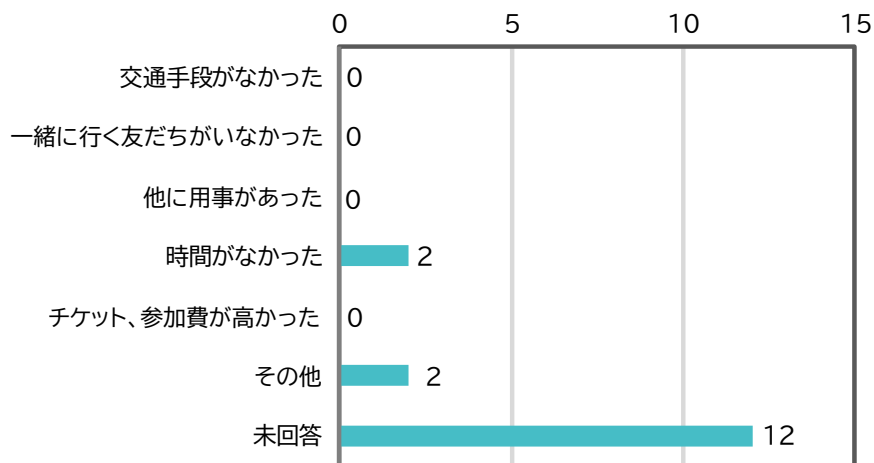
【今回以外の来館目的】(n=16、MA)

今回以外の来館目的については、「音楽コンサート」が最も多く、次いで「演劇公演」であった。



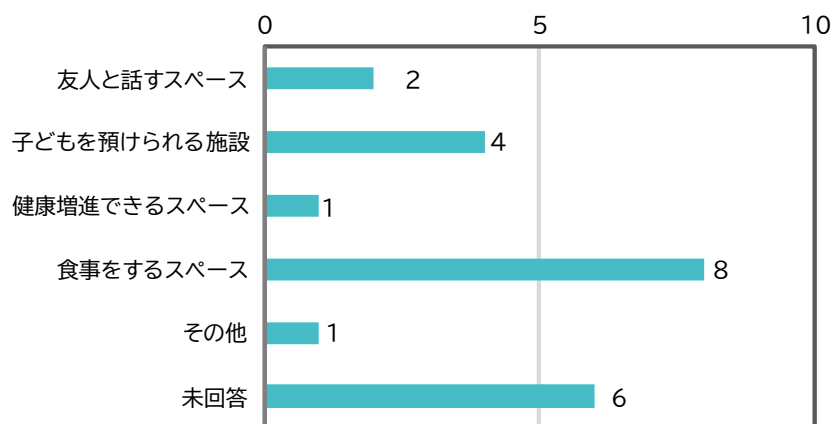
【来館が困難な原因】(n=16、MA)

三股町立文化会館に来館できなかった原因については、「時間がなかった」の回答が多く挙げられた。一方、「交通手段がなかった」、「一緒に行く友だちがいなかった」の回答はなかった。



【希望するスペース】(n=16、MA)

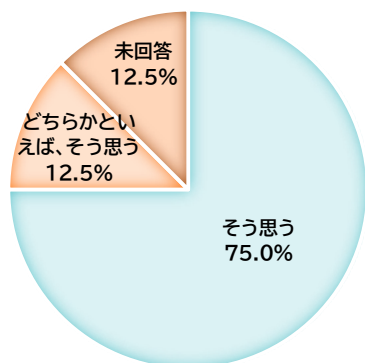
三股町立文化会館に希望する機能としては、「食事をするスペース」が最も多く、次いで「子どもを預けられる施設」、「友人と話すスペース」の順であった。



c) 日頃の意識と生活について

【幸福感】(n=16、SA)

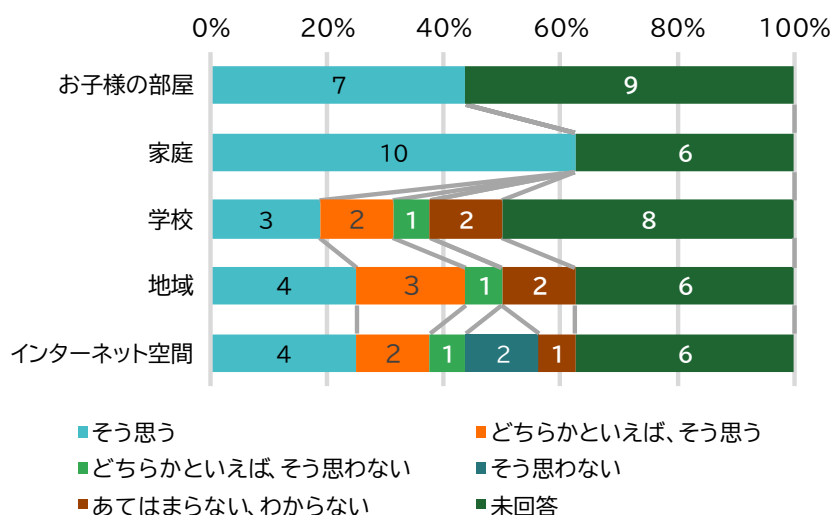
今、自分が幸せだと感じているかについての実感については、「そう思う」(12人)及び「どちらかといえば、そう思う」(2人)がほとんど占めており、今回の事業の参加者は概ね現状に満足しているという結果であった。



子どもについても、3人の回答があったが、「そう思う」が2人、「どちらかといえば、そう思う」が1人という結果であった。

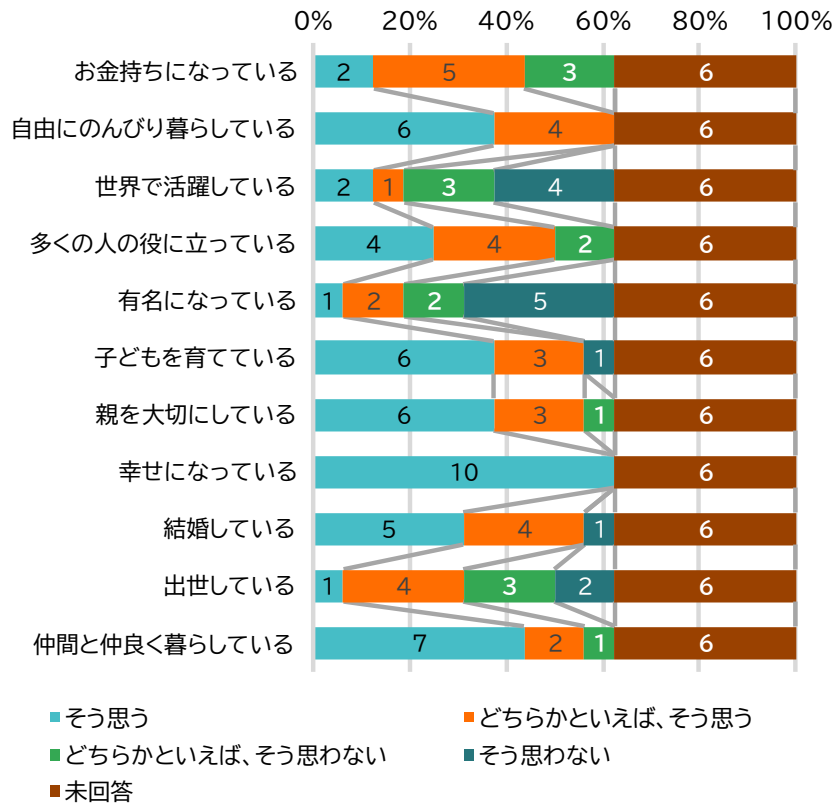
【子どもにとっての居場所】(n=16、MA)

子どもにとっての居場所について、保護者は「お子様の部屋」及び「家庭」が居場所として感じられていると考えており、子どもも同様の回答であった。対して、「インターネット空間」を居場所として挙げる保護者もあったが、子どもは居場所としては考えていないという回答であった。



【子どもの将来】(n=16、MA)

子どもの将来については、「幸せになっている」が最も多く、過半数の回答となった。次いで「仲間と仲良く暮らしている」「自由にのんびり暮らしている」、「子どもを育てている」及び「親を大切にしている」が回答者の過半数となっており、「結婚している」が回答者の半数であった。



【今後実施してほしい要望等】

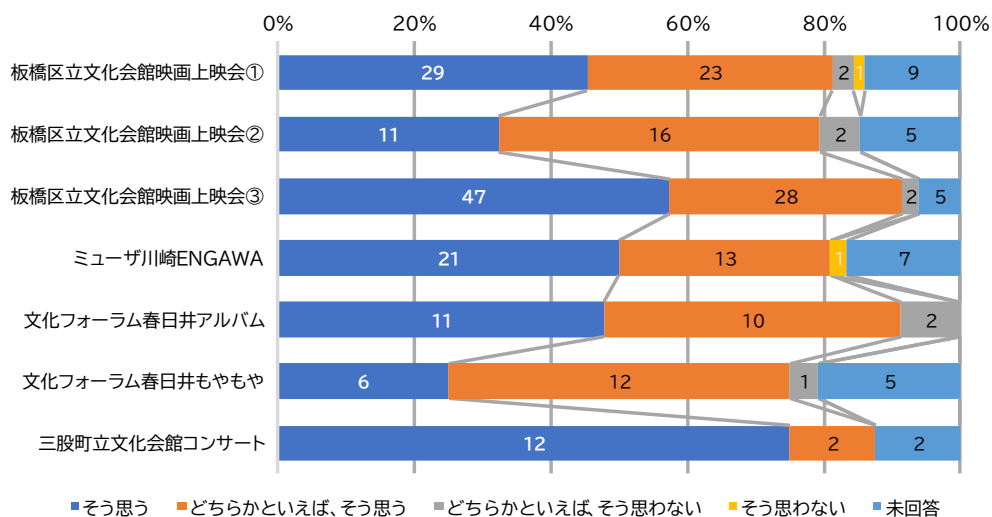
- ・今日のようにのんびり楽しめるものがあるといいなと思います。
- ・今回のような企画をまた行ってほしい。地域や近くの人たちが気軽に表現できる機会やイベント、会館前でのストリートライブみたいなものもあってほしい。
- ・子どもたちが音楽と触れ合える機会があれば、また少々騒いでも大丈夫という場所であれば、とても良いと思います。クラシック音楽に出会える場所も素敵です。
- ・とても楽しかったです。子どもたちもリラックスして楽しんでいました。ありがとうございました。ご飯も美味しかったです。またぜひ聞かせてください。

V. モデル事業を終えての成果と課題

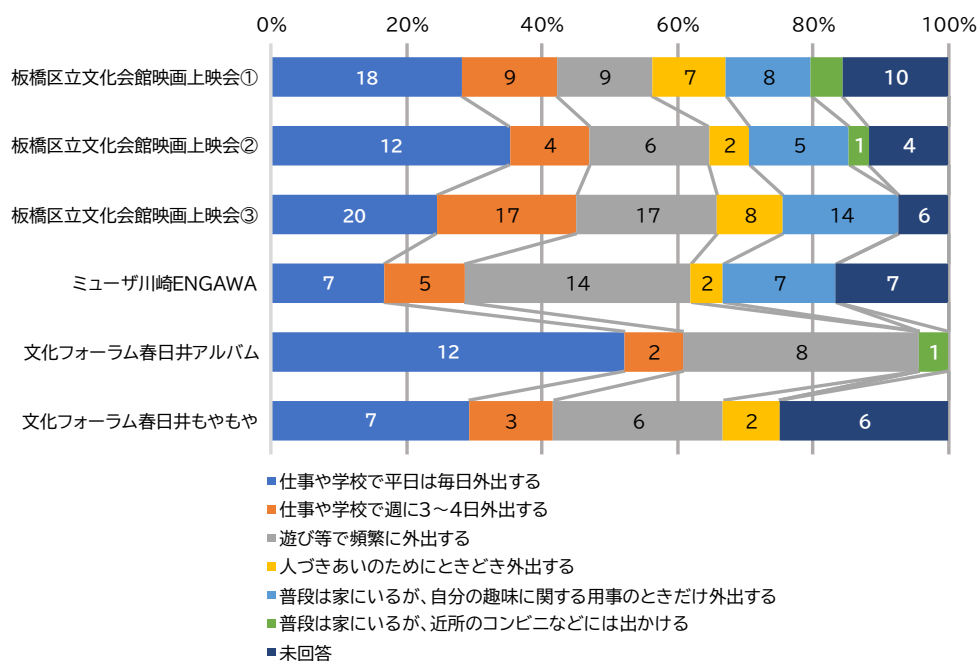
1. アンケート結果からの示唆

各モデル事業のアンケート調査のうち、各事業の比較ができる設問について比較を行った。

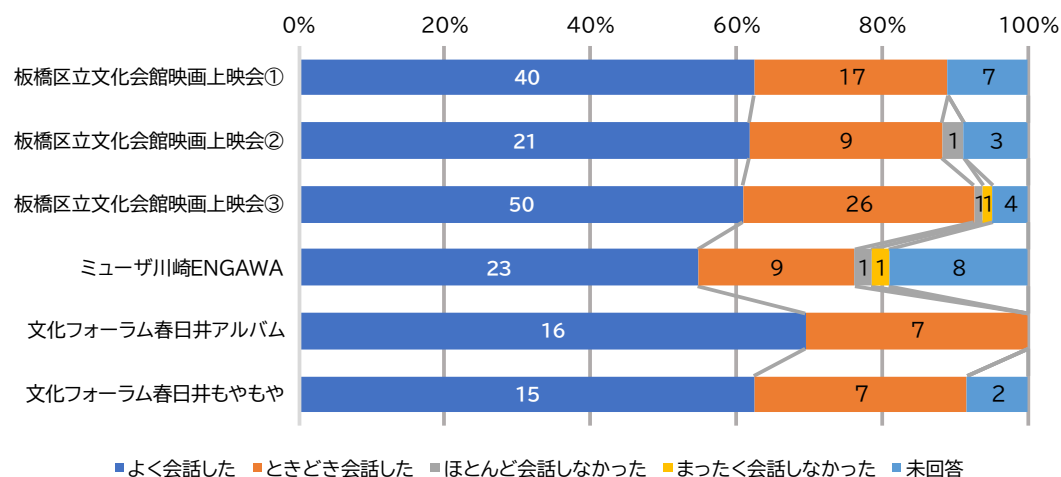
現在の幸福感を問う設問（あなたは、今、自分が幸せだと思いますか。あなたの実感をお答えください。）については、「そう思う」及び「どちらかといえば、そう思う」が全ての事業で約 7 割を超え、概ね 8～9 割程度となっており、今回の参加者は幸福感を感じている方が多いことがわかる。



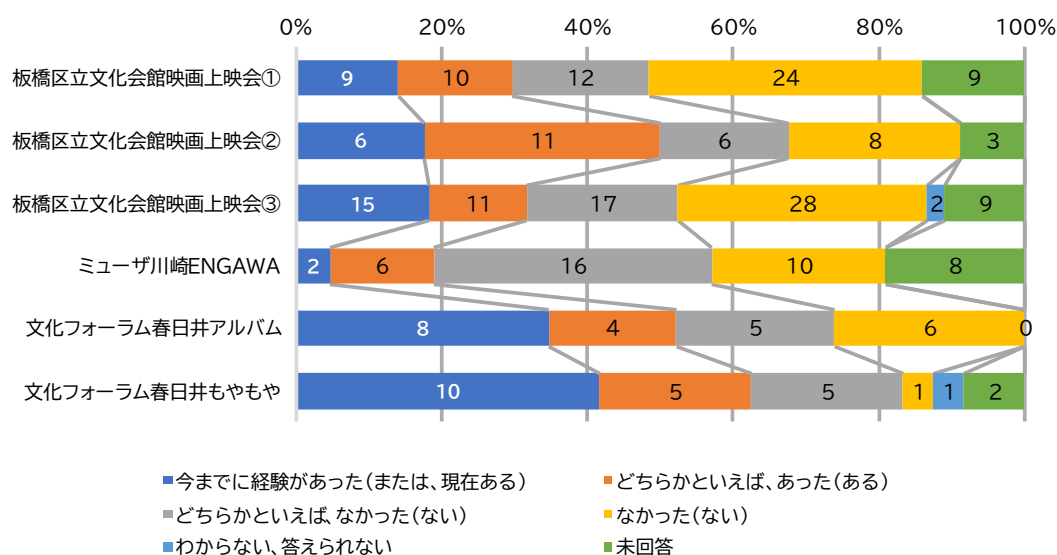
日常の外出頻度についても、「仕事や学校で平日は毎日外出する」、「仕事や学校で週に 3～4 日外出する」及び「遊び等で頻繁に外出する」との比較的日常的に外出するという回答が全ての事業で約 7 割を超え、概ね 8～9 割程度となっており、外出頻度も高い。（三股町立文化会館でのアンケートでは、子どもと保護者双方へのアンケートとしたことから、外出頻度以降の集計データはないことをここに注記する。）



また、家族以外との会話についても同様に、全ての事業で約7割を超え、概ね8～9割程度となっており、ほとんどの参加者が幸福感を感じており、外出頻度及び家族以外との会話からも比較的外部とのコミュニケーションがある層であると言える。



一方で、「あなたは今まで（もしくは現在）に、社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験がありましたか」の設問を見ると、「今までに経験があった（または、現在ある）」及び「どちらかといえば、あった（ある）」という回答がミュージア川崎を除いて3～6割程度あり、一定の割合で斜路会生活や日常生活を円滑に送れていない経験あるいは状況があるということがわかった。



2. モデル事業からの示唆

① 今回の成果のとりまとめ

今回の実施にあたり、アンケートに「家族以外と殆ど会話をしていない」「やっと外に出られるようになった（ので、映画や演奏の機会を続けてほしい）」といった回答があったことから分かるよ

うに、他者との関わりが薄い状態にある方の参加もあるなど、事業への参加を通じて、参加者の状況変化のささやかなきっかけとなる傾向もみられた。

参加における製作や会話も強制は決してしないことに留意したことで、本事業においては文化芸術活動を通して公立文化施設が家庭や学校以外の第 3 の居場所として位置づけてもらう可能性を見出すことができたと考える。

② 孤独・孤立対策における芸術文化の可能性

本モデル事業においては、「映画」「音楽」「アート」「写真」など、多様な分芸術文化による事業を実施した。芸術文化活動への参加を契機として、外出や、地域における芸術文化活動への参加は個人の能力が問われないことも多いためか、他人とのコミュニケーションや交流のきっかけとなることの優位性は高いと考える。そうした点からも芸術文化をツールとして社会参加を促すことで、副次的に孤立・孤独への抑止効果を生んだと思われる。

特に、文化フォーラム春日井で実施された「アルバム作り」や「聞くこと話すこと」の取り組みは、いずれも少人数であり、「他の皆さんと交流できたことが良かったです」、「なかなか行動に移せないことを、この企画に参加することで着手できました。その機会を与えていただいた」あるいは「同じようなことで悩んだり考えたりしている人と会って話すことができて良かったです」という意見が挙げられており、参加そのものへの喜びや、他者理解に対する声もきかれた。

③ 孤独・孤立対策における劇場等文化施設の可能性

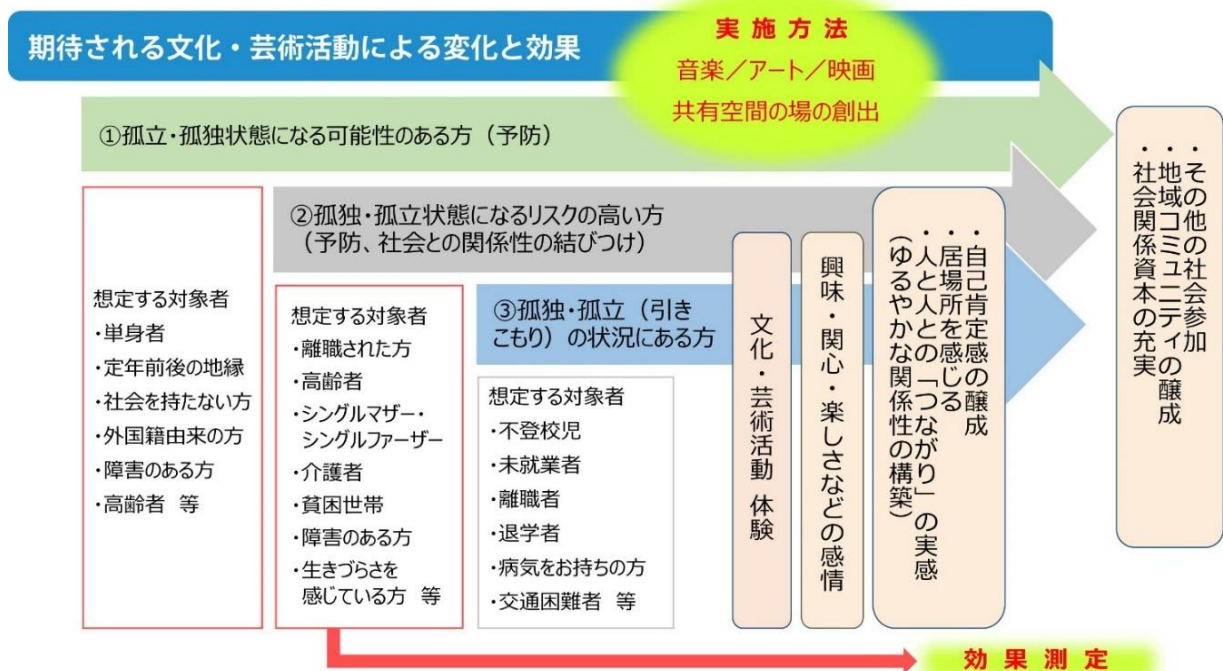
今回の調査結果では、従来文化施設を利用する参加者は、通常、幸福感を感じている方が多い傾向にあり、全体として外出頻度は高傾向であり、一見、孤独・孤立を感じている人とは離れた存在であるように感じられるが、地域においてコミュニティの結びつきが強固ではなく、開かれている場所があることが重要である。

上記の観点からも、劇場等文化施設は新しい社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）を育む場として機能することが可能であることが、今回のモデル事業から示唆された。例えば、今回のモデル事業のうち、文化フォーラム春日井で実施された「アルバム作り」や「聞くこと話すこと」は、その場で形成されるコミュニティであり、全体が目的を持った母集団であるため、一人でも参加しやすい環境ではないかと想定される。

④ 段階ごとの課題と解決・克服への工夫

実施までの課題としては、限られた準備期間であったということもあり、事業の認知を進めること、対象者への配慮からチラシ等に具体的に「孤独・孤立」という単語を打ち出しにくく、広報面で工夫の必要性が生じた。運営面は、職員にとっても初めての試みであり参加者対応に懸念もあったものの、企画段階で準備した対応により実施に繋げることが出来た。

段階	課題	克服・工夫方法
準備	体制 関連団体との連携不足 地域の実態の把握	▶ 伴走支援者の派遣
	把握 (引きこもり等に対する) 知識理解を深める機会の必要性	▶ 勉強会の実施
	広報 配慮から（孤独・孤立という） 単語を打ち出しにくい ↓ 対象者へ確実に情報提供する 可能性の担保の難しさ	▶ 教育委員会との連携 ↓ アウトリーチ型で対応（伊丹）
	集客 事業の認知の拡大 外出を促すアプローチの必要性	▶ 関係団体（教育委員会・社会福祉協議会・商店街）と連携
運営	空間作り 言動や振る舞い、場づくり等 参加者への接し方の試行錯誤	▶ お茶の提供（有償） 和やかな場づくりの創出（川崎・春日井） ▶ 職員も見学ではなく参加 ↓ 参加者の（見られる）緊張感を緩和（春日井：WS型）
	事業評価 短期かつ単発事業 ↓ 参加者の心理的变化の測定不足	▶ 今後の課題 継続的な実施で効果を図る必要
継続	予算 財源確保	▶ 今後の課題



VI. 今後に向けての検討 ～地域交流拠点の整備に向けて～

1. 劇場等文化施設の取り組み

① 参加しやすい曜日、時間帯の検討

今回のモデル事業においても、開催する曜日や時間についての意見が多くあった。平日ではなく週末の開催を希望する意見は多く、一方で開催時間帯については、様々な意見が挙げられていた。

事業によっては、劇場等文化施設の公演事業と重ならない時間帯に実施するため、週末や夜間の時間帯での実施は困難であることが多いと想定されるが、会議室やリハーサル室を利用する事業では、参加しやすい曜日や時間帯を検討することが望ましいと考えられる。

② 継続的な事業の取り組み(定時定常化)

アンケート調査の結果、今回のモデル事業への参加者の満足度は高く、多くの参加者が「また参加したい」という意向を示していた。当該事業を継続的に実施することにより、事業自体の認知度が広がり、参加率が増加することが期待される。

劇場等文化施設が“開かれている”と感じてもらうためには、公演等事業時にも気軽に立ち寄れる、交流できる印象を持ってもらうことが重要である。常時スタッフを配置することは困難であるため、毎回ある一定の曜日や時間で開催されていること（定時定常化）も重要である。

例えば、ミューザ川崎の事業では、一か月に1回開催されるランチコンサートの前後に実施をしたが、継続して必ずランチコンサートの前後に開催することで、利用者に知られることにより、コンサートだけでなく、当該事業を目的とした利用者が増加することが期待される。

③ 参加者によるコミュニティの形成

先述の通り、多くの参加者が「また参加したい」という意向を示しており、当該事業の参加により新たな交流も創出される可能性を見出している。こうした新しい人と人とのつながりを継続して維持していくため、参加者同士のコミュニケーションを持つ場をつくることも重要である。また、それが新しい開かれた社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）となるよう、仕掛けや工夫が必要である。例えば、ウェブ上に参加者によるコミュニティを設定し、日常的なコミュニケーションの機会を作ることの一つの手法として考えられる。

本年度は限られた期間、実施日程となったが、今後の実施検討にあたっては実施回数を増やして、より共有や共感の場をつくること等を検討すれば、よりよいコミュニティ形成も望むことができると考えられる。

④ 中間支援機能の導入と専門人材の育成

今回の孤独・孤立対策の他にも地域における社会課題は多様であり、かつそれぞれの地域によって特性が異なっている。劇場等文化施設は、地域における文化の拠点であるとともに、芸術文化の専門人材の集積である。

こうした劇場等文化施設の特性を活かし、芸術文化事業を通して、地域の社会問題の解決に資する取組を企画立案、実施するための中間支援機能の導入が期待される。同時に、専門人材と施設のマッチングを行うために中間支援組織が情報収集やネットワーク構築を強化することと、そのための予算確保をすることが継続性の担保という面でも重要である。

⑤ スタッフ人材及び予算の確保

今後、本モデル調査で実施したような取り組みを継続的なものとしていくためには、人材及び予算の確保が不可欠である。しかし、現状は劇場等文化施設においてはこうした社会問題に対応した、事業に十分に取り組むことは人材、予算の両面で難しい状況にある。

これに対応するためには、モデル事業を継続することが期待されるが、その効果を自治体等の設置者である自治体への理解を促進し、スタッフや予算に関する項目を当初からの運営計画に盛り込んでいく必要がある。短期間での成果を得ることが難しいことから中長期的に取り組める資金面、人材育成も大きな課題となる。

2. 地域や関係団体等との連携

先述の通り、設置者である自治体の社会問題に対応した、新たな事業に対する理解促進とともに、こうした事業を自治体等、地域の取り組みとして体制を構築していく必要がある。

ミューザ川崎での「コンサートにおける介助支援サービス事業」では、参加申し込みがないという結果になったが、課題を抱える参加者への広報のためには、地域の福祉事業者や社会福祉協議会等の福祉関連機関との連携体制の構築が求められる事例となった。また、伊丹市文化会館での不登校、ひきこもりの児童・生徒を対象とした事業では、教育委員会との連携が広報面で必要であるとともに、「不登校」の解消を目的とする教育委員会と今回の事業との矛盾の指摘も意見としてあったことから、事業枠組みについての十分な協議と連携が必要であることがわかった。

上記の取り組みの事例を踏まえ、地域における社会問題の解決に向かって、劇場・音楽堂等単独ではなく福祉・教育分野に加えて、民間の支援団体やフリースクール、子育て支援団体等の他分野との連携が必要である。広報や募集に協力を求めるだけではなく、事業を共催実施するなど、主体的にかかわってもらえるようなスキームを構築することが重要である。芸術文化を有効に活用するための分野横断的な連携体制づくりが早急に進められることが求められる。

本モデル事業を実施した劇場等文化施設も設置者は基礎的自治体であり、よりきめ細かい地域のニーズに対応できると考えられる。そのため、劇場等文化施設のもつ直接支援機能の強化は喫緊の課題であるとともに、継続することによりその効果が見られると考えられる。

下表は、事業効果（アウトカム）を達成の時間軸で整理したものである。今回のような地域の社会問題の解決をめざす効果は劇場等文化施設と地域が分野横断的に一体となって取り組む必要があり、今後の長期的な取り組みが一層期待されるものである。

事業効果の項目(アウトカム)

アウトプット	劇場等文化施設の取り組み		地域が一体となった取り組み	
	短期		中長期（次年度以降の継続的な取り組み）	
	直接アウトカム	中間アウトカム	最終アウトカム	
参加者 (数)	・ イベントへの参加の動機付け（自発的である必要はない） ・ 興味・関心の発見 ・ 楽しさ、快楽を感じる ・ 他の参加者との会話（施設職員を含む）	・ 文化芸術への関心の高まり ・ 自宅での文化芸術に対する行動（ネット検索、関連書籍の入手など） ・ 他のイベントへの参加 ・ 特定の会話の相手の獲得	・ 家族、職場等以外の居場所（サードプレイス）の獲得 ・ 継続的な文化活動への参加 ・ 地域の団体（サークルなど）への自発的参加 ・ 不特定多数の参加者との対話（コミュニケーション）	
公立文化施設（設置自治体）の職員（数）	・ 社会的インパクトに対する職員の認識拡大 ・ プログラムの企画、実施に関するノウハウの獲得 ・ 通常とは異なる利用者の参加 ・ 文化芸術分野以外の行政部署や団体との連携 ・ 予算獲得への理解向上	・ 政策的意義の獲得（公立文化施設としての行政におけるプレゼンスの向上） ・ 通常とは異なる利用者の獲得（ニーズの把握） ・ 施設を利用する文化芸術以外の団体の獲得 ・ 継続的な予算の獲得	・ 専門人材の獲得（職員の育成） ・ 社会的インパクトの発揮（住民理解の普及） ・ 市民の誰もが立ち寄るオープンスペースの実現（新しい広場） ・ 地域における協力者の獲得（連携団体、協賛企業など）	

資料）G8 社会的インパクト投資タスクフォース国内諮問委員会 社会的インパクト評価ワーキング・グループ（2016）「社会的インパクト評価ツールセット（文化芸術）」G8 社会的インパクト投資タスクフォース国内諮問委員会(<http://impactinvestment.jp/about/>)

3. 弊協会(公益社団法人 全国公立文化施設協会)の役割

弊協会（公益社団法人 全国公立文化施設協会）は劇場等文化施設を統括する団体であり、全国の会員や関係機関を通して情報・実施ノウハウの共有が可能である。またモデル事業の実施施設から、地域性や・団体の規模等を鑑み、モデルを基とした展開が派生することで、広く事業の波及を進めることができる。そのため、中間支援団体である弊協会の役割は以下の3点が想定される。

① 地域の社会問題に対応するための劇場等文化施設の実施意義の検討

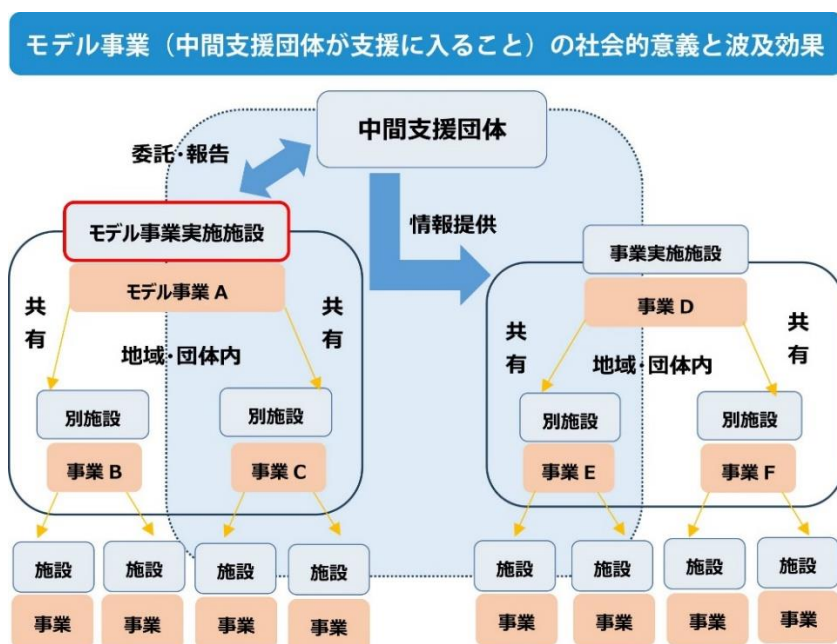
今回のような孤独・孤立対策を含む地域の社会問題に対応した劇場等文化施設での実施意義について、モデル事業を実施するとともにそのノウハウや課題を検討、情報共有の強化を図る。

② 人材確保のための取組

今回のモデル事業の報告書を配布し、意識啓発を図る。実施に向けての細かな調整や各地域で想定される課題なども共有する。また、同時に、地域アーツカウンシルを含めた関係機関や学生を含む若手人材のセミナーへも情報を促し、分野横断的な地域の社会問題に対応した、芸術文化のあり方について、意識啓発に取り組むとともに、地域内での人材ネットワークの構築も図っていく。

③ 劇場等文化施設に対する支援の実施

劇場等文化施設に対して、地域の社会問題に対応するための支援を行う。今回のモデル事業の実施にあたっても生じたように、新しい事業を実施する際の担当者の悩みは様々であり、ケースバイケースの対応が求められる。そのため、弊協会が持つ有識者のネットワークを活用し、中間支援の経験を持つ伴走支援者を依頼し、全国各地の劇場等文化施設の地域特性に応じた有効な取り組みとなるよう、支援の実施を検討したい。



令和5年度「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」
劇場等文化施設を活用した孤独・孤立対策のための
地域交流拠点の整備 モデル調査事業
報 告 書

令和6年（2024年）3月発行

編集発行 公益社団法人全国公立文化施設協会

〒104-0061 東京都中央区銀座 2-10-18

東京都中小企業会館 4F

電話 03-5565-3030 FAX 03-5565-3050